

川柳塔



令和五年十月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷一一五七号

日川協加盟

No.1157

十月号

発刊ご案内

川柳塔

合同句集

刊 創
念 年
柳 塔
百 周

「川柳塔」は大正十三年の「川柳雑誌」創刊から数えて、令和六年で百周年を迎えます。これを記念して合同句集「川柳塔」を発刊致します。

合同句集は昭和四十九年以来十年ごとに刊行し、今回は平成二十六年に続く第六集となります。

同人・誌友はもちろん、一般の方々のご参加も歓迎致します。一人でも多くのお申し込みを心からお願ひ申し上げます。

川柳塔社

☆刊行 令和六年七月一日発行

☆締切 令和六年一月三十一日(水)

☆体裁 B6判・ハードカバー・上製本

八〇〇頁(予定)

☆参加費 五千円(句集一冊呈・送料込み)

☆掲載句 一人 十五句(自選)

☆申込 所定用紙に掲載句(平成二十六年以降の発表句、または未発表句)を記入し、

左記川柳塔事務所へお申込み下さい。なお、参加費は同封の払込用紙でお願ひします。

〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七

☆送付先

〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七

花野ビル二〇一号

川柳塔社 合同句集係 宛

TEL・FAX (〇六) 六七七九―三四九〇

第十二回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第十二回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

課題と選者(各題2句 共選)

川柳塔社

課題吟

「紙」

青砥 たかこ (鈴鹿川柳会)

「誘う」

江島谷 勝弘 (川柳塔社)

島田 略舟 (印象吟句会・銀河)

自由吟

齊尾 くにこ (川柳塔社)

西 美和子 (番傘川柳本社)

自由吟

小島 蘭幸 (川柳塔社)

投句要領

規定の用紙(コピー可)または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。一〇〇〇円(切手は不可)

投句締切

令和六年二月二十日(火) 消印有効

送付先

〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七―二〇一

川柳塔社 誌上大会係 宛

TEL/FAX (〇六) 六七七九―三四九〇

賞及び発表

各題特選に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上

川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

※ 投句用紙は11月号に同封します。

句集『きのこ雲』と反戦作家

小島 蘭 幸

こんにちは小島蘭幸です、被曝78年の今年こうして皆様にお会い出来てとても嬉しく思います。

慰霊碑へ一番熱い日が巡る

伯 峯

被曝50周年平和祈念川柳大会の石原伯峯広島川柳会会長の作品です。

昭和31年8月、句集『きのこ雲』が発刊されました。序文は川上三太郎氏です。

仮名で書くヒロシマの痕に誓うあり

三太郎

ザラ紙に刷って発行された「きのこ雲」は長い間絶版となり、幻の句集”となっていました。昭和63年8月、復刻版として発行されました。その中で森脇幽香里氏は「自らも被爆し、二人のわが子をさがし歩き、何万という人々の地獄図絵をまのあたりにした私としては、核の恐ろしさに、目をつむり、手をこまねいていることはできなかった。核の恐ろしさの真実を、私たちが黙っていて、誰が世界の人々

にアピールすることができよう。その思いが私の心をかりたて句集『きのこ雲』となった」と書いておられます。

髪が抜けると泣いた少女にもう逢わず 午 朗

先生の死屍は大きく手を広げ 木 公

ケロイドをかくす長袖暑く着る タケコ

句集『きのこ雲』は、新潮社の『短歌・俳句・川柳101年』に掲載されています。

無礼なる妻よ毎日馬鹿げたものを食わしむ 夢 道

自由律俳人、橋本夢道は、プロレタリア俳句運動に挺身、俳句事業に連座して投獄されています。

暁をだいて闇にいろ 薔 彬

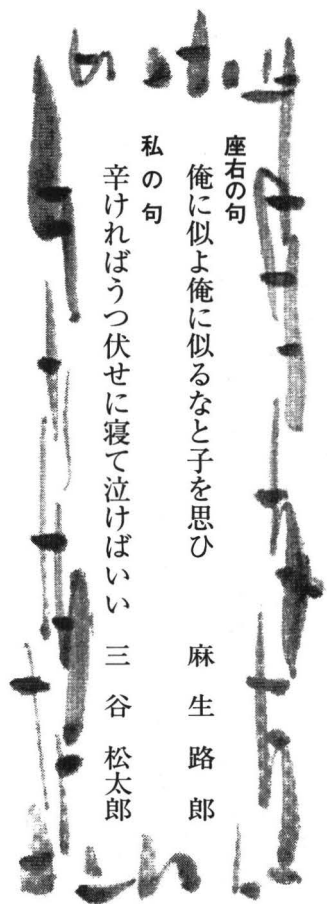
プロレタリア川柳の旗手、鶴彬は、29歳の若さで獄中死しています。

世界平和はみんなの願いです、本日はありがとうございます。ございました。

令和5年8月27日に開催された第74回広島平和祈念川柳大会、私の挨拶の要旨です。

被爆死された川柳人への黙祷から始まる平和祈念川柳大会は、何とも言えぬ重さがあります。

合 掌



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

麻生路郎

私の句

辛ければうつ伏せに寝て泣けばいい 三谷 松太郎

川柳塔 十月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「三日市町秋祭り」

■巻頭言 句集『きのこ雲』と反戦作家……………小島 蘭 幸……………(1)

賢弟愚兄……………高瀬 霜 石……………(2)

川柳塔(同人吟)……………小島 蘭 幸選……………(4)

蒔萩草の花^⑩……………野 沢 省 悟……………(36)

英語 de Senryu^⑭……………吉村 侑久代……………(37)

誹風柳多留一二篇研究 38……………(38)

自選集……………小 西 無 鬼……………(40)

句集の森……………(43)

温故知新……………(43)

水煙抄……………川 上 大 輪 選……………(44)

橘高薫風句集『肉眼』……………(59)

愛染帖……………新家完司選……………(60)

檸檬抄「本 氣」……………鈴木いさお・川本真理子共選……………(64)

賢弟愚兄

高瀬 霜 石

世に、川柳句集は山ほどあれど、重版になるのはきわめて稀であろう。

僕の手元にある『加藤鯉川柳句集 かつぶし』は、その稀な句集のひとつだ。

静岡の鯉が(ごめん、弟分なので呼び捨て)亡くなって、もう6年になる。

僕よりひとまわり以上も年下なのに、52歳の若さでこの世を去った。

末期の脾臓がんで、余命半年と診断された彼は、急いで句集を編んだのだった。

「かつぶし」のあとがきから。

——高瀬霜石さんと知り合ったのは「化粧川柳」という企業応募川柳で霜石さんがگرانプリ、僕が準賞を頂いたのがきっかけであった。とにかく霜石さんの句は明るくてユーモアに溢れていて、僕はたちまち大ファンになった。そして思い切って青森県弘前市のお宅まで押しかけて「弟子にしてください!」とお願いしたのである。ナン

一路集「やがて」……………村上玄也選……………(68)

初歩教室「道」……………石澤はる子選……………(69)

川柳塔鑑賞……………平井美智子……………(70)

水煙抄鑑賞……………内田志津子……………(72)

せんりゅう飛行船⁽⁵⁴⁾……………牧野芳光……………(74)

インスピレーション・ナビ 印象吟……………新家完司……………(75)

■句集紹介「ここでゆっくり」小谷小雪著……………大西泰世……………(76)

川柳塔なら創立25周年記念誌上大会に寄せて……………川上大輪……………(78)

『麻生路郎読本』余滴⁽⁷⁸⁾……………中原比呂志……………(79)

九月本社句会……………栗原道夫……………(80)

各地柳壇(佳句地十選／藤井則彦・渡辺富子)……………(82)

柳界展望……………(87)

第25回全日本川柳誌上大会 入選作品……………(100)

十月各地句会案内……………(101)

■編集後記(ひとこと／饗庭風鈴)……………道夫・眞澄・憲彦……………(102)

座右の句……………(104)

人生にときどきふつてわくメロン 芳賀博子……………(104)

私の句……………堀本のりひろ……………(104)

トズーゾーしくて訳のわからないヤツだと思われたことだろう(笑) 霜石さんは「弟子にすることは出来ないけれども兄弟になろうや。今日から鯉はオラの弟になるべ」と契りのネクタイ(一升瓶の柄)とネクタイピン(鉛筆の形)をお揃いで身につけるようにプレゼントしてくれた。それらは今でも大切にしていって、選者をする時には身につけるようにしている。

霜石さんだけでなく、僕は本当にいい先輩や仲間恵まれて幸せだった。川柳をやって本当に良かったと思っている。あちらで句会の準備をして待っているから皆もゆつくり来てほしい。ありがとう。本当にありがとうございました。

平成27年秋 加藤 鯉

出不精の僕が、鯉に誘われるまま全国大会などに出かけるようになり「塔まつり」で、憧れの鬼遊さん、正坊さんにも会えたと、蘭幸、完司、楓葉、朱夏諸先輩の知己を得ることができたのだった。

弟は富士山 兄は岩木山 霜石



小島蘭幸選

越谷市 久保田 千代

動けない主人見舞って痛むもの

働いた末に孤独と闘病と

生きるのは楽ではないと知る介護

肩書きで生きた過去などすぐ剥ける

平和主義痛みを知らぬ子が増える

鉛筆も削れない子が人を刺す
豊中市 水野 黒 兎

玉砂利に染みついている負の記憶

本棚のカミユが青春呼び戻す

ビール一杯余分に飲んで誕生日

銀河なお煌く里の父祖の墓

愛嬌のあるデスマスク蟬落ちる

大正の母に令和は霧の中

岡山市 工藤 千代子

素麺以外メニューが浮かばない 暑い

残暑お見舞いの音で鳴る風鈴

受け入れた老いが自由をくれました

あったかい手ですな幸せなんですな
家計簿を開くと洩れるドッコイシヨ
肉の無いカレー怖くなかった昭和

大阪市 平井 美智子

お元氣ですかあの夜の月を送ります

さよならの手紙に誤字が二つある

本心は見せないままで焼きプリン

瘡蓋を捲れば海の荒れる音

哀しみの形に散ってゆく火花

八月の祈り緑の風が風ぐ

松山市 大内 せつ子

モジリアニに愛されたいとふと思う

内緒話とびら開けると鳥になる

なぞなぞが解けたら僕は帰ります

コバルトブルーに沈めた嘘は消えません

蟻さんの行列 深夜便を聞く

フィルターで救えなかったことばかり

松江市 石橋芳山
あさつては咲きます晴れの日が続く

よく喋るラッキョのような人
消し炭になつてく自己嫌惡進む

強風に自我を磨いて浮くカモメ
空瓶の कोरोコ 淋し過ぎる夜

葬儀屋の裏にパンツが干してある

犬山市 金子美千代

地球よゴメン怒り静めて下さいな

絶好の読書日和にする猛暑

寿命との兼合い家電買い替える

デジタルは苦手と言つておれぬ世に

鈍感力ついたかふわふわ日が過ぎる

シユワシユワシヤリシヤリチリンチリン盛夏

笠岡市 藤井智史

氷点下千度の孤独救う愛

太陽光発電をする脳味噌

許してください 呑みたいときもある

憂鬱の特効薬に読む句集

わたくしの心の中はピカソです

柳界のピンチ 召喚するホープ

鳥取市 前田楓花

カルシウム摂れと毎日ちりめんじゃこ

カップ麺晩ごはんなら叱られる

人脈も出来た古希まで生きられた

国盗りの欲がブーチン狂わせた
八十億の中の一人があなたです
原爆の日のヒロシマは蟬しぐれ

今治市 永井松柏

蓮根の白さは示唆に富んでいる

噂話についた尾ひれに毒がある

密室で繰り返される茶番劇

韻を踏みながら歴史は繰り返す

病人になるため病院に通う

井の中で夜郎自大に気づかない

尼崎市 山田耕治

採血の痕を娘に見つけられ

ファイトファイト八十六の誕生日

眠れないのと施設の姉の電話

クリニックで亡母をよく知る人に会う

ユニセフのシャツを一枚買いました

まるちゃんもたまちゃんもいる通学路

鳥取市 岸本宏章

乱開発のしつぺ返しか土石流

強いられた忠誠心が恐ろしい

天日干し人間だけの知恵だろう

泣く笑う眠る赤児の自然体

亡母の味俣ぶコンビ二塩にぎり

家族数で比較はできぬ電気代

大阪市 川 端 一 歩

幸せな今日一日を句で閉じる
長寿の秘訣聞かれてハハハ笑うだけ
生き方は花より団子これも良し
まびき菓を上手に炊いてくれた母
老春という花があり水をやる
ケチとズル僕にも少しあるようだ

東かがわ市 川 崎 ひかり

ウナギ半匹乗り切れるのかこの猛暑
未婚化で進む過疎化に老人化
夏越祭遺影と見てる遠花火
ステテコになると男は皆同じ
無言劇主役身に付く七回忌
喜劇役者見せてはならぬ舞台裏

奈良県 長谷川 崇 明

日曜日ぶらりぶらぶら梅田地下
歩かねば水を飲まねば六千歩
便利さも煩わしさのあるLINE
何時何処で雨が降っても記録的
レシビなどないが美味いぞ男メシ
娘の帰省今日は華やぐ物干し場

岸和田市 岩 佐 ダン吉

夢ですか明かすときと笑いはる
割り勘の端っこ俺が見ると言う
だらしな奴だが校正の名手

信号の赤に一こと言うてやる
たぶりの墨で私はノーと書く
痛いところ衝いてきましたありがとう

米子市 竹 村 紀の治

極楽を目指して無駄な努力する
ちよつといい話テレビに拍手する
呑み会の出欠握る検診日
行き付けの店の灯りがまた一つ
不意の客ビールが冷えておりません
優先席微妙な幅が悩ましい

大阪市 宇 都 満知子

真夏のおでんたくさん食べてくれました
方言が元氣な故郷の電話
この先を思案する夜の缶ビール
相槌がすこし遅れます爺ちゃん
先輩の助言が腑に落ちて晴れる
靴を履く時電源が入る

大阪市 小 野 雅 美

比べたりしないワタシは私です
今日は何ができたかと問うカレンダー
眠れますように枕を買い替える
帰宅後の楽しみビールよりアイス
マニキュアは剥がれ財布はくたびれて
叱ってくれた父おとなしくなつてゆく

名古屋山本三樹夫

金婚から波風立たぬ空気生む
電気代苦にして暮らす部屋の隅
国会の議員になると視野狭い
本気なら手抜きと力違うはず
平和条約ブーチンの後考える

犬山市 関本 かつ子

スーパ―をゆっくり回り涼をとり
九十も普通になつて来る長寿
なでしこの頑張り夢をもう一度
コロナ明けもうすぐ会えるあの笑顔
エアコンも畳も替えて子等を待ち

豊橋市 西郷 紀美代

しゃがむより椅子が必需の草むしり
しがらみを捨てて卒婚憧れる
曾祖父に助けられたと盆の墓
リピーター多いチョコだがちと高い
猛暑日は水道水も温めです

石川県 堀本 のりひろ

ずーとずーと咲かずに生きてはや八十路
妻入院すつと寂しさ同居する
老い二人口を開けばグチばかり
目指せ百歳玄孫に会える夢抱いて
眉間ジワ一本増えて八十路越す

各務原市 喜多村 正儀

侵攻の戦車が迷い込む迷路
押し花の痛みを知った日の渴き
しがらみの拳手も混じった多数決
ひと匙にのせて含ますありがとう
ちさい花ながく咲かせるのも個性

可児市 板山 まみ子

猛暑日はもう飽き飽きの夏休み
ウクライナ思えば猛暑嘆けない
半世紀前は三十度で暑い
六歳で日本が負けた日の記憶
サッカ―のなでしこ花言葉どおり

京都市 清水 英旺

勝てば官軍といわせないブーチンさん
鎮魂の夏次々と亡き友の顔
きょうという日があつてこそ明日がある
思い出の大半どこかに置いてきた
まだマスク手消毒してウィズ・コロナ

京田辺市 北野 クニオ

朝食がおいしい時はウエルネス
暑気払い言うて毎日酒を飲む
山の神偶にや御留守が心地良い
好きな事やって暮れれば長生きに
苦勞人問題抱え耐えている

長岡京市 山田葉子

これって猛暑水栓ひねりお湯が出る
住職のお経スピードアップする

努力家に見えてたけれどよく遊ぶ

賀茂なすをじっくり焼いて暑氣払い

コリウスの葉夏の花には負けてない

八幡市 武田悦寛

夏の風弱気をひよいと裏返す

手術終え少しはにかみグータッチ

かさ立てに傘と並んでへんろ杖

2階から見えた見えたと花火酒

出来不出来遺伝のせいにしておこう

大阪市 東敏郎

天国を下見に行ったままの父

安倍マスクプレミアつかず処分する

生玉子眉を顰めて見る価格

鏡にはスッピンの顔見せてます

試着室入ったままの夫待つ

大阪市 石田孝純

葉っぱ色の里砂色の都会 夏

天を衝く積乱雲のガハハハハ

五歩歩けば夏の雫が額から

一本勝負暑さVS蟬の声

アリンコが四股踏んでいる炎天下

大阪市 岩崎公誠

階段は一段づつと無理をせず

コスパから選んだランチ続かない

デイに出てやる気の友と握手など

勝てぬこと承知の上でまだねばり

恩返し考えている間に進む老い

大阪市 内田志津子

大人になったなしっかり主張する

三年ぶりキャリーバッグが闊歩する

失態は部下のした事なんてねえ

あとひといきあと一息とペーじくる

孫の冒険初めての一人旅

大阪市 江島谷勝弘

この頃はスルメ高くて焙れない

故障ゼロ十六年目のマイカー

アホですわアンパン巡りしています

豆類がすべて大好き元氣です

うれしいねちよっと一杯行くらしい

大阪市 榎本舞夢

落ち着かぬ世相の内に夏休み

校庭は百周年に燃えている

盆踊り本格的に櫓建て

校歌音頭練習励む親も子も

一方で戦争してるこの世相

大阪市 大川 桃花

引き出しの開け閉めふえて日が暮れる

お地藏さまみつつも越えて行く眼科

語らない所に悲劇かくれてた

難聴だった父の無口が解る今

何もかも裏目そんな日もたまにある

大阪市 大沢 のり子

猛暑です蟬の鳴き声聞こえない

泣けてくる母の浮きでたあばら骨

丁寧に洗った母の足の裏

特盛のナスで三品出来上がり

なんとなく幸せ今日も普通の日

大阪市 奥村 五月

プーチンに地獄の動画送りたい

絵馬の数これで合格はずせない

熱中症恐いが今日も缶拾い

あの世では帰りの道は教えない

携帯で遊び結婚忘れてる

大阪市 古今堂 蕉子

歳とれば益々似ます姉妹

生き方で脳の成長助長する

しみじみと見てる怪我した足の裏

落雁のうまさがる歳になり

孫二十歳つるつるの肌黒い髪

大阪市 近藤 正

ベールブルースを超えた翔平驕りなし

豪雨と熱波地球の呻き声がする

核抑止無用と総理プーイング

彬忌をなぜ歳時記に載せんのか

島民を生贄にして基地地下化

大阪市 坂 裕之

こつこつと育てた花が咲き誇る

真つ直ぐに歩いてるのが辛くなる

あれこれと言ってくる人たまに居る

会えばすぐオイと呼び合うクラス会

どうなるか分からないから楽しいの

大阪市 高杉 力

終章に少しマチスの赤が欲し

これ以上好きだと言えば罪になる

よく吼える犬と紹介状にある

カピバラは争うことが大嫌い

座右の句いつか超えたいとは思う

大阪市 高杉 千歩

朝一番幸せですと叫びます

外出用靴が並んでお待ちかね

うっかりしていたら百まで後三年

何くそと思うばかりで動けない

お仏壇空き家に置いたままお盆

大阪市 田 中 廣 子

大阪市 寺 本 実

山の朝頂点に立ち御来光

若者にかこまれ若さ保つて

母を見る幼子の目キラキラと

無駄ですが孫とやりとり楽しいな

北ミサイル民の疲弊はどうなるの

大阪市 田 中 ゆみ子

九割方友が喋って電話切れ

役にたたない話で盛り上がる酒席

異文化をかすかに纏い子の帰省

欲しい物が無い淋しさを知ってるか

昼寝している間に柿が色づいた

大阪市 谷 口 義

妹は花を摘んでた終戦日

平凡に生きる上等ではないか

おばあさんにもカチワリの思い出がある

おくすり手帳持って長生きしています

介護保険掛けてます使っています

大阪市 寺 井 弘 子

コスモスの大地の風とたわむれる

いやな予感飲み込んだぐち疼きだす

不況期に仕事有るだけ有り難い

そわそわと借り物持って落ち着かぬ

長電話そろそろ椅子を用意する

方言が抜けてしまった子が戻る

難しい人だ笑ってばかりいる

ほどほどに文句をつけて買わず去る

抜け道と思ひ迷路に迷い込む

暑いなあ地獄に住んだ気分です

大阪市 中 井 萌

賢人は無駄に苦勞はしていない

八十の壁は高いか分厚いか

同姓の表札についほくそ笑む

レジ前の菓子の誘惑侮れぬ

行きませんお得ランチのない曜日

大阪市 原 田 すみ子

真夏の扇風機ぐらいの戦力

暑さにも寒さにも顔は正直

じりじりと猛暑 元気を溶けさせる

無口でもここにいるぞと咳払い

クーラーひと部屋否応無く一緒

大阪市 平 賀 国 和

孫が来てお盆の我が家夏まつり

後期だがまだ若いよと役が来る

妻は町会僕は句会のお世話役

叔父の急逝八十の壁思ひ知る

地獄見た叔母も被爆者被爆忌

大阪市 降 幡 弘 美

店員にすすめられたら断れぬ
ほとんどが期限切れてる調味料
本当の球児の敵はこの暑さ
好きな人がいるから全部がんばれる
赤児抱くように優しく持つ豆腐

大阪市 宮 崎 シマ子

ホームの行事ミニ花火に参加
用意万端ヘルバーさんようありがとう
九十八歳の手に持たせてくれた線香花火
幼い時兄妹にあつた線香花火
草笛を吹く少年の目に涙

大阪市 山 本 加お里

氣いつけやお互い言つて切る電話
マスク越しでも内心が見え隠れ
翔平のスゴイプレーに癒される
少しでも成長したな傘寿きて
あんた誰我が子忘れた母がいた

大阪市 横 山 里 子

初蟬か思えば耳の誤作動か
どの医者も「歩きなはれ」の一言で
ウォーキング朝は眠いし夜怖い
夏バテに友の手製の十薬茶
楽しい人だと思われて泣けない

堺市 今 井 万紗子

余力ある内せっせと徳を積んでおく
この暑さだあれもない散歩道
言い聞かす今日が一番若いんだと
今日もまたメダカ五匹がお友達
夏の宿題じいちゃんついに駆り出され

堺市 柿 花 和 夫

玉砂利の音を励みに百度石
羅漢にも後悔してる顔がある
愛犬も孫もじじばば使い分け
あの世へは遅刻をせずに逝つたやつ
老い二人月下美人と睨めっこ

堺市 栢 原 道 夫

シャーペンの消しゴム使う羽目になり
赤鉛筆がたやすく折れたのも昭和
いたずらが好きでたまらぬ文房具
筆箱に危ういものが紛れ込む
筆箱の中の自由は守り抜く

堺市 源 田 八千代

熱中症警戒アラート其処彼処
あなたの静かさ尊びますと師のサイン
妹生まれ頼もしくなった二歳児
しっかりと二歳の姉の仕草観る
育児上手と若いママさん褒めたげる

堺市 齋藤 さくら

若人の歌声響く甲子園
ナストマト胡瓜もうまい夏の膳
五十点取れる人生めざしてる
何やかや言うてはるけどお人好し
ゆつくりと歩こ二人三脚手をつなぐ

堺市 坂上 淳司

スキップで帰る子らさあ夏休み
スキップで登校今日はプールの日
軽々と抱き上げた孫今はパパ
肩叩き切符で軽くなった肩
無事着いたの電話に肩の荷が下りる

堺市 澤井 敏治

朝顔の熱中症を見ましたか
節電かな明かりの減ったけもの道
自粛ふえ終バスダイヤ早くなる
一人ではムリ様変わりした梅田地区
形状記憶していたはずが迷いだす

堺市 内藤 憲彦

大阪は安い旨いにまごころも
心では妻の背中を拝んでる
ご無沙汰に酒を供えて墓洗う
少年の顔して古里を語る
熱中症へ号令かけて水を飲む

池田市 太田 省三

若者の腕力欲しい水害地
キッチンで生きる力を産むところ
学園祭ゆるキャラショーに人だかり
チャネルを間違えたまま見るドラマ
シベリアに甲種合格なお眠る

貝塚市 石田 ひろ子

コロナ禍の誰にも会わぬ墓参り
献立表帰省の孫孫に合わしてる
ひと時の心安らぐ盆供養
老人に優しいアンティークな喫茶
うかうかと生きてやがては秋になる

貝塚市 吉道 あかね

何人も夜空に浮かぶ遠花火
夏つばきもしもの時を聞けぬまま
サヨナラの文字が乾かぬまま秋に
ドキドキの術後三年クリアする
淋しくて大きな声についてゆく

柏原市 津村 志華子

夕茜静かに今日を閉じてゆく
幾度の転居最後にケアハウス
生きすぎて疲れ果ててる影法師
ご近所と相身互いで丸く住み
高齢のヨイトマケですどっこいしょ

河内長野市 大島 ともこ

この命どこまで燃やし続けるか
もうちよつとも少し見せてこの景色
はんやりと「幸せ」の字をなぞる今
陽炎の先にくつきり私の図
トップ死守このストレスは分かるまい

河内長野市 木見谷 孝代

神社まで歩いて試す今日の膝
賽銭は少し頼み事も少し
散歩コースのグラウンド閉鎖という知らせ
クーラー漬けて高校野球女子サッカー
ほおずきを飾り華やぐご仏壇

河内長野市 坂野 澄子

空想が好きなたしは無限度
絞首刑にしたい男がひとりいる
花束になれぬ彼岸花の憂い
バランスはやっぱり母が振るタクト
瘡蓋が剥がれて微罪ひとつ消え

河内長野市 中島 一彌

久々の汗は空き家の草むしり
愛用の藤椅子出して迎え盆
帰省子よ今年も来たね黒揚羽
もぎたての夏丸かじりするトマト
12桁味も素っ気もない私

河内長野市 藤塚 克三

償いはカネモノでなく思い遣り
こだわりを止めたなら視野が広がった
余生でも愚直に生きて終の章
汗涙流した後は願ひ華
拾う神留守か賽銭効きめない

河内長野市 村上 直樹

6Bの太さ猛暑よいざ勝負
大切にしろよ命短い蚊を払う
もう少し気張れ少子化国の明日
久々の母の手料理子に還る
穏やかな余生曾孫に子やあなた

河内長野市 森田 旅人

成人の孫いきなりのツーショット
勉強もきつとしてると子を思い
子と会える出張パパのよりどころ
あの孫が嫁にしたいで一位だと
守りあい泣くも笑うもひとつの絵

岸和田市 雪本 珠子

一病を手懐けながら今日も暮れ
一日が長い淋しい日曜日
人生の答出ぬまに曲がり角
こんな世は素直になれぬなんとなく
バラ色の人生だった筈なのに

労りの言葉の陰にある期待

吹田市 太田 昭

ひらかなの似合う女が酌に来る

迷路から抜けるヒントを風に聞く

奇人を囲む俺も変人かも知れぬ

老ろう介護接ぎ木の紐も緩み出す

高槻市 片山 かずお

後期まだ遊ぶつもりのを靴を買う

歳ですからを枕ことばにする後期

口ほどは体が動かない後期

妻に手綱を持たれて関白を演ず

妻がいらないと何もできないのに威張る

高槻市 島田 千鶴子

身勝手なヒト科が地球狂わせる

酷暑きてまだまだ続く家籠り

百日紅酷暑に負けておられない

今日もまたそうめん湯掻く夏盛り

友の窮地聞くしかできぬ腑甲斐無さ

高槻市 初代 正彦

それなりに妥協している土踏まず

なるほどと試す夕食後の散歩

義理がたいオトコの寄って暑氣払い

斜陽のパチンコ屋にぎやかな飲み屋

AIの進化世の中どう変わる

病院は休みお寺は無休です

高槻市 富田 保子

A型はもしもの構え先にする

ぬか床も賑やかになる夏が来た

髪染めて用もないのにシヨッピン

失敗も美談に化ける八十路坂

高槻市 鳥居 宏

ひよろひよろの腕にもやはり蚊はたかる

極楽へちよいと昼寝の扇風機

冷房の窓に涼しい夏の空

草むしり雀ちよこんとついてくる

被爆国なぜ核禁を語らない

高槻市 松岡 篤

炎天を怖がりながら墓掃除

クーラーは休暇も取れずすみません

立ち話までも奪っている暑さ

まだ嫌だマスク外した人の横

入念な気温チェックと水補給

豊中市 池田 純子

レトルトと冷凍食でおもてなし

ピーキヤーが去ってふたりの朝ごはん

冷凍庫すき間ができて息をする

いい時代だったと友と振り返る

入道雲が七変化して大あばれ

豊中市 上 出 修

腹の虫治まらなくて下剤飲む
会期末玉虫色でシャンシャンシャン
丑三つ時目が冴えてくる本の虫
雷鳴に夜の空気も震えてる
腰回りサイズを聞いてゴムにする

豊中市 きとう こみつ

週に一度は気合をいれてする掃除
私好みのムツシユの店で買う野菜
フランスで鮎ちゃんあげて道を聞く
大阪のおばちゃん花のパリに行く
挨拶がわりにカンロ鮎などいかがです？

豊中市 藤 井 則 彦

寂しいな知らぬ間に減る日本人
思い出から導く明日のエネルギー
老後ではない日もあるという八十路
ナツメロに涙を流す歳となり
独断をするのも事を為す術か

豊中市 松 尾 美智代

体温を越える熱さに耐えて秋
静かに咲いて今日一日の沙羅の花
朝歩き待つててくれる月見草
会いに来てくれる元気な孫の靴
愚痴を言うたびに私が小さくなる

豊中市 松 田 蟻 日 路

これ雀日陰の風で息つけよ
皿洗いすませて覗く冷蔵庫
梅雨あけて日暮れの雨が偲ばれる
竿の先飾りの様に赤トンボ
四年振り通りに光る山車の列

富田林市 中 村 恵

急がねば雲の梯子は外される
満面の笑みで隠している涙
許す気はあるのに謝ってくれぬ
いつの間にかいない泣き虫怒り虫
大きな溜息はひとりのときに吐く

富田林市 山 野 寿 之

母の手は温い絆の幼い手
憧憬の的寅さんのぶらり旅
人間の自然破壊が生む被害
ただいまがお帰りのさい聞く阿吽
娘のセーター解いて孫のベスト編む

寝屋川市 川 本 信 子

体温を二度越す猛暑立ち眩み
帰省なしそれぞれ盆の過ごし方
「北国の春」テープの中で歌う母
プライドは内ポケットの中に有る
少しずつ退化の脳で五七五

寢屋川市 伊達郁夫

立ち止まる余裕をくれた道の花

のんびりと朝顔萎むまで朝寝

ハツとする入道雲が亡父の顔

笹舟の流れる先にある孤独

微力でも差し出す片手空けておく

寢屋川市 富山 ルイ子

日本中どこも炎暑に包まれて

スカスカと知らず胡瓜を友にあげ

娘婿一人で秋田旅行中

夏ヤサイ朝夕水やり大変

夏ヤサイの手入れ何時もありがとう

寢屋川市 平松 かすみ

バースデー娘シニアの仲間入り

アルバムの手足の型は宝物

子育てはお隣さんに助けられ

オレオレは我が家に居ます御安心

都合よくお留守の庭に雨が降る

寢屋川市 廣田 和 織

貧しさと淋しさに耐え老いていく

深呼吸忘れて僕を見失う

歎ひとつ老いた親父の手になじむ

転職の覚悟大きく深呼吸

私の正体分かるまで捲る

羽曳野市 磯本 洋一

髭生やす貴方何方と妻までが

アルバムを開き忘れた傘寿今

妻指輪メッキ剥けても光つてる

枝豆が大豆と知らぬ都会っ子

破れ靴父の形見で下駄箱に

羽曳野市 宇都宮 ちづる

甲子園知らない人とハイタッチ

長い列ひと先ず並ぶ好奇心

初回限定安いと買った不要品

連絡船かもめがずっと付いてくる

的はずれの答は補聴器のせい

羽曳野市 徳山 みつこ

毎朝会釈するけど名前知りません

経過いいと医師が咳きほつとする

病院帰りルンレンと花を買う

ライバルとも握手妥協点探る

憲法と軍拡の論点がずれる

羽曳野市 藤原 大子

認知症褒め言葉にはいい笑顔

教員の離職放っておけぬ鬱

まあいいか許して楽にする自分

悩む間は無いと七日を生きる蟬

老い方の見本は先を行く夫

羽曳野市 三好 専平

肩の力抜いて一局夏嵐

声涵れて怪物となる溽暑かな

心ボロボロからだピリピリ秋の水

かくや姫演歌うたいて泣くばかり

憤怒すべなき卒寿の桃源郷

東大阪市 佐々木 満作

ライブラリー読書三昧の避暑地

ストレスも暑さもビールで吹っ飛ばす

赤とんぼ稲穂の先で思案顔

家電品買い換え躊躇する齡

電気代気にせずエアコンのお世話

東大阪市 西村 哲夫

縁側に風鈴消えて風は来ず

見逃した出合いの多き恋のこと

粗大ゴミその人生を捨てずいる

自我の花咲かせた縁を喜ばず

スマホ使用嫁が説教してくれる

枚方市 英也

大谷でも隣の鮎が甘いです

大谷に負けじと飛ばせ甲子園

八十路です歩けるときに歩いとこ

いい香りふらふら入るパン屋さん

段段畑先人の汗偲ぶ過去

枚方市 栃尾 奏子

楽しさは二乗だ夫婦川柳家

夫真面目出来てなくても行く句会

付いて来た夫がハマった五七五

月イチの力試した塔本社

待ってます川柳塔の輪の中で

枚方市 藤田 武人

結論が出ない話を繰り返す

隣席でお裾分けしてから夫婦

ブライドが勝利拳が下ろせない

柵も肩書も取れ回遊魚

四年ぶり常連客が顔を見せ

藤井寺市 太田 扶美代

某月某日今日から夫の杖になる

まだわたしについてくる気の影法師

のんびりだけ悲しい事はたとある

お肌力サカサ恋を忘れてからずっと

仲直りのきっかけ朝顔が二輪

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

内科歯科どの椅子にもあるドキリ

コマーシャルばかりを皿に盛りつける

風のない日の風鈴はそぐわない

姉の歯並びきれいだったわかき水

先生が泣いて敗戦知りました

藤井寺市 鈴木 いさお

箕面市 酒井 紀華

跡継ぎがない棚田に星が降る
損得ぬきの付き合い出来る友がいる
シャトルバス眠ったままで二往復
愛の讃歌口遊みつつ行く八十路
推敲を重ねて佳句へまだ遠い

藤井寺市 吉田 喜代子

米寿超え捜し物増え忙しい
三十八度我が体温をポンと超え
若いねえ猛暑の中の甲子園
お参りもクーラー無しの墓の水
暑くても夕立あつたその昔

松原市 森 松 まつお

熱燗と昭和歌謡に酔っている
お小遣い値上げ交渉決裂す
好きな事でメシが食えたら至福なり
堂々と募集している闇バイト
それなりの人降りてきたダットサン

箕面市 大浦 初音

愛の花アガパンサスが咲きました
食べた後せめて食器は運んでね
都合よく物忘れするおじちゃん
子供の頭クエツシヨンマークぎつしりと
考えすぎ心配性で疲れます

歯を抜いて美人になったシンデレラ
事件後に防犯カメラ本気だす
遺言書 仏壇の奥 奥にある
お迎えが来るまで生きる自助努力
雨に煙る思いを抱いていい時間

箕面市 出口 セツ子

土用の丑今年は誰もつきあわぬ
国産のはずが今年は美味くない
独りでは食後の茶店つまらない
遊ぶブランいっぱい入れるカレンダー
悔いのないように生きろと砂時計

箕面市 中山 春代

空っぽと知りつつ洗う父の墓
化粧して出る気になれぬこの炎暑
ゆっくりでゴメン苦手なセルフレジ
卓袱台へいとこ・はとこの遠い夏
つまみ食いうふ塩分補給中

箕面市 広島 巴子

サファリーのトラも熱さで寝転がる
ペンギンのヨチヨチかわいなお出迎え
おおパンダカメラ目線で笹食べる
クーラーを入れてご先祖お迎えを
おまちかね孫とスイカの種飛ばし

八尾市 寺川 はじむ

お笑いトークさんま御殿に見る極意

駄洒落にも笑い渦巻くウサギ小屋

笑いと涙コント猛暑の解熱剤

二刀流と敵も味方になりたがり

恐怖のネット甘い言葉で誘い出す

八尾市 村上 ミツ子

エアコンつけてのんびりみてる野球

夏休みはないが年中休みです

帰省ラッシュユマस्कしている人もいる

かなしいが挫折に慣れてきてしまう

テレビ見る元氣なくなるほど暑い

大阪府 米澤 俣子

またとない今日という日がいとおしい

蛇口からぬるま湯が出る猛暑

何するにもスロー老いにはかなわない

衣食住充分足りて感謝だけ

ますかけの手相の曾孫幸あれ

神戸市 上田 和宏

人が減り生ごみが減りカラス減り

子供減り見守り仕事すぐ終わる

妻が呼ぶ磨いた窓を見に来いと

ひと休みしないと出来ぬ次のこと

ひとまずと今日一日を締めくくる

神戸市 奥澤 洋次郎

気をつけねばいかんと思う我慢慣れ

悪ぶってあなたも弱い人なんや

台風にいきいきしているワイドショー

妻逝つて愚痴をこぼせぬ淋しさや

天賞をもらい調子がおかしなる

神戸市 城戸 誓子

言葉より少しの温さ下さいな

青サギも優雅に芦屋ビオトープ

バーチャルで想い叶えて亡父と呑む

かば焼のにおいとタレでもう一杯

非情な国食料までも武器にする

神戸市 興水 弘

夫のいびき二十年耳栓代える

子ら育ち身軽になつてボケ始め

話し上手いね言葉の軽さ言われてる

ほぞをかむ数えきれない教訓と

ぐうたらを奮起に変えた二刀流

神戸市 近藤 勝正

墓参りだけのさみしい盆帰省

古里は心に残す古いまま

この夏も一台増えた扇風機

この暑さ過ぎりや懐かし過去のこと

ヤングケアラー孫に囲まれ好好爺

神戸市 斎藤 隆浩

ゴミ当番早く起きろとセミ時雨
押し入れに眠ったままの健康器
品薄と皆が言うから品薄に
優先順親は目当り子は電波
責任は取れないけれど責任者

神戸市 敏森 廣光

エアコンが夏の私の命綱
爺ちゃんもやつぱり夏は半ズボン
青空よ雲よ私も自由だよ
百日紅あんたはほんま強いなあ
孫と会う今日だけ杖はやめとこう

神戸市 富永 恭子

白黒を言い切ることの難しさ
まったりとアイスモナカを半分こ
塩飴をころがしながらウォーキング
丸い背にあなたが老いていく不安
しあわせで元気に見えているらしい

神戸市 能勢 利子

人混み無理とテレビで見てる大花火
熱中症の対策鍊って甲子園
日中はエアコン点けて野球見る
涼しくなれば半額になるお買い物
日が落ちて打ち水すればなお涼し

神戸市 松倉 正美

お盆玉仰山並べて孫を待つ
約束通り今年も向かう九段坂
吊床で猫と微睡む昼下り
性善説までも裏切る中古車屋
通夜の席同窓会に早替わり

神戸市 山口 美穂

この暑さ怠け心を認めあう
地上の酷暑知らんかったと蟬が鳴く
夕飯の一品として冷奴
草木の吐息きこえる炎天下
鏡のわたし認めたくないけど私

神戸市 山崎 武彦

薄味に慣らされ妻の軍門に
座蒲団の端でよろめき歳を知る
捨てられぬ父の匂いの文机
すいとんの記憶に八月十五日
戦争は懲りたが原発も不安

明石市 梶谷 和郎

明日を抱く両手はいつも開けてある
おろかさに気付くまで続ける戦
破れ傘の下で平和を噛みしめる
たまには許そう何もせぬ日のわたし
温もりは思い出せない亡母の膝

芦屋市 荒牧孝子

極暑化で怒る気力も出てこない
無様でもいいありのまま過ごしたい
責めないで正解ないよ人生は
一言が足りないだけで誤解生む
墓参り乾杯しようお父さん

芦屋市 竹山千賀子

ふる里に立つて心の窓全開
大丈夫お洒落心は残ってる
ありがとう身につけ日々が恙ない
炎天下負けるもんかとねぎ坊主
廃校の跡地にホーム世の移り

芦屋市 新阜義明

洋食に箸を注文次メニュー
句会場行きつけカフェを持つ安堵
母娘ビフォーアフターこの事か
駅ピアノテレコ持参で聴いている
担い手がいない農薬国無策

尼崎市 宗和夫

ニッポンの夏には夏の風物詩
ラジオ体操首からカードぶら下げて
夏休み梯子しました盆踊り
浴衣姿が大人に見えた同級生
姿消すラジオ体操盆踊り

尼崎市 永田紀恵

文春に見張られている著名人
なぜ居ない酒に飽きたという人が
カラカラと音もいっしょに飲むラムネ
過去形でうめつくされる同期会
どこ行つた月の砂漠のあの二人

尼崎市 羽奈和子

挨拶は早いもん勝ち先に言う
ゴツゴツの指に食い込んでる指輪
AIが考えドローンが攻める
ラジオ体操とセットになった蟬の声
一晚寝たら大丈夫とは若いなあ

尼崎市 藤井宏造

猛暑続く五感すべてが狂い出す
ピリ辛の棒棒鶏が癖になる
ゴミ漁るカラスの回り殺気立つ
アルバムで私の歴史確かめる
世界遺産寝転んで観るテレビジョン

尼崎市 藤田雪菜

親を見て育ち仕草がうり二つ
予報見て明日の衣服を整える
ばあちゃん米の研ぎ汁花にあげ
うっかりとしていて夏の風邪貰う
誉めたらば浜松ギョウザまた届く

尼崎市 森 菊江

泣き虫が母になつたら強いこと
鰻横目に鰻一盛買うとする
気がつけば妻が全てを握つてた
タヌキ移住街はおいしい物だらけ
正義の数人の数だけあると祖父

尼崎市 山田 厚江

忙しい忙しいわと蟬が飛ぶ
一番前で小さな声で歌うたう
すみっこに父の言葉が残つてる
営業マン顔いっぱいの笑顔する
二次会の練習をするカラオケ屋

加西市 山端 なつみ

盆棚経早朝からのスクーター
お寺様冷えおしほりを長く手に
寺総代スマホ片手に道案内
温暖化そんな優しい暑さかよ
地球沸騰化グテレス氏の対策は

川西市 山口 不動

大谷が打てば夫婦は仲直り
寝て見てる花火フェスへの群衆を
空蟬の仲間の声の中にいる
土蔵壁朝一番の夏陽照る
櫓建ち今夜自治会盆踊り

三田市 稲角 優子

アバウトに生きて白寿を目指してる
天翔ける父によく似た夏の雲
すてられぬ父の木椅子も庭に溶け
昇る陽も夕日もすきだ君が好き
夕立が過ぎて詩集を買う港

三田市 上田 ひとみ

少しでもほめてあげたい私です
沢山作って娘へ配達の日日
年齢が愛おしくてたまらない
ありがたく先輩の声聴いている
もう会えぬ会えなくなつた影を追う

三田市 大西 重男

行水がシャワーに押され死語になる
転んだが誰も見られずそつと立つ
カニカマを蟹と信じて食べてみる
見栄張つていた時やはり若かつた
失敗を認めぬ彼は頑固者

三田市 九村 義徳

すぐやるが悔いが後からやってくる
人情と義理のはざまにいる迷い
ぬるま湯に浸かりなかなか出られない
秋晴れだ休みにしたい月曜日
休みます忙しすぎて身が持たぬ

三田市 住 吉 美和子

盆おどり小さな輪っか過疎の村
この夏は地球沸騰時代とか
もう住めぬわかつていても泥をかく
美しい水の流れが魔の川に
電車内皆下向いて指体操

三田市 多 田 雅 尚

タワマンに高所恐怖症は住まぬ
注意書き読まず飲んでる薬漬け
冷蔵庫ビールを冷やす空気が無い
墓掃除来る人皆んな高齢者
母の命日黙祷される日と同じ

三田市 中 山 昭 美

受診日は衣装整え化粧して
老化だともっともらしく医者言う
手遅れか暑さ沸騰する地球
死ぬ程と冗談言えぬこの暑さ
どんどんと孫は追い越す背も知恵も

三田市 野 口 真桜子

気がつけば正座していた御説教
日焼け止め日傘と帽子炎天下
羅針盤壊れどこ行く日本丸
干し上がる池にわんさか外来種
二死満塁いざルーキーの名が呼ばれ

三田市 堀 正 和

朝昼晩エアコン休むヒマはない
そろそろと薬も酒も在庫切れ
通販と高い出前に頼るしか
巣籠りで今日も一日三百歩
妻としか口をきかずに日が暮れる

三田市 村 田 博

時として昔を偲ぶ脛の傷
波風は立たぬ寝た振り惚けた振り
達者だな相手に合わす演技力
逆転はプライド脱いで火が付いた
自画像に白髪足してる成れの果て

宝塚市 丸 山 孔 一

久びさのカラオケ声も固まって
それ程でも御座いませんと自慢する
人好きの妻のお蔭で友が出来
がり版刷り蠟紙とインクの香 昭和
流れ星消えた後から願回事

丹波篠山市 北 澤 稠 民

ひたすらに地球を消費するヒト科
真心をつかい果した日の疲れ
正当な儲けは汗の匂いする
これ以上政治嫌いにさせないで
人の運一寸先が予知出来ぬ

丹波篠山市 酒井健二

ああ二度とやさしい夏はもう来ない

連想のラストはいつも君になる

才がないから固い男で売る

ちよくちよくと苦勞ができてボケません

今になって花粉無い杉植えている

丹波篠山市 藤井美智子

早朝の散歩おいしい風に逢う

卒寿まで穏やかな師の人生句

失敗も老いのお愛想悪びれず

罪のない児へ親のエゴ許せない

生きて来た八十路への道摩訶不思議

西宮市 亀岡哲子

玉音へ夾竹桃の赤カンナの朱

たつぷりと水飲んでいるありがたさ

南十字がきれいと言書着いたきり

学童疎開楽しいことを思い出す

仏さまお暑いでしょう茄子の馬

西宮市 福島弘子

G7の決意新たに八月忌

帰る所ある幸せを知る戦

腹ペコの猫思いつつ急ぎ足

朝昼晩誤嚥がこわいパピブペボ

目を凝らすまさかの庭の糸トンボ

西宮市 福田正彦

饒舌も着地の兆し見えてこず

百貨店早送りする一季先

運命の足音静か今日も無事

滾る陽がプラス志向を掻き立てる

思考力無にしてくれる蟬しぐれ

南あわじ市 萩原狸月

缶ビール一つで酔えて罪がない

日日静かほっこりまるい句が生まれ

青春はいいな猛暑の甲子園

募金箱スルー出来ずにワンコイン

現地には何割届くこの募金

奈良市 東定生

地球からしつぺ返し沸騰化

複雑なパズルのような梅田地下

遺伝子は嘘はつかない良く喋る

スクラムを裏で組んでる嫁姑

電動チャリ免許返納したら乗る

奈良市 大久保眞澄

耐えかねて積ん読の山崩れ出す

笠地藏笠を日傘に替えましょう

子供よりえげつない大人のイジメ

それも私がしないといけませんか

自分のことだけで精一杯です

奈良市 加藤 江里子

アンケート孤独感じるほうにマル

南吉の童話私の処方箋

辞書を繰るひととき文字に癒される

母おればこんな私を叱るだろ

大丈夫意外と強いこの私

奈良市 高橋 敬子

企業の不正まさかの事も平然と

結局付けまわされていた民のがわ

枯れないで木木にエールの水を遣り

いい湯だと安堵出来る日早く来て

印籠は黄門ブーチンは核で

奈良市 辻内 げんえい

予報の雨期待をすれば降らぬ日々

雷聞こえ待っているのに遠ざかる

三食とオヤツに昼寝日課です

解けるはず孫の宿題そっと見る

三日間解けぬクイズを夢で解く

奈良市 米田 恭昌

拉致の子に祖国は遠し波の音

海猫は防人 尖閣の沖を舞う

坪庭だって四季を奏でる夢がある

百均で憂さ晴らしする小市民

お供えを掠めて孫が鉦叩く

生駒市 飛 永 ふりこ

朝顔から小言が漏れる怠け癖

ご先祖にいつも詫び入れ感謝です

墓参り母の声するありがとう

激辛のラーメンが消すいらつきを

平和という命尊ぶ蟬の声

香芝市 大内 朝子

運命の川をどんぶらどんぶらこ

ふる里の物産店の風やさし

アングルを変えてひかりに会う心

ありがとうをいっぱい言って恙無い

にんげんになり切れなくてまだ死ぬ

香芝市 山下 じゅん子

高一男子家族旅行もついて来る

バイキング見れば食い意地メキメキと

娘と連弾枯木ながらも発表会

イヤリング右も左も残りもの

夫喜寿マージャン仲間皆元気

桜井市 安土 理恵

ひまわりの迷路もう秋桜に変わって

神さまお願い老いに鞭うつのはやめて

ダイヤ婚すぎたし好きに生きたいの

リハビリの効果急いてはなりませぬ

おじいさんは向こうで待つてはるんちゃう

奈良県 安福和夫

麦わら帽捜しに出たの森村さん
立ち読みの著書に思わず吸い込まれ
若き日に胸ときめいたミステリー
五十代心に決めたマイウェイ
戦ない世こそ前提サバイバル

奈良県 谷川 憲

燈花会が情緒深める奈良の町
それなりの起伏もあつて並に生き
妻の日々花の手入れが楽しそう
昔の恥今も時々夢に出る
八十路旅若さの熾火まだ消さぬ

奈良県 中原 比呂志

日経だダウだと関係ないニュース
飢えながら働いていた敗戦日
長寿国苦勞分け合う施設増え
敬老日万才万才とはいかず
ベビーカー乗っていたのは小型犬

奈良県 中堀 優

娘さん恋をしてそういい匂い
裸でいい楽しい時をもう一度
明らかに黒であるけど攻められぬ
前進か後退か決め兼ねている
終戦の記念日だって皆知らぬ

奈良県 渡辺 富子

川風へゆかたのふたりしのび逢う
だんだんとおぼろの記憶増えていく
夏草の伸び放題にある若さ
はんやりとかすむ記憶を追う地酒
終章をゆつたり生きてゆくつもり

和歌山市 上田 紀子

取り敢えず朝の定位置恙無し
何処となく八月の風火の匂い
雑草で終わりたくない草の意地
胸を打つ意見救われ立ち上がる
もう逢えぬ一人にさせて逝った人

和歌山市 柏原 夕胡

人間の罪を地球に責められる
ちちははが死んでふるさとは消えた
夫婦げんかへ娘の説教が待っている
なつかしい歌番組に癒される
怖いから死ぬことなんか考えぬ

和歌山市 松原 寿子

山間の空気素肌に持ち帰り
脳洗う秘境の風が心地好い
行く末はどう転んでも運まかせ
何回も痛手を負って立ち上がる
繕ってやる気出さねば凋むから

橋本市 石田 隆彦

汚染水軽くなったと流す海

孝行の償い父母はもう遠く

弁償も無く泣き寝入り詐欺被害

良い野菜作る一心鎌を振る

免許返納踏ん切りつかぬエピソード

山口市 兼崎 徳子

存在が気にならないのがめんどろ

こつこつの貯筋が元氣作り出す

手にとまるきれいな蝶を探す旅

振り向かず今出来る事する全部

衣替え犬も意外にいそがしい

岩国市 上村 夢香

猛暑日にわたしの本氣試される

平和の誓い若人の声高らかに

一駅でも小さなドラマ待っている

ひまわりの迷路どこまで続くのか

現役の女医は元氣な九十歳

防府市 坂本 加代

華やかに見える人にもある苦悩

ドキドキを忘れてしまうぬるい日々

欠席の理由見つけてほっとする

通院もフレイル防止引き締まる

「らんまん」に触発される草の花

鳥取市 池澤 大鯨

規則逃れ慣れてくれば癖になり

実力者規則を都合で解釈す

雁字搦めすべて規則がものを言い

贋作と模写の区別はどこでする

都合によりにせもののふりをする

鳥取市 奥田 由美

盆の客去って再燃倦怠期

婦省児にポチが譲った爺胡坐

孫帰り屋台の金魚だけ残る

酷暑でも妻は無縁の夏細り

家族なし五人が開くクラス会

鳥取市 岸本 孝子

梅雨明けを確かめ梅の土用干し

惚けぬよう趣味の梯子はいい薬

ガラガラに朝の散歩もままならず

今はもう一番楽なスニーカー

地球汚し暑い寒いと不足言い

鳥取市 田賀 八千代

不協和音母の笑顔に溶けていく

花びらが一枚欠けてまた一人

笑っていよう最終章もあとわずか

しあわせの形でトマト熟れていく

無農薬戦に勝てぬプチトマト

鳥取市 谷口 回春子

アブラゼミ網戸に止まり何語る
涼求め行ったり来たり二十坪
頑張った証はいつも蚊帳の外^{ども}
愛妻が時々夢に出るといふ旧友
隙間風涼しさ運ぶ時もある

鳥取市 永原 昌鼓

台本はないがどうにか生きられる
いい話自然に頭下がります
仕返しをしても心は晴れぬもの
あれもこれも時代遅れでついて行く
する事のない一番辛いこと

鳥取市 中村 金祥

イキイキと生きる構えが葉です
古希の坂守りに入る事はせぬ
お守りは貴方心配せず暮らす
経験をさせてくれる超豪雨
何事もなくて静かに床につく

鳥取市 福西 茶子

頼もしさよりも優しい人の横
飲んだ水ほどはトイレに通わない
三回忌まだまだ迎え要りません
猛暑日も食欲だけはちゃんとある
暴走と度胸は母のDNA

鳥取市 山下 凱柳

時々は虫干しするか老いた脳
句作りに追われ寛ぐ暇も無し
十七音の言葉の裏の心読む
怪しげなネット情報つい開く
包み紙だけは豪華なお中元

鳥取市 吉田 弘子

好きな人の声キャッチする空耳よ
やさしさが今のボクには安定剤
猛暑続く朝の冷気の草むしり
知恵くらべ私を笑うカラス達
私が番号になる診察券

倉吉市 大羽 雄大

でもというヒマがあつたら一歩出る
泣き落しまではしないが拗ねている
読みすぎて隣遠くに置いている
軽くすむコロナ六回目の効果
ヨシヨシと力をこめて言うばかり

境港市 藤原 久直

鼻歌は何時も昭和の流行歌
我が町も花火打ち上げ五千発
ネタ探し類語辞典は離せない
蝉たちよ一緒に昼寝しませんか
エアコンで命を守る熱帯夜

米子市 池田 美穂

第五類コロナは無視と決めたんだ

止めたのにまたぞろ増えているサブリ

あの国のなんとみごとに隊列よ

ビール缶見られぬようにゴミ捨て場

豪雨に日照り天は忘れた匙かげん

米子市 伊塚 美枝子

ひまわりの黄色も暑いこの猛暑

猛暑日の連続記録まだ続く

日本一最高気温今日は何処

雨降れと猛暑の空を見て祈る

猛暑にも負けずパワーでゴルフする

米子市 後藤 宏之

節約と贅沢ちようどいい加減

てるてる坊主返事は見てのこの雷雨

胃カメラの返事ムニヤムニヤ要注意

国債発行いつまで続くやら

新しい友はラジオがよさそうだ

米子市 後藤 美恵子

反感をかう天下りもう古い

嗜み甲斐が一味違ふひとに会う

選挙カーちよつと過疎地を賑わせる

三回忌姉の形見が身になじむ

亡き姉の匂いが残るネックレス

米子市 妹能 令位子

流行の家に仏壇ありません

流行り服私のサイズ拒否をする

行列で待つほどの舌持つてない

マスク義務解除で困る法令線

夏草に立ちむかうからまだ元気

米子市 中原 章子

朝のうち畑に水をやっておく

西瓜の皮乾燥させてから埋める

ストレスを溜めない服を着て過ごす

猛暑日の安全守り家に居る

覚悟するどうせあの世はひとり旅

米子市 成田 雨奇

流行ははくの美学に合わなくて

流行に乗ってコロナになりました

先頭で前へならえと声かけた

爪切ただけで終った暑かった

閉めた戸をまた開けて見た消していた

米子市 野川 宣子

ぶつぶつが言える相手が居てくれる

字余りも字足らずもあり指を折る

「はいてます」流行っているよ我が家でも

勝ち組の列で私が一人浮く

ミニ・プチもアイコも並ぶ道の駅

鳥取県 門村 幸子

親の恩時がたつほど身に沁みる

三年分の力爆発夏祭り

ベダル漕ぐ汗びっしょりのヘルメット

髻結えぬ伯桜鵬よよくやった

激辛ラーメン本気ですすする夏挑む

鳥取県 斉尾 くにこ

よく笑うたったひとつの得意技

おもてなし今日は私がわたくしを

野線を跳び越えていく手書きメモ

キャッシュレス自主練をせぬ脳となる

ブルトツプすぽっと開けてアゴ竹輪

鳥取県 竹信 照彦

砂の上素足で歩くサラサラと

芝生歩くフワフワ靴で踏みしめる

林歩く枯葉サラサラズック靴

風呂洗い十年位ボクの役

詩吟詠う腹の底から声を吐く

鳥取県 本庄 ひろし

欲も無く気まぐれだからつき合えた

サジ投げた芸を覚えぬうちのボチ

この腹はビールのせいだが止められぬ

叶うなら復活したい二十代

遠回り酔いもさめたしもう一軒

鳥取県 山下 節子

目を合わすただそれだけで意思通う

仕返しを気にしていたら進めない

BGM自然に体動き出す

真つ青な空の向うは宇宙基地

一日を時計の針に左右され

松江市 藤井 寿代

トマトもぐグリーンシャワー浴びながら

千客万来蝮ムカデにスズメバチ

物価高湖上花火も有料化

クーラーつけて一日野球見る贅沢

墓仕舞私と夫散骨で

松江市 松本 知恵子

四年ぶり花火明るい夜が来る

穴道湖の魚よごめん花火の夜

酷暑なり夏に初めて痩せました

梅干してすつきり軽く一区切り

初盆の辛さ句友の顔浮かび

出雲市 伊藤 玲峰

どうしよう どうしまししょうか うろうろと

話し相手途切れぬように側に居る

楽しい話で食べさせましよう好きなもの

病室に友達が出来お蔭様

美味しいもの戴き分け合い笑い出る

安来市 原 徳 利

鹿之介忍ぶ月齡カレンダー
心臓を鍛えるノーマウト満塁
おいお前幼馴染みの犬と猫
爽やかに揺れよレインボーフラッグ
点数付けられぬ今どきの子供

岡山市 大 石 洋 子

寛解の友の安堵の暑中見舞い
毎日を不要不急に生きている
優等生は昼寝するにも気を使う
昼寝して初期化ならぬかこの老軀
省エネの水まき高い水道料

岡山市 丹 下 凱 夫

ジョギングの美魔女にエール送り 夏
万歩計忘れて損をした気分
風景を一変させるゲリラ雨
木槿咲き百日紅咲く今朝の窓
風の道なのかヒマワリ カンナ咲く

岡山市 永 見 心 咲

むくむくと旅恋うココロ雲の峰
寝転んで十年先を語る雲
展開図さてこの後をどうたたむ
目薬を下さい明日がほやけます
二の手打つ駱駝の背なで揺れてから

岡山市 前 田 恵 美 子

猛暑日は日傘をさして陰歩く
お犬様クローラー「弱」で生きている
老犬介護クスリ飲ませてオシメさせ
野菜たち守る水やり日が暮れる
台風は来ないで雨よ降ってくれ

岡山県 高 岡 茂 子

ばあちゃんの団扇で昼寝した昔
汗を拭く紫蘇ジュースの水ゆれ
大雨予報思い出させる五年前
マスク外れ友の笑顔が久し振り
今日もまたメモした紙を搜して

岡山県 田 中 恵

かけ引きを知らぬ笑顔が美しい
一筋の涙のあとがかわかない
花一輪差して心を和ませる
やさしさが心にしみる八十路坂
四面楚歌遠くに聴いた子守唄

岡山県 藤 澤 照 代

火加減は団扇で鰻焼き上がる
お茶漬けが独りの音を立てる昼
風化してはならぬ原爆ドームの灯
猛暑日に訪ねて欲しい雪女
何もかも沸騰はじめ夏は病む

広島市 岸 本 清

三原市 笹 重 耕 三

優しさにナイーブになる老いの坂

武力ではこの世に平和訪れぬ

炎天下日陰を探し遠回り

水を買う昔は思いもしなかった

ビッグモーター今の世の中垣間見え

尾道市 小 川 道 子

高知市 三 谷 松太郎

愉快に駆け引き今日の雲の流れ

レッツゴー何があろうと無からうと

あら不思議あれから風がタクト振る

ミラクルな出逢いだつたよなあ亡友よ

インプット過ぎゆく日々が褪せぬ間に

尾道市 小 畑 宣 之

去り逝ける友が懐かし八十路坂

願い事八十路になれば安楽死

八十路坂口は出さずに汗をかく

あれやこれ汗かくことが健康法

爺さんはいくつになっても軽い腰

竹原市 岩 本 笑 子

友達の友達が来てたそがれる

たくさんの人と会ってた墓参り

あの人もこの人もいて花だより

大会誌届くこんな私の手もとにも

友情が友情を呼び花が咲く

雨降ったり止んだりばんやりと過ごす

ここだけの話に猛暑日が宿る

夏休み受験へ切り替える球児

国境線たどると不条理な戦火

シヨベルカー見ると子どもになる後期

テレビ見て笑っています吠えています

これでもかまだこれでもか噛んで噛み

よさこいの踊り尽きない夕囃子

初鳴きの恥じらいつつも庭のセミ

ネジバナの律儀なことよ左巻き

蝉の声着信音と間違える

土佐清水市 辻 内 次 根

幸せはお風呂上がりのバスタオル

フランス語ひとつ知ってるロゼワイン

ねばならぬ所を少しだけ曲げる

蝉しぐれ今日も朝から風がない

阿南市 小 畑 定 弘

あの世からしきりに妻が呼ぶのです

花からの視線を浴びる老いの庭

老いとても恋に会う日の髭を剃る

何時だってレジはこの娘と決めている

風流なお人でしたと盆の憎

松山市 栗田忠士

一雨は欲しいが台風は困る

野放図に伸びて可憐な葛の花

側に居るただそれだけでいいんです

辛も苦も溶かしてくれる君が居る

まっすぐに描けなくなつた手を擦る

松山市 古手川 光

台風まで沖縄苦しめる無情

温暖化招いてるのはヒトのエゴ

このままじゃやがて辞書から「四季」も消え

あれもこれも値上げ血圧まで上げる

御巢鷹山想い出してと盆が来る

松山市 宮尾 みのり

キラキラネームの人も川柳するだろか

ふるさと内子 塔の表紙は面映い

いい顔になつた頃には皺も増え

割り切つたつもりへ情がからみつく

団体で売るタレントの同じ顔

松山市 柳田 かおる

朝のうつ上手く焼けないタマゴ焼き

ノンアルで酔えるんですよ嬉しい日

拘りを捨てて時代の風にのる

存分に咲いて器に拘らず

大物になるには線が細すぎる

今治市 安野 かか志

それぞれの思惑があるデモの列

梅雨明けにいっぱい貯まる農作業

早苗田をおそう田螺の不埒もの

騒がしくカラスの声が朝を裂く

腹ペコの猛禽類になるカラス

西予市 黒田 茂代

六月の終らぬうちに女郎花

手術後はどこへ行くにも背にリュック

ゴミ出しも月二・三度で済む独居

これから何年一人の食事続くのだろ

もう乗らぬ自転車車庫で所在なげ

西予市 西田 美恵子

無かつた事にしてねスイカを召し上がれ

ふと意地悪をしたくなつたの天気雨

霧の中聞きと無い事聞かされて

この町しか知らぬ喜寿はもう近い

星空からこぼれて君に抱かれたの

北九州市 小松 紀子

逢いたい抱きしめたい黄泉の二才

暑中お見舞愛犬にクローラーを

前向きな心おしゃれでとりもどす

夏野菜向こう三軒おすそわけ

猜疑心強い人とはつきあわぬ

福岡県 本田 さくら

宮崎県 黒木 栄子

わたくしの心置きざり時すすむ
散歩道小さな花がまた来たね
かわいいなピョンピョンはねる蛙の子
鏡みらないと思つたしみポツン
核兵器なくす運動わたくしも

唐津市 坂本 蜂朗

札幌市 小澤 淳

年ごとに妻の命令ストレート
親を越え異郷に活きる子が二人
自慢の子いるのに誰も聞きもせず
手を握ることも出来ない愛でした
熱帯夜ゴキブリ見ないのも不安

熊本市 杉野 羅天

黒石市 石澤 はる子

シャツ出しが流行り令和が着膨れる
初採れヘレタスピーマン茄子トマト
死に方を選べぬ老人の避難
戦争の混沌老いを脅かす
世界平和国の悲劇の上に立ち

熊本県 岩切 康子

黒石市 北山 まみどり

災害予想備品月日をチェックする
取立てを毎朝膳に盛る幸せよ
年重ね夫の援助が身に沁みる
リハビリを終えて明日から杖暮らし
飴玉もかまずにおれぬ私の歯

シヤキシヤキのつもりが今日もけつまづく
凹んでも五七五に支えられ
レトルトへ一味足してシェフの味
枯れ枝もマムシに見える生息地
そつと来てぬつと顔出す夫の友
半年は雪の話を主題にし
成長にグループも要りボスも居る
核ボタン押すか押せぬに評論家
親と子になった不幸も喜びも
先立つた友に逢いたし夏の雲
一日のリズムが狂う休刊日
ふる里によく響く響く笛太鼓
日に一度私のことも褒めてやる
地味すぎて形見の着物出番ない
心して水分補給今日も暑い

夏らしくもつと活動するはずが
四季はもう二季か三季の曲り角
限界を超えてしまった温度計
手におえぬ濃厚すぎる日差しです
少しだけ雨を 柔らかくになりたい

弘前市 稲見 則彦

バックスが囁くのです断れぬ
古日記誤字脱字には参ります
マドンナも十人十色クラス会
盆踊り昭和も遠くなりました
ヤーヤドォーねぶた今年は熱かった

塩竈市 木田 比呂朗

食欲に体力維持という理屈
長風呂は迫る締め切りへの備え
ああゲーム優先席を独り占め
保険証パーパールスを拒絶する
敬遠を妻に教えたショータイム

男鹿市 伊藤 のぶよし

生きてます夏には夏のナマハゲと
転んでも青空つかみ立ち上がる
来い来いと呼ぶ声のする向こう岸
一気には盗んでいかぬ前頭葉
乙で粹唐辛子なら七色で

上尾市 中村 伸子

夏空に手本のような入道雲
スイカ派ですかメロン派ですかアンケート
吾娘の街暑さ日本一のニュース
微熱ですでもコロナかと怖いです
何故でしょう元教師かと聞かれます

朝霞市 前田 洋子

花火師の腕を競って隅田川
四年ぶり日本の空は大はしゃぎ
朝ドラをバントマイムにしたバイク
辛うじて翔平さんで気が晴れる
炎天の手摺に触れた手が逃げる

東京都 川本 真理子

おだやかに見返すという処世術
ピッチャーの影伸びてくる五回裏
亀の努力諦めずまだやっている
雨なんか降らぬと言う背見送って
皆それぞれ自分の風を待っている

八王子市 川名 洋子

四年振り猛暑蹴飛ばし夏祭り
妻の手から飛んだつもりが手の中に
断捨離の手を休ませる古写真
隅っこの椅子で順番待っている
おいてけぼりは食らわぬとスクワット

横浜市 川島 良子

地球沸騰化干物になった夏の陣
遅しくなったばあばをホッとさせ
失敗の数と笑い合う思い出
何とかなる何とかなって生きている
老いの恋明日のことはケセラセラ

(菊地政勝さん、山口美穂さんは42頁にあります)

波稜草の花

(10)

野 沢 省 悟

「川柳触光舎」主宰

朝一にゴクゴク生命へ水を飲む

川 崎 ひかり

「生命」がイイ。重く堅い言葉であるがこのように句に使える。年々暑さが厳しくなつて来て、今年も猛暑がつづく。寝ていても汗をかき身体の水分が減つてゆく。朝起きてマズ一杯の水を飲む人は多いだろう。ワタシにはなく、一匹の生き物としての身体に水を飲ませる。猛暑がワタシが生き物であることを実感させてくれたのだ。

まだ明日があると思つている情眼

辻 内 次 根

退職すると、時間に余裕ができる。はじめは張り切つていろいろなことをするが、それも一時のこと。川柳はつづけているが四六時中、川柳をつくつてゐるわけでもない。ついつい昼寝をすることが増える。昼寝は気持ちイイ。でも二日酔いのように何

か後ろめたい。それがこの句から滲む。でも、これまで長い間働いて苦勞してきたもの、昼寝したつて、ゆつくり寝たつていいと思う。人生のお駄賃だと思つて。

ボタンキュー僕はしあわせなんです

内 藤 憲 彦

幸せとは何かを考えるとなかなか難しい。だが作者は、疲れ切つてしまうことが辛せだと喝破した。仕事やスポーツか、あるいは大変な事の後か。布団に横になり、朝寝たことすら忘れて目覚めた。その目覚めの時感じた、充実感。ボタンキューというオノマトペが旨い。

くもの巣に一番星がおちてくる

酒 井 紀 華

微妙な心境の句。一番星は作者のたいせつな夢か。その夢が落ちてゆく、それも蜘蛛の巣へ。ゆつくりと落ちてゆく夢を、やわらかいがあやうい蜘蛛の巣が受け止める。まだ落ちてしまわない夢。作者の瞳に、蜘蛛の巣がキラキラと輝いた。

独裁者核と添い寝で見る夢は

中 井 萌

こちらの夢はキナ臭い。八月のヒロシマ。ナガサキが今年ほど身近になったことはな

いだろう。「添い寝」という言葉に込められた作者の思いは、批判というより恐怖である。その恐怖を世界中の人間が共有している現実。

お金とヒマと二つ揃ったことがない

山 田 葉 子

残念ですが、真実を突いた一句と思います。たぶん川柳人にはこの二つ揃った人は居ないでしょう。この二つが揃った人は、川柳をやる必要のナイ人と思います。せつせと句をつくるのはヒマがあるからとは限りません。この二つのどちらもない人も居るはず、そしてそこに必要な川柳。

梅雨に猛暑納得の上膝痛む

藤 井 文 代

行き先は階段坂のない名所

高 橋 敬 子

「膝」、歳を増すたび痛みを訴える人は多いでしょう。僕も時々痛みます。文代さんのようになかなか納得できない僕は、文代さんをたいへん尊敬します。膝のため旅行先を考えることになりました。どこに行つても歩きますから。ここは発想を変えましょう。膝が痛くても行ける所を名所にすればイイ。例えば句会場とか大会場とかネ。

英語 de Senryu ⑭

麻生霞乃 『福壽草』 (1955)

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

パトロンへひけめ感じる兄を連れ

*take my brother
who feels inferior
to my patron*

パトロンへ妹の靴もたのんどき

*now is a good time
to ask your patron
to buy your sister's shoes*

take 連れて行く *brother* 兄弟(兄) *feel* 感じる *inferior* 劣等感 *ひけめ*
patron パトロン *good time* 潮時 *ask* 頼む *buy* 買う *sister's shoes* 姉妹(妹)の靴

～リバーウィローのため息～ ⑭ 吉村侑久代詩集『めぐる季節 Greetings From The Four Seasons And Each Month』 (JUNPA BOOKS 2023) 日英バイリンガル版

タイトルにあるように四季 12 か月にちなんだ詩、俳句を収録した吉村の作品集である。作品を纏め、出版に至るにはさまざまな動機があるだろう。私の場合は度重なる業病との闘いや、傘寿を迎えるにあたり自分を冷静に見つめ、自分を奮い立たせたかった。故郷のことを詩で表現してみたかったが、重くならないように書くことは難しく、俳句の凝縮した形の方が肩の力を抜いて書くことが出来た。

雨蛙 / 揺れる木の葉で / 我が家を守る / その威厳のある態度 / その孤高の姿 / 修行僧のごとし / 毎朝 / 窓越しにのぞき見をして / 机の上にある / わたしの書き物を / 静かに / 読んでいる / 雨蛙
a small tree frog/ protecting my house/ on the swinging leaf/ his aloof figure/ his dignified manner/ he is like an ascetic priest/ he peeps/ through the window/ and silently reads/ my writings on the desk/ every morning/ Mr. Tree Frog (夏のご挨拶)

また今秋も / 彼はあの曲を / サックスで吹く / いつも同じ音を / はずしても気にしない / 半分耳を閉じ / 半分目を開けて / わたしはうさぎのように / 林檎をかじっている
this autumn again/ he plays the saxophone/ same notes he misses again/ he doesn't care/ I nibble an apple/ like a rabbit/ closing my ears half/ closing my eyes half (九月のご挨拶)

立春や忘れ物した気配あり *the first day of spring.../ I feel like/ something lost*
三日月は亡き親たちの遊覧船 *the crescent moon/ sightseeing boat/ for deceased parent*
麦秋や戻ることなきこの刹那 *wheat harvest.../ this moment/ no return*
断捨離は夢のまた夢冬苺 *all things thrown/ my dream forever.../ winter strawberry*

誹風柳多留一二篇研究 38

伊吹和男・高野範雄

山田昭夫・小栗清吾

細井龍夫

清 博美

305 上の句ハかめきくとよし時が事

伊吹 百人一首にある後鳥羽院の、

人もをし人もうらめしあぢきなく

世を思ふゆゑに物思ふ身は

から。鎌倉幕府との軋轢の中で詠んだ一首である。上の句の「人もをし人もうらめし」の人もをし（人がいとしくもあり）が寵愛する亀菊で、人もうらめしが北条義時だといふのである。

この歌を詠んだのち後鳥羽院は承久の乱に敗れ、隠岐の島で没した。

人もおしとハかめきくが事と見へ 一四三
清 賛。

306 きんてつ侍衆んの下々に居る

伊吹 伊達騒動ものの松前鉄之助。金鉄は文字通り金や鉄などの金属であるが、堅固で

しつかりしていることの例えでもある。鉄之助の鉄に利かせているのは、言うまでもない。

幼主亀千代を縁の下で荒木和助から護つた忠臣鉄之助。
ちうしんハたとへにもれたちから持チ

安四仁三

清 賛。 — 雨譚註・縁の下の力持 松前也

307 いけにえのおやは手あしてなげく也

伊吹 須佐之男命の大蛇退治から。大蛇の生

贄となつた櫛名田姫の父母の名が、足名椎と手名椎であつたから、手足で嘆くと表現した。

「古事記」に、

「僕が名は足名椎と謂ひ、妻の名は手名椎と謂ひ、女の名は櫛名田比売と謂ふ」と

まをしき。

などとある。

手那植感心ン無造作な二ト夜酒 一四五
清 賛。

308 かやぶきの土蔵を庄屋三ツもち

伊吹 茅葺屋根の土蔵では、火災のときなど役に立たないから、田舎蔑視の句だという意見がある。いくら田舎であつても、火事や盗

難に弱い土蔵を建てるはずはない。この解釈こそ田舎蔑視である。

東京郡世田谷区次太夫堀公園に、江戸後期の穀物蔵として利用された旧秋山家土蔵がある。移築復元されたものらしい。以下はネット検索からの引用。

土蔵本来の屋根の部分には粘土を塗つてあつて、その上に茅葺屋根を置いていただけなのだ。粘土はひび割れが多く、耐火性はあつても屋根に使用するにはいさ

さか不安である。そこで考え出されたのがこの「置き屋根」と言うわけだ。火事で屋根に火がついたときなどは「置き屋根」だけが燃えて土蔵は安心なのである。

それで、何が面白い句なのか判らなくなつたが、町中に住んでいる者にとつては珍しい、田舎風の茅葺屋根の土蔵を三つも持つてゐる、裕福な村庄屋である。

高野 茅葺きの土蔵が粋とも思えない。田舎蔑視の句だと思ひます。

山田 賛。江戸では享保以来瓦葺きの屋根は普及してゐましたから、いくら何でも茅葺きの屋根の土蔵は無かつたと思ひます。

小栗 賛。ネットの説明の如きものならば、実用性と美観を兼ね備えた名作で、蔑視されるものでは断然ない。「田舎風」とはいえるだろうが。

清 ネットの説明が本当であれば、小栗説とまったく同感ということになる。

主題句は、江戸の作者が、実態はともかくとして、庄屋の裕福であらうことを想像しただけの句。

309 しんだ跡扱かりてのその多さ

伊吹 美人の若後家に、亭主の代わりになつ

てやると申し出る男の多いこと。

若後家の免角力になりたがり

八九三三

清 賛。

310 代みやくに聞けはくすりとしめし斗

伊吹 代脈は、医者の子。医学に未熟であるから、患者あるいはその家族が病状を尋ねても、薬を処方通りに飲みなさいとか、食事はとり過ぎないようにとか、わかりきつた回答しか返つてこない。

代ミやくハおなじかめしも喰ふななり

安五宮三

山田 賛。現在の医者だつて同じようなものですよ。

清 賛。

311 おとり子のひとり兄さまたいこ也

伊吹 踊り子のたつた一人の兄は太鼓持ちであり、妹が妹なら兄も兄で、似たもの同士の妹と兄である。

ちなみに一三篇のまとめに、ひとり兄さまは、手鞠唄の一人姉さまの援用だとある。すなわち『宝暦現来集』（巻之二十）に、

おらが姉さま三人御座る、一人姉さま太

鼓が上手、一人姉さま鼓が上手、一人姉さま下谷に御ざる、下谷一番伊達しやで御ざる、

とある。

おとり子の兄ハ御帳について居ル

明四智七

清 賛。この句の場合の御帳は、勘当帳に追加しなければなりませんね。「文句取辞典」御めかけの耆人リあに様はき、なり

安八智四

312 大口をきくのが後家のすがれなり

伊吹 末枯れは、なれの果て。亡夫に操を立てるとか、男に未練はないとか大口を叩くのは、もう盛りを過ぎた、男が氣にも留めない老（？）後家である。

後家の髪此世で遣ふほどハ置キ

一三九

山田 礎でもよいと思ひますが、大口は「②」みだらな話。猥談。おおぐちばなし「日国」の意があり、老後家（？）にふさわしい。

小栗 「大口」は、山田兄説の通り。そう解して面白い句。

清 賛。

自選集

小島蘭幸

木本朱夏

等身大の私に還る里の風
疣ひとつ悪人顔になってきた
夏籠りふわりふわりという作務衣
カープ坊やのバットは赤い羽根でした
赤い羽根とカープのコラボ着て飛ぶか

川上大輪

新家完司

ジ・エンドから始まった物語
足跡を辿ると父に突き当たる
猫の耳囁話を溜めている
誰にでもある幸せの裏表
ホカ弁にまること地球話めてある

北野哲男

高瀬霜石

寺の鐘ご恩ゴオンと響くなり
分らんが静かに聞いているお経
古い二人ステージ2の物忘れ
不眠症昼寝二時間出来るらし
白寿から三途の川は屋形船

老人会デビュースカーフはピンク
おざなりに使いまわしてきたコトバ
行く夏の海の匂いのする手紙
いろいろとあつたマスクを棄てられず
ムーミン谷で一日雲を追う詩人
人間はややこしいけどおもしろい
私から離れてふてふもつれあう
気取らずに裸になれという猛暑
節制しても下がらぬ血糖値
友ひとり海に捕まり帰らない
暴飲暴食ときどきバリアフリー
転びそうもないところではばかり 転ぶ
風呂ビールそしてほんとのボクになる
認知症がんに糖尿クラス会
74歳4センチ縮まった

津 守 柳 伸

朝顔の蔓に格闘強いられる
3種類競うて蟬のハーモニイ
妥協せずブラン通りに進む旅
木漏れ日と川風貴船回顧録
買い溜めたマスクへ自問自答する

西 出 楓 楽

曾遊の地ラハイナの火事胸塞ぐ
トー横もグリ下の子も闇を抱く
絵に描いた餅も時には食べてみる
八十五もうルピコンは渡れない
近く住み遠く感じる孫一家

仁 部 四 郎

窓開けて世間を見れば好奇心
ブツブツと何か言ってる好奇心
好奇心国会中断テレビ点け
好奇心探して2級ウイスキー
好奇心それが杖です卒寿坂

平 田 実 男

錦などないがふる里温かい
久々のハグ老妻を喜ばす
ピンピンでコロリ喜んでる身内
横で寝る妻の軀が子守唄
訛りついていいな絆を太くする

福 士 慕 情

ヤーヤドーまつり戻ってきた津軽
ドンコドンコ背中ジャワメグ祭り好き
群雄割拠武者それぞれが関の声
大太鼓ドドンと腹によく響く
子どもから元気を貰う夏まつり

藤 村 亜 成

感性に栄養つけている読書
しばらくはスマホを持たず知る自由
パワフルな入道雲が頼もしい
タイヤ焦がし炎天下に墓参り
空蟬になって猛暑に閉じ籠る

松 本 文 子

亡母の居た田舎の風は忘れない
家へ帰ろうやることはやったから
穴道湖につかり心を涼やかに
死ぬ時は上品ぶっていられない
アンビリバボー暦めくって立ち上る

三 浦 強 一

AIも分かりつつある人間味
コーランとバイブル神も戦好き
ただ祈る平和憲法いつまでも
増えてます五臓六腑の修繕費
平等に神がくださる老病死

分断の亀裂広がる世界地図

村上玄也

急いでも急がなくても来る最期

年老いた妻が無邪気に見えだした

無愛想な店員がいて買う気失せ

早朝から何か急かせる蟬の声

森山盛桜

断捨離をしたら空っぽ頭陀袋

何ピース足りぬかジグソーの地球

何某と呼ばれて底辺を生きる

生きるにはこの手があった木偶坊

造反は考えもせぬ辞書の文字

山本希久子

起きて立つ腰の痛みに耐えながら

茄子の煮びたし夏をどうにかやり過ごす

八月忌声高に読む第九条

夏の夜の夢ねぶたまつりの跳人とお

耳底に津軽三味線鳴りひびく

居谷真理子

砕け散るその一瞬の美しさ

月光がレールの傷に降りそそぐ

居酒屋の気炎と蟹が吹く泡と

うたかたの命ぬくめてくれる酒

国道を牛が運ばれて行きます

川柳塔

(つづき)

横浜市 菊地政勝

温かい助言ところに刻まれる

色褪せた夫婦茶碗に見る苦勞

情報過多へ判断遅れ気味

クラス会やんちゃな過去を洗い出す

断捨離にされず古着が日の目見る

(前月分) 神戸市 山口美穂

先人の教訓までも繰返す

空襲を知ってる人も減りました

元気を出せ元気を出せと蟬が鳴く

自己診断は夏バテ体重減らんけど

生きてたのね言ったあの友先に逝き

「川雑」語録 (25)

水族館

あそ
生
よし
乃の

空が水色になつて暮れて来た

窓の外にも水色が流れてゐる

水色の中を電車がゆく

自転車走る

何とせはしない水族館でありますこと
(「川柳雑誌」大正14年1月)

森の集句



『わらじ酒』

小西無鬼
こにしむき

ぶらついただけの夜店で草臥れる
よぼよぼでまだ銀行に出入りする
コンパクト仕舞えば返事らしくなり
首相より豊か朝昼晩と飲み
捨てられていても咲いてる菜種なり
萌え出づる若葉が老いの目に痛し
禅僧に似て瓢箪のぶら下がり
此処までが私とこの門を掃く
不便さは足袋に右足左足
幼稚園の列と帰った日の和み
ガンジーに似た人も居て旅の汽車
肝腎の孫が動いている写真
なめくじのこう這いました跡をつけ
とんび今餌を見つけた輪を画く
墓石の凹みに眠る雨蛙

(昭和58年5月26日発行、川柳塔社)

温故知新

田中正坊川柳句文集『ペンシル』から

我が家では妻の口から天の声
慌てるな米がなくなることはない
再婚の妻をお前と呼べぬまま
辞令には一行 都合により解雇
まあまああというのが気にいらん
わくら葉が残り若葉が散る無常
生老病死 起承転結にも似たり
祝儀より不祝儀多く歳暮れる
老犬の蹠踉として行く枯れ野
編集者冥利につきる八〇〇号
七十の坂はゆつくり歩むべし
一つ許し一つ甘えて夫婦かな
気がつけば三日忘れていた日記
攻めるより守る戦がむずかしい
人の世に旅立ちがある生と死と
義歯はずす武装解除をするように
銀杏散る私が消える日を想う



川 上 大 輪 選

大阪府 奥 野 健一郎

旅の目で見ればのどかな無人駅
禅寺の廊下修業の黒光り

諦めることでバランスとっている
聞くだけと言った話にのめり込み
せかせかと孤独行き交う交差点
栄華とはあんなものかな遠花火

大阪市 吉 積 栄 次

鳴きすぎる虫の知らせが懷疑的
グレたのは別れた親のせいにする
何時だって個性的だと評価され
文字乱れ泣いていたのか古日記
一言も聞き洩らさぬと耳掃除
人生の荷物を下ろす骨密度

大阪市 森 田 遊 子

茶葉開くように言葉を待っている
食い眠りその他に何をしたらろう
灰汁抜きをすると私が消えてゆく

気が付けば半分嘘をついている
し忘れた古新聞のパズル解く
似た人にまたすれ違う夕間暮れ

和歌山市 西 川 千 鶴

悪魔の誘いには弱い私です
喧嘩したその日のとても長いこと
野良猫と目が合うやバイ泣きそうだ
追伸の文字に覚悟の筆の跡
嘘ついた私に月も素っ気無い
お世辞にも旨いと言えぬ店に列

鳥取市 山 野 す み れ

ひと言を引きずりながら日が沈む
秘密まで全ては知らぬ方がいい
花畑子供も蝶になつて飛ぶ
検査した奥歯に物がまだ残り
風車楽しい風を待っている
仲間にはなれそうも無い浮いた位置

船橋市 中 嶋 常 葉

棘を抜くバラ色だけの巡り合い
甘い汁ほんの少しで良かったの
蟻螂の挑戦いつだって本気

絶対に君を守ると熱い嘘
幻覚の狭間にポトリ恋に落ち

さようなら数え切れない向こう傷

豊中市 齋 藤 奈津子

昭和の絵日記驚いていた三十度
ピサの斜塔カメラ傾け建て直す
陽が西にカラス鳴くまで立ち話
髪染めて母は待ってる子の帰省
古日記すべて許してシュレッダー
犬を見てハッと気がつくお知り合い

府中市 岸 田 武

見るたびに笑いをかえす向日葵よ
花瓶にも氷を一つ入れてみた
かぶせても孫は帽子を投げ捨てる
ステテコの膝に広げる広辞苑
おすそ分けほんの少しがいいのです
朝顔を妻と数えたころもあり

尼崎市 八 木 幸 彦

ひとときの心の揺れも見抜く友
反射する角度にいつも妻がいる
今の子は王長嶋を語らない

台風が接近身体は動かない
落雷をとどめに去った通り雨
ふるさとにまだ気がかりな人がいる

奈良県 室 田 行 久

相手立て謙虚さ滲む受け答え
初手はお茶緊張解す老獪さ
正論を大人の事情押し潰す
長寿国なつて若者増す負担
防衛費膨らみツケは増税で
皆黙る話の種はオレらしい

海安市 山 中 閑

もつともつと採っておゆきと茗荷の子
ああ暑い喉元ならしラッパ飲み
水出しの煎茶を日ごと暑氣払い
流れ星逝った弟ふと過ぎる
憧れの貴船川沿い鮎匂う
ひとり来て河鹿の声を聴いている

神戸市 酒 井 宏

AIに恋の手ほどき訊いてみる
痴呆かな小言いわなくなった妻
相伴の妻はもつぱら赤ワイン
盤上に扇子が踊る高段者
片陰を歩けば消える影法師
反省会まず乾杯と呑むビール

大阪市 池野 惠美子

公園の木陰の車昼寝どき

土用の丑手の届かないウナギの値

勉強は出来たが世渡り下手な人

難聴に春夏秋冬虫の声

あちこちが痛いというが口達者

大阪市 今村 和男

朝顔が聞き耳立てて二つ三つ

誰にでもいい顔してるマンホール

そここに正義の味方いた昭和

聴くたびに途中で止まるオルゴール

信号の青が続いて休めない

大阪市 岡田 恵子

老い二人まだ出来ること箇条書き

応援歌に聞こえる今日の蝉しぐれ

口パクもオッケーシニアコーラス部

ジグソーのピース剥がしてゆく試験

母からの着信履歴五分ごと

大阪市 久木野 孝治

愛という寿命はまるでシャボン玉

何事もただしを付けて逃がっている

再雇用三時頃から鼻毛抜き

里のどかコンビニ遠し街恋し

ぬけぬけと光泥棒隣りの木

大阪市 阪本 秀子

行過ぎの恋にアラート鳴っている

懐かしい感じて時代ワープする

足あとに努力の成果のこせるか

揺るぎない不戦を誓う原爆忌

盆供養父母の好物でんこもり

大阪市 中村 峰子

かなんなあ助けた猫はわがままだ

次々と理解できないこと起きる

無宗教倫理はどこで学ぶやら

猫が逝き旅のパンフを吟味する

物忘れ日々増えてきた慣れてきた

大阪市 松田 聡

血圧が上がるニュースが多すぎる

歩きスマホにぶつけられたが知らん顔

お互いに介護する気にいる夫婦

飼主に何故か似てくる犬と猫

孫帰る手を振り祖父母ホッとする

大阪市 森 廣子

笑い声そこに愉快な風が舞う

あれこれと道草をして老いて行く

また迷い地下で迷子になっている

笑われぬ様にと背中伸ばす老い

何をどう間違えたのか干しシミミズ

池田市 倉本一弥

ゆつくりが身体に見合う歳となる

免許返納決めかねて三年目

電動のママチャリ飛ばし過ぎでっせ

どんだん飲むぞ夏だビールだ屋上で

泣きごと言わんだ黒柱だからです

泉大津市 助川和美

程々に手を抜き暮らすこの暑さ

押し入れにかくれそのまま寝てしまふ

世話やける人なんですと嬉しそう

利子つかぬ貯金に愚痴がついてくる

何事も夫に染まり五十年

泉佐野市 檜葉良子

アンケート全て普通に○つける

何が要る医者に薬を問われても

物忘れ増えた分だけ友が減る

風向きに合やす自分がいやな時

気配りがちよつと重荷の時もある

柏原市 神崎江

お先にとどうぞで交わす山の道

何もないけれどそばには君がいる

わだかまり溶けないままに母は逝き

さじ加減できずまたつい口を出す

チェロの音に私のこころ溶けていく

交野市 山野双葉

ワクワクがもう弾け出すリムジンバス

苦瓜の種赤々と夏熟す

拾う神になりたくて行く譲渡会

この星の賞味期限が迫つてる

灼熱の地球の叫び肌で聞く

河内長野市 穂口正子

粉ミルクのほんのお返しユニセフへ

コロナ禍が幻にしたフルムーン

自慢話畏れ入るまで聞かされる

ゲリラ雷雨稲妻描くイリュージョン

ハリマオが現われそうだ夏の山

吹田市 岩口のぞみ

大谷の試合に合わせ起きる朝

三年ぶりマスクの下はそんな顔

いろいろが思い出される家のキズ

照りつける陽は紫陽花に似合わない

三人席あいだ座るは勇気いる

摂津市 野々村レイ子

欠点を隠す私のおしゃれ服

目に見えぬ信頼という太い糸

七十路はシミしわチャームポイントよ

忘れな草心の奥に恋しづく

この旅の終着駅を知らぬまま

高槻市 三 谷 白 黒

この齡で生命保険要りません
何もかもA Iに負けてガラパゴス
姉逝つて妻を大事にしはじめた
耳遠く口論することありません
国営の放送局は怪しいよ

豊中市 貝 塚 正 子

しつけ糸一氣に抜いて正座する
修正液塗つて事実を白にする
箱だけが残る高級ウイスキー
しなやかな猫の体に嫉妬する
老獺なオーラを放つ老いた猫

羽曳野市 黒 木 ひとみ

何気ない子の一言で元氣出る
老木も木肌すべやか猿すべり
人情の溢れた昭和遠くなり
早朝の蟬の鳴き声目覚しに
久方の雨に心も潤いて

東大阪市 青 木 ゆきみ

損得の天秤今日は冴えている
両天秤かけてどちらもキープする
唐揚げに心動けば正常値
ごめんねとどちらが言うか根比べ
シーソーは心の重さ加味される

東大阪市 青 木 隆 一

頼りない奴を頼りにする私
好きな色白です腹は黒いけど
長いもの自慢話と鼻の下
通リゃんせ聴いて眠れぬこともある
難しい話は無用立ち呑み屋

大阪府 浦 上 恵 子

あいさつのひと声相性を探る
虫の音が追いついてる蟬しぐれ
線香がお隣りからも匂う朝
知人から友へ昇格する月日
値引き品見つめて献立の思案

神戸市 米 田 利 恵 子

アイディアが満載散らかった机
味をしめ右や左に辞書スマホ
コーヒーは冷めるがアイディアは沸騰
OB会女盛りに戻ります
ぬかるみもあったと友が話しだす

神戸市 田 本 古 鈴

蟬唄うマイク放さぬ人のよう
酒タバコやめて人生楽しいか
生きていてまた会える日を待ちましょう
天と地のはざまに浮かぶ人の夢
一生を悔いなく生きる難しさ

神戸市 みぎわ はな

駅ピアノノ騒音としか聞かぬ耳
早口で喋る歌にはついてゆけぬ
美しいメロディー懐かしい昭和
急いでも急がなくてもわが一生
よく生きた生き切ったねと卒寿いま

神戸市 村松 久江

うわさ話左の耳は良く拾う
熱弁の半分程は聞き漏らす
たまにはね優しい嘘に救われる
時々優しい声も出してみる
言い返す言葉用意し立ち向かう

尼崎市 板谷 賢二

背は縮む爪と無駄毛はよく伸びる
好きだけ飲んでいいよと見放され
使い痛み増してくるまで二三日
補聴器が欲しい二人がでかい声
妻の留守友はテレビと冷蔵庫庫

尼崎市 山本 百合

伝えたいがいつも縫れるありがとう
じいちゃんが孫より先に蟬を追う
指文字で通じ合う愛育てて
ほんやりと死後のことなど蟬時雨
思い出の旅に三度の仁王像

小野市 藤原 泰宏

咳ひとつ誰だか分かる人の癖
手術跡に隠れて分からない
別嬪を見れば心が癒やされる
美しい棚田が消える高齢化
寝返りで睡眠不足熱帯夜

加古川市 石賀 邦子

一人言増えて真夏の心太
一日の重さの違い確かめる
大げさに泣いてみせてもいいですか
ここにいるここにいるよと午前二時
私をどこか遠くに置き忘れ

三田市 幸田 厚子

ほど良く忘れほどよく足して百めざす
タイミング解からぬマスクあご止まり
先祖の墓時の変遷ダムの底
夕映えに野草一輪辻地蔵
あなたの姿思い浮かべて待つ駅舎

三田市 野口 龍

花びらが舞い散るように人は逝く
単身の淋しさ消して一人酒
埴生の宿私の家がそうです
手鏡で自分の顔にほれてます
恐い夢起きたらすでに忘れてる

高砂市 松尾柳右子

生駒市 永田美世子

外出は日陰の出来る時間帯

居乍らに天神祭祇園さん

健康な目覚め促す蟬の声

外出のたびに洗濯物増える

盆やすみ確かめ靴をはき替える

高砂市 裕木るい

無邪気ではとても百まで生きられぬ

猫の手じゃシッパ貼るには役不足

熱帯夜頭の中に金魚飼う

消えかけた母の名前があるタオル

良心の呵責多々ありおはぎ食う

西宮市 高橋千賀子

夏休み欠伸しているランドセル

初めての花火仔猫が腰抜かす

一日一善自問し床に就く

夏やセはしない年中食いしん坊

猛暑でも三食昼寝のしあわせ

生駒市 饗庭風鈴

マグマを抱いている地球愛おしい

始発で終点これからどこへ行く

またねと軽く手を振ったそれっきり

脳ミソの経年劣化ケタはずれ

北斎の波乗りこえて今日をゆく

蟻の列線香火花見上げてる

土用波ささいなことは泡と消え

泥んこを洗った干した夏終る

台風は地球を巡る天邪鬼

少子化は何処の国かと奈良の鹿

和歌山市 北原昭枝

ちちははがそこまで来てる盆おどり

ローソクの灯りがゆれている命

燃え残る線香なにか言いたげに

早朝の水やり花も生き返る

一服のむぎ茶が旨い家事の汗

和歌山市 倉橋悦子

舞いあがる言葉乾燥しきつてる

米を研ぐまるで約束したように

はらはらどきどき合鴨のお引越し

きらきら星が降った八月の灰色

いとおしむ庭の草花まで日焼け

和歌山市 定松宏枝

持ち歩く雨粒ほどの悩みごと

フードロス奥から取るのやめました

もったいない無駄に過ごした一昼夜

ため息はそつと丸めてゴミに出す

嫁気さく姑も気さくのやじろべえ

和歌山県 三 枝 眞智子

ムダな事出来る幸せコンパクト
佳き人に出会えた今日へドレミファソ
乾き切った手の平愛に飢えている
かくし味ほどのジョークが冴えている
アドバイス素直に受けて裏切られ

山口市 中 前 幸 子

雨垂れのリズムで一日を刻む
白い断章すげ替えた首が浮く
アドリブの街百態の風が吹く
また神話生まれる巨大深海魚
チャンネルはお笑い今日も無事終わる

鳥取市 上 山 一 平

蚊の羽音耳に媚びりて熱帯夜
子子の狭い溜まりは平和です
盆提灯高価でとても買えません
着飾ったシャンシャン踊り水飢饉
被災地の涙を汗にボランティア

鳥取市 佐々木 静 恵

あれあれで通じる昭和仲間です
夏疲れ明日の保証もなく眠る
少子化で公園の草伸び伸びと
翔平が息子でなくてほっとする
初体感空恐ろしい電気代

鳥取市 狹 武 紫 陽

扇風機にまで八つ当たりし猛暑
家ばかりいるとハートはすぐしぼむ
急がない暮らしを急かす予定表
ごつごつの手働き者とすぐわかる
鰻重は食べたしサブリ飲んでるし

倉吉市 宮 田 風 露

暑いあつい何度言っても冷めやせぬ
水分補給しすぎて足がパンパンだ
日陰追いぐるぐる回る草むしり
三十度越え卓球は休みます
夏まつり今年はすると回覧板

松江市 中 筋 弘 充

お隣りの犬がハアハア言っている
この暑さ少し辛目の蜆汁
暑いなあ向日葵畑から呻き
心配だ痩せ細ってる昼の月
あちこちが焼け焦げてきた世界地図

松江市 山 根 邦 代

十五夜にはほえみかえし照れている
想い出を一つ忘れて生きている
この暑さ外出等はごめんです
エアコンと仲良く出来る有難さ
夏休みこの暑さには声もなし

津山市 高橋 由紀女

佐賀県 真島 久美子

背もたれの椅子を拒んでいる齡
身に付いたマスク外せぬ必需品
エアコンのメーター知らずフル稼働
萎れても花の命を繋ぐ露
作業着のポケが呼んでいるスマホ

広島市 松尾 信彦

唐津市 前田 廣幸

猛暑にも持ち堪えてる趣味一つ
妻の留守創作メニユー母の味
都合よく忘れるという助け舟
おはようにメロディー付いていい数値
マニユアルを分厚くしてるクレマー

広島市 森田 博之

宮崎市 恵利 菊江

三人になると物事仕切る癖
昭和一桁少し出て来た希少価値
金無いと見たか詐欺電かからない
八十路坂妻先導でつつがない
来客へ書棚の本の配置換え

尾道市 村上 和子

豊見城市 あら さくら

恋文をチャットに頼みゴールイン
こころの痛み特効薬のお酒
ふたりとも体重減らぬこの猛暑
色褪せて強さを増した赤い糸
脚光を浴びて人生狂いだす

恋になる恋にならない微炭酸
答えならとつくだし出しているロダン
指輪まで脱いですっぱんぽんという
蟻の葬見ている無人偵察機
現実にお逃げなさいと言われる日
温暖化懐だけは寒冷化
指に付く「タレ」まで旨い並ぶ店
訳ありのワケと値段の品定め
外壁に刻む水位の叫び声
暑い熱い「やけど予報」の予感すら

人間の弱さ引き出す脂汗
漫画から少年少女羽搏く日
大脱走の虫見てる草筆り
人生の縮図を描く走馬灯
着膨れる言葉が罪を助長する
笑顔ある家にはきつと青い鳥
喜寿祝うケーキ作りの甘い部屋
かんじんな時に携帯置き忘れ
夏の夜にアイスで溶ける恋心
スクワット年の数までいちにさん

那覇市 禱

モモト

正直に嘘とお世辞はわたし無理
マスク顔皆気配りのボランテイア
高笑い暑さ吹き飛びさわやかに
猛暑日の立秋入りに冷房を
高値でも食べたい物は食べなきゃね

白河市 鈴木 たけし

新しいシューズの匂い米寿の日
独り居の無事を知らせる室外機
野の花も居場所違えばただの草
認証に役立たぬほど減る指紋
カードには対応しないドアもある

富士見市 中島 通則

表向き長寿歓迎する政治
AI加速一気に遅れ取る老化
下駄の音聞けば昭和ヘワープする
母と娘の太い絆は長電話
会う度に小さくなっていく老母

東京都 高岡 弥生

気づかない自分本位に生きてると
やつぱりなゴム手袋で手がかぶれ
予報よりいつも気温は2度高い
飲みきらないペットボトル並べてる
猛暑でも自然と生きる大切さ

横浜市 加藤 佳子

この猛暑ヒト科が天に吐いた唾
酔芙蓉もお疲れ気味の炎天下
水を飲む小忠実という字知った夏
姉が逝く九十三の家族葬
無人機が人の命を軽くする

横浜市 巖田 かず枝

日に三度笑って食べて歯を磨く
身の回り小さな不思議五つ六つ
お尻に火付いていますよ温暖化
耐えている地球にエール送りたい
今日もまた辛いニュースのてんこ盛り

小田原市 虎澤 昭久

開けるドア同時に入る蚊のずるさ
力士より土俵溜りのワンピース
関所より通行キツイセルフレジ
ここもかと青春の店消えてゆく
ミサイルを花火に変えてよタマやー

神奈川県 小田 幸子

目は父に口は母似と気がついた
気性は母思考は父似遺伝です
十六年亡父未だに家長です
耳鳴りかと思っていたのはセミの声
それぞれの窓にそれぞれあかりつく

豊橋市 小松 くみ子

梅雨明けて暑くなるよと蟬が鳴く

死語になる牛乳ビンの底メガネ

夏休みでも子どもたちの声が聞こえない

仰向けの蟬に群がる蟻元氣

京田辺市 加山 勝久

米中の狭間に生きて無為無策

多様性トイレばかりが浮き彫りに

定年を又々伸ばし再稼働

福島に魚に罪はないけれど

大阪市 尾崎 文子

何処けずる家計簿にらみまたうなる

コマーシャル私の財布ねらつてる

鶴橋の駅のおいで腹がへる

自分道自分で歩くしかないか

大阪市 白谷 よしみ

パプリカは君ピーマンは僕ですか

盆の朝ピシヤリと顔をひとたたき

どちらともいえずで埋めるアンケート

水槽に水跡の線金魚去る

大阪市 滝井 えみこ

悔しさにすすする素うどんはねるつゆ

簡単な組立家具の余るネジ

容赦なくマジックのネタあかす妻

ネタ帳をカンニングする妻の家

大阪市 田原 康雄

団体戦私に取りで缶ビール

七十三薄毛隠しのヘルメット

オモチャ屋に爺がキヨロキヨロ三周目

妻に天下渡して返事いつもはい

大阪市 前川 善之

甲子園負けても泣くな選手達

熱い夏物価高騰何時下がる

老人の年金下がるどう生きる

夏休み熱中症で行き場なし

泉大津市 葛城 隆雄

さてこれは頭の黒いネズミかな

暑氣払いそんな気分もどこへやら

夕涼みそんな風流死語と化し

好きな道飽きもしないでただ捻る

河内長野市 三輪 くにお

神祈り加護も頂くテロリスト

若作りそれでも席を譲られる

掛けないが五類のマスクポケットに

休耕田案山子祭りの案山子立つ

吹田市 西沢 司郎

あと一歩今年も踏みぬ甲子園

本気なら動き見てたらわかる筈

ひねくれた頭ひねって出る一句

この暑さ蟬に合わせて上げる声

摂津市 荻布律子

皆出かけ私の仕事テイータイム
ハンバーガー愚かな夢を咀嚼して
私には守る肩書なんて無い
髭折れた猫に問いたし明日のこと

藤井寺市 松井正義

地藏盆手にはファン持つ子供たち
ボケ頭よけいにぶるこの暑さ
まだ夏日秋を知る虫鳴きはしめ
ヒゲ面をかくせたマスク今つけず

寝屋川市 長尾千賀

菌に衣を着せて万端旨くゆき
調律のいる歳カラオケではスター
赤とんぼやさしい肩を知ってます
秋立ちぬ逝く時の言模索中

神戸市 石川克美

この暑さ誰にも文句言えませんが
転んで気づく筋力の衰えを
来て嬉し帰って嬉し孫元氣
怖いよね地球ふつとようするなんて

神戸市 濱口祐一

神仏は名のらなければ功德なし
文春の音声データなぜ出るの
一〇〇均が安い理由を考える
いかなの「い」何が遺憾か言ってみろ

小野市 田中辰夫

順調に歳を重ねた神経痛
夕焼けと潮騒のみで長湯する
温泉で出来た名句もお湯に溶け
病床へ妻は見舞いに庭の花

三田市 生田えい子

陽も沈みミミズの干物運ぶ蟻
終発バスひとり占めた里の道
夏祭り衣裳箆箭が踊り出す
猛暑日に癩癩起こす冷蔵庫

三田市 辻開子

ストレスを取ろうと出掛け人に酔い
入試には親の希望が見えかくれ
ごろごろとたまには何もせず過ごせ
笑顔なら今日一日を無事過ごせ

三田市 馬場貴美江

今日ひと日不平不満は腹のうち
雨だれをセラピーと聞く休息日
土石流豪雨の怖さ肌で知る
あの時が青春だった今想う

三田市 松下英秋

ひぐらしの声を肴に冷酒飲む
夏は蚊に献立をして七十年
睨んでもハの字の眉毛変わらない
オレの帰り待っているのはヤブ蚊だけ

三田市 森 玲子

この先もほど良く忘れ生きていく
ご近所さんへ庭の青じそおすそ分け
誕生日ビデオ通話でプレゼント
お昼寝も猫と一緒に川の字で

丹波篠山市 河南 すみえ

尽きるまで嫁いだミシン使う幸
暇なとき一人コトコト芋煮でる
十八番です素麺ゆでるコツがある
亡母の味似てきた料理自分褒め

丹波篠山市 澤 良子

長生きを散歩の犬と競ったが
十八番甚句先に唄われアどうしよう
外灯が夜中点灯鹿散歩
吹く風は待ってましたと腕広げ

西宮市 高瀬 照枝

せみの声早く歩けと急き立てる
夏越えの食べ拵えは本気です
わたし阿呆気まずい言葉くちすべる
明日のこと分かるはずない笑つとこ

西宮市 藤原 みよし

仲良しが喧嘩ばかりでまた笑う
己惚れた若さも失せて皆笑う
痛い顔には出さず痩せ我慢
赤トンボ秋つれて来て涼風も

和歌山市 佐藤 まき

暑熱順化トレーニングの消防士
過酷さに頭を垂れて視聴する
暑気よけとセールの胡瓜重く汗
早場米の収穫暑さなら我慢

和歌山市 鍋嶋 澄子

見せたいよ踏まれても咲く露草を
優しげに涙ひとつぶ出してみせ
弾けてる高校野球よ雄叫びよ
炎天を日傘くるくる幕参り

和歌山市 まつもと もとこ

むずかしいかんじをさけてやりすごす
沸々とウソを煮込めばセンブリ茶
水たまり避けて通れぬ細い道
夫とは一親等になれぬ仲

鳥取市 大前 安子

迎え火を独り焚きますここですよ
泥水が覆うニュースへただ祈る
八十路行くでもさだからさ言わぬ旅
子の目には我楽多だろう宝箱

倉吉市 若松 由紀子

朝昼晩独りの食事十年目
向かい風追い風もあり生きられる
若者の理会の出来ぬ流行語
三食の飯は忘れぬ物忘れ

米子市 川 本 美津子

この暑さ蟬も夏ばて低い声
あやまちは仕返し出来ぬ過去の事
日によつて心変わりには丸四角
厚すぎる親子の壁はくずれない

鳥取県 田 中 重 忠

雀蜂に刺され半日あほになる
自慢話するほど僕は種がない
口下手の僕にはできぬ口喧嘩
終戦で大和魂さえちやつた

鳥取県 橋 谷 静 江

嫁さんに家事分担で楽になり
夜明け前ふと川柳に起こされる
趣味の友氣が合い永くつづきそう
起きてすぐラジオ片手に畑へ出る

美作市 岡 本 余 光

しんどさが現われてくる夢にまで
下り坂とはいふものの楽でない
値上げにも変わらぬ予算絞る知恵
氣に入つた句だけが目立つ備忘録

広島市 田 桑 恵 子

大雨猛暑地球がついに狂い出す
やはりソーメン彩りのせて昼とする
財布の中で出番待つてる小銭たち
静寂の車中にマーチカバンから

竹原市 土 井 輝 恵

新盆を二人抱えて墓掃除
フレイルを防ぐ集いへ二ヶ所行く
縁ですね喧嘩した義姉看取るとは
残されたゴミも遺産と思う縁

福山市 新 庄 芳 春

急ぐのは止めたこれからマイペース
古い二人リズムの乱れ増えてくる
百歳の生きるリズムをお手本に
晩酌で今日のリズムを締めくくる

三次市 伊 藤 寿 子

宅配へもと彼の荷をナイシヨする
ああ人生あたしだったら生きている
変だけど昔の恋は親まかせ
よう出来た奥さまだったに早すぎた

松山市 郷 田 み や

石段は足元だけを見て上る
そうなんだ観光ガイドから答
大雨を踊りの連が吹き飛ばす
読みかけの本が斜めに置いてある

大洲市 花 岡 順 子

品質はさすが老舗の名に負けぬ
体質を思えど辛い花粉症
がっちりとスクラム少年の息吹
開幕へ夢は半ばの甲子園

八尾市 田邊 浩三

蟬が消す軽い耳鳴り有り難う
デイハウスこの一日が人生だ
副作用医者表情参考に
自転車に赤色キップ切る世代

大阪府 高木 道子

行列の店は本当に美味しいの
ちぎれ雲のとどのつまりはどうするの
猛暑日はへの字の口の鬼瓦
巻き戻し出来ぬ人生遠花火

神戸市 青木 公輔

一波乱有ったか社内騒がしい
指切りを右でするとは限らない
船出というのに見送りは影ひとつ
美しい化石が最大の友で

唐津市 坂本 良二

今風景スマホ片手にメール打ち
チャンピオン余裕で奪う四階級
本気だし末席汚し褒められる
長続きつかず離れず夫婦仲

那覇市 宮すみれ

何色もストレスのないリネン服
聞き上手自慢話は取っておく
らんまん雑草キラリ胸を張る
祝いより葬儀の多い七月や

弘前市 小山内 真由美

公園に子どものいない夏休み
素麺がいつも以上にうまい夏
枕の下に写真を置いて夢見た日
主人公真似して食べたビザの味

東京都 宮田 栄子

湘南のシラスはビザで夏を食む
憎いやつ京友禅のアロハ着て
この夏は猛暑を避けて引きこもり
残り香の亡父ポマード捨てられず

(前月分) 寝屋川市 長尾 千賀

当り触りなしに八十路の大阪弁
「知りまへん」と言って大方判つてる
あめちゃんと違うで夏はグミやねん
少な目の打ち水暑さ蒸し返し
声黄色暑さ知らずのギャル神興

(前月分) 松江市 山根 邦代

クーラーに守られて居る心地良さ
口グセの痛いイタイをとなえてる
久々にカミナリさんのイカリ聞く
シワかくし長袖シャツははなせない

川柳塔柳箋

3冊 送料共 1000円

事務所あてお申し込み下さい。

川柳句集『肉眼』

橘 高 薫 風

昭和乱世　今太閤は瘦せていず
愛人を帰して闘志一転す

寡婦の買う数珠のような首飾り

元旦ぞ　ルバング島も元旦ぞ

娘のボーイフレンドやよし　お元日

ルバングの一兵の生　宮中歌会

父の乗る船の模型が応接間

裏梅は聞えぬふりをする女

金剛山

霧這えば杉の樹間の正しさよ

深眠り　母娘相似のカメオ置き

哀歎の底に穴ある植木鉢

弥次郎兵衛　一人一点　殉死かな

裏切られあたたかきもの放尿す

姦計を鯛の目玉にさげすまる

男ばかり澄む　橋立は松の木ばかり
童貞さんふうわりと跳ぶ　春の泥

昼顔へとききたけれど波の舌

地下鉄に勤持つなりメーデー歌

暮れるばかり暮れるばかりの木屋町や

尼緑之介氏句碑

この句碑の　はじめて会うてなつかしさ

赤鼻の軒佳境に入りたり

呼び戻す　背なの赤子の名を呼んで

白昼夢　灰皿はわがコロシアム

核のごと艱難の齒がこぼれたり

安からめ　御身の胎児たり得れば

足摺の雨は遍路へ地から降る

寂滅と遍路の果ての月見草

路郎忌の天守の鯨に見据えられ

陶枕に睡蓮恋し　女人より

睡蓮は万丈光の光源よ

完

愛染帖

新家 完司選

(投句251名)

息子から行けたら行くという返事

(評) 甚だ曖昧な「行けたら行く」は「行きたくない」というニュアンスあり。相手が親だから言えることで、上司などには厳禁だ。

笑顔ならどんな服装でも似合う

(評) 不機嫌な顔ではせっかくのニューモードも台無し。朗らかな笑顔はどのような服装でも「おつ、似合っている!」と思わせる。

出自など知らぬ電気を使つて

(評) 朝から晩までお世話になっている電気だが、我が家のは水力で生まれたのか、火力なのか原子力なのか、確認したことはない。

猛暑でもいつも通りに食べてます

(評) 今年の夏は危険なほどの猛暑が続いているが、いつもと変わらず朝昼晩おいしく頂戴している。食欲は健康のパロメーターだ。

人間もよくよく見れば毛だらけだ

(評) そう、毛が生えていないのは手のひらと足の裏ぐらいか。「けもの」の語源は「毛物」とのこと。やっぱりご先祖は猿なのだ。

百名山踏破した友杖をつく

(評) 山登りが大好きな友人。久しぶりに会ったら杖をついて「歳には勝てないね」と笑っている。元氣者も歳月には従う他なし。

長生きで新たな出会い医師ばかり

(評) 若い頃には友が友を呼び、次々と新たな出会いが生まれた。だが、高齢になると次々と故障が出て、出会えるのは医師ばかり。

臓器提供夫の許可がおりてから

(評) 自分の身体だから誰にも遠慮せず提供の意思を示せば良いのだが……。やはり一心同体のような夫には許しを得ておきたい。

スピードはないが姿勢は競歩です

(評) 競歩の姿勢は長距離を速く歩けるように研究して生まれた。同じ姿勢をしているのだがスピードが出ないのはやむを得ない。

棺より花火の筒に入りたい

(評) 海洋散骨や樹木葬ではなく花火葬か。

勿論、遺体を打ち上げるのは無理。砕いた骨を筒に入れて花火大会の「打ち止め」大花火。

「そうめんでもいいで」の夏が始まった

加速度が付いたと思う温暖化

警告がやつと分かった温暖化

生活のリズム狂わす温度計

猛暑日は冷房スイッチためらわず

喉元を過ぎても暑い熱帯夜

かまってくれる妻が入院熱帯夜

八十路きて暑さこたえる散歩道

雑草も耐えているんだこの酷暑

熱波という目に見えぬ敵容赦ない

昭和の夏と同じであれば熱中症

猛暑日を我武者羅我慢暑苦し

危険な夏引き籠もるには打ってつけ

大阪市 宇都満知子

暑いですねに話のきつかけを貰う

神戸市 近藤 勝正

しばらくは暑いですねで用足りる

米子市 野川 宣子

主婦業を返上したいこの夏は

安来市 原 徳利

失敗の理由暑さのせいにする

三田市 辻 開子

庭の木が水・水・水と雨を呼ぶ

神戸市 みざわはな

耳鳴りも蝉しぐれだと聞いておく

鳥取市 福西 茶子

灼けた道熱いだろうに蟻の道

佐賀県 真島久美子

エアコンが無いと先月死んでいた

豊中市 水野 黒兎

浴衣なら着ます 水着は跳めます

ライバルの部屋ダイソンの扇風機

加古川市 石賀 邦子

代読の祝辞が通過いたします

交野市 山野 双葉

割ったのは五年で五枚皿洗い

山形 山野 双葉

ルノアールの絵のような人いて和む

交野市 山野 双葉

ビタミンが足りないのです独りです

交野市 山野 双葉

百点の謝り方があるそうなの

堺市 内藤 憲彦

盆の入り父へお経と缶ビール

羽曳野市 宇都宮ちづる

盆行は約十分と忙しない

尼崎市 山田 厚江

ポコポコと堅い土から蝉が出る

高砂市 松尾柳右子

熱中症かかわりなしの蝉しぐれ

河内長野市 森田 旅人

沸騰の夏と闘う蝉時雨

香芝市 山下じゅん子

七十年よく働いた歯がボロリ

岡山市 山下 凱夫

変装用マスク今さら外せない

馬鹿だなあ5類になってコロナとは

膝の上で酒の句集が昼寝する

大阪市 高杉 千歩

お祭りを掛け持ちしてた若かった

人生の黄昏今日も無為無策

川西市 大坪 一徳

海に沈む夕日のように終わりたい

藤井寺市 太田扶美代

思い出に生きる時間が長くなる

八十二歳夢の名残りがまだ少し

お肌カサカサ恋を忘れてからずっと

美作市 岡本 余光

承らえて死を考えるのも務め

私淑する人に知られぬ弟子になる

堺市 今井万紗子

四年振り選手宣誓夏が来た

三田市 堀 正和

アルプス席 吹く子唄う子踊る子も

大阪市 森 廣子

男子でもキラキラネーム甲子園

石川県 堀本のりひろ

千本ノック汗にまみれた遠い夏

弘前市 福士 慕情

プロ並みのユニホーム着る朝野球

那覇市 宮 すみれ

台風にやたら粉類買いこんで

寝屋川市 富山ルイ子

線状降水帯 友の身案す

尼崎市 板谷 賢二

濁流のどこに非難かメダカ達

大阪府 米澤 俣子

これ以上脱げない夏は大嫌い

箕面市 中山 春代

洗い替え一枚で済む夏が好き

宝塚市 岸田 万彩

進化した小玉スイカと夏を越す

神戸市 敏森 廣光

カキ氷頭の芯に突きささる

弘前市 稲見 則彦

捨てた雪ちょと戻して欲しい今

米子市 竹村紀の治

涼しい気温たったの30度

文豪風万年筆で誤字駄文

鳥取県

斉尾くにこ

男尊女卑化石になった四字熟語

高槻市

松岡 篤

言葉には賞味期限のない表記

那覇市

禱 モモト

几帳面な尺取虫に似た夫

大阪市

大川 桃花

反省と後悔 夫の脳から脱落す

桜井市

安土 理恵

物忘れ競い合いつつ夫婦老い

札幌市

三浦 強一

子を産まぬ選択したのアナタでしょ

横浜市

川島 良子

夫だけ痩せる魔法があるらしい

神戸市

富永 恭子

伸びずれば待つてましたと足がつる

神戸市

城戸 誓子

歳を知る娘に連れられて医者通い

岡山県

高岡 茂子

デイの日はシニアサロンへ行くと出る

高槻市

片山かずお

しゃべくりで五臓六腑を活性化

三田市

北野 哲男

おしゃべりはいきいき身体油切れ

橋本市

石田 隆彦

TKG食べPPKと逝くつもり

堺市

澤井 敏治

姉が逝く好きに生きたと片目閉じ

横浜市

加藤 佳子

お経より弔辞喜んでる遺影

宇部市

平田 実男

八月のふところに降る黒い雨

越谷市

久保田千代

童心に返りレンズの星月夜

海南市

山中 閑

真つ白なカーテンふわり飛ぶつもり

寝屋川市

廣田 和織

篩から零れる日まで悪あがき

鳥取市

狭武 紫陽

スノボーは無理でも乗れたシニアカー

岡山市

永見 心咲

地獄では毎日一度死ぬという

東大阪市

青木 隆一

怪談より背筋が寒い電気代

箕面市

出口セツ子

法律が増えて酸素が薄くなる

唐津市

仁部 四郎

たっぷりと目薬二滴かけ流し

防府市

坂本 加代

胃薬は「恵命我神散」が効く

大阪市

江島谷勝弘

環状線四十分の旅列車

東大阪市

青木ゆきみ

後ろからトントン席空きましたよ

奈良市

大久保眞澄

そんなもんさ待ち受けに住むスナフキン

弘前市

小山内真由美

ほぼ好きという君のことは嫌い

大阪市

白谷よしみ

分かり合えている筈なのにじれったい

船橋市

中嶋 常葉

性格は変えられないがイメチェンだ

黒石市

北山まどり

葡萄葉の下がる己等の秘密基地

熊本市

杉野 羅天

混浴ですと書いておくのが良い足湯

松江市

中筋 弘充

ポツチャリがいいと言われてよく食べる

豊見城市

あらさくら

トイレ済ませてから乗る体重計

大山市

金子美千代

デカ看板名所になっている浪速

堺市

村上 玄也

ゴミ出しに行くのも鍵をかけてから

神戸市

能勢 利子

本当に軽いあのちの社会面

広島市

松尾 信彦

おばあさんがいるから賑やかな国だ

大阪市

谷口 義

年寄りのトリセツなどと洒落臭い

神戸市

村松 久江

取説はマンガにしたら読むだろう

広島市

岸本 清

塩竈市 木田比呂朗
家計簿がブレイキ掛けるエコバッグ

松山市 大内せつ子
引き算ばかりでつかい穴は埋まらない

八幡市 武田 悦寛
最後まで主役になれず五円玉

和歌山市 まつもととこ
真円をフリーハンドで描く家族

生駒市 饗庭 風鈴
向こう岸たどり着けるかシャボン玉

倉吉市 大羽 雄大
一日に一笑探しくたびれる

香芝市 大内 朝子
新しい朝が来るたび生き返る

大阪市 平井美智子
八日目の蟬は朝から怨歌調

男鹿市 伊藤のぶよし
遠い耳笑顔で返す老いの知恵

松山市 柳田かおる
嗅覚が跳びはねている牛井屋

河内長野市 村上 直樹
ためらわず削除スマホに来る疑似餌

津山市 高橋由紀女
あれほどに咎めたスマホ命綱

大阪市 島田 明美
モヤシのプライド 貫く二十円

神戸市 斎藤 隆浩
ゴキブリには負けられへんといふ本気

豊中市 きとうみつ
赤ちゃんてまっかになって泣くんだよ

大阪市 滝井えみこ
反抗期ひらかぬアサリ見守って

大阪市 平賀 国和
僕は留守番妻は女子会レストラン

鳥取市 田賀八千代
怨みあるのか私ばかりを蚊が攻める

今治市 永井 松柏
災いは徒党を組んでやって来る

豊中市 藤井 則彦
忘れてたことも忘れる粋な人

岡山県 藤澤 照代
猫撫でて焦燥感を解けさす

高砂市 裕木 るい
片目だけ開けたら糸が通せます

鳥取市 奥田 由美
約束は友と同居のケアホーム

大阪市 久木野孝治
行きつけのそばもうどんも同じつゆ

富田林 中村 恵
無いよりはましと思つた破れ傘

大阪市 森田 遊子
年齢欄書いて自分にびつくりし

豊中市 上出 修
「ボチボチャ」たぶん儲けてはるんやろ

羽曳野市 黒木ひとみ
三元号生きて昭和が懐かしい

大阪市 小野 雅美
鈍行の揺れも楽しむ伍ビール

神戸市 米田利恵子
へアースタイル変えて息子が伍ビール

弘前市 高瀬 霜石
痛風の友よごめんなビール飲む

三田市 上田ひとみ
からあげに大ジョッキもうちとキツイ

藤井寺市 鈴木いさお
胆嚢を取つても晩酌は旨い

鳥取市 上山 一平
粋な酒帽子を質に縄のれん

豊中市 齋藤奈津子
シウヘイ熱一丸となる縄のれん

尼崎市 永田 紀恵
裏メニュー目当てに通う縄のれん

笠岡市 藤井 智史
体内の消毒ですと酒を呑む

羽曳野市 吉村久仁雄
もめ事はないことにして酒にする

大阪市 高杉 力
幻の酒と言われて猪口を出す

和歌山市 北原 昭枝
たまに飲む酒がやたらに心地よい

奈良県 長谷川崇明
あの世での宴会予習般若湯

松江市 石橋 芳山
食べたし飲んだしばらばらと解散

共選欄

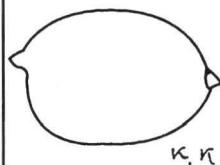
檸檬

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句312名)



「本 氣」 鈴木 いさお 選

核の傘本気でさして呉れるのか
詐欺電話本気で途中まで聞いた
本気度を試されている被爆国
本気度をマイナンバーが問うている
公約は誰も本気にしていない
静かだが八冠睨む目は本気
本当に好きだと言ったのは一人
本気で咲いている酷暑のひまわり
本気度を試されている崖っぷち
茶化しては本気を隠す照れ屋です
俺だってその気になれば象になる
添えぬなら死んでやります本気で
減量に頑張る妻を冷やかせぬ
いつもより濃い目に引いた赤い紅
ようかんの厚さに母の本気見え

宇部市 平田 実男
鳥取市 福西 茶子
神戸市 山崎 武彦
西予市 黒田 茂代
大阪市 寺本 実
堺市 坂上 淳司
大阪市 坂 裕之
船橋市 中嶋 常葉
黒石市 石澤はる子
鳥取市 池澤 大鯨
石川県 堀本のりひろ
大阪市 島田 明美
尼崎市 宗 和夫
河内長野市 坂野 澄子
大阪市 滝井えみこ

「本 氣」 川本 真理子 選

本気です百まで生きる 後四年
ありのまま正直に生きていきたい
本気だから太い字で書いてある
ボク叱る母は本気で泣いていた
夢の中でも本気で叱ってくれる母
母さんが本気で怒ることはせぬ
ようかんの厚さに母の本気見え
正座した妻は本気な顔になる
いつも本気共に笑って泣いた友
おばあちゃんそれでも本気走ってる
頑張れど本気だしてと孫は言う
澄んだ瞳に大人の本気試される
守るもの出来て本気も嘘もない
誰のため何のためにと問う本気
茶の間みな監督となる甲子園

鳥取県 田中 重忠
豊見城市 あらさくら
大阪市 宮崎シマ子
大阪市 川端 一歩
黒石市 石澤はる子
大洲市 花岡 順子
大阪市 滝井えみこ
吹田市 太田 昭
豊中市 貝塚 正子
豊中市 池田 純子
大阪市 奥村 五月
和歌山市 柏原 夕胡
広島市 有田 澄子
神戸市 富永 恭子
岡山県 藤澤 照代

人生は本気遊びのバランスで
 悪知恵が本気になると湧いてくる
 愛されて本気が怖くなってきた
 本気だな捻り鉢巻しているぞ
 本気らしい笑ってるけど目が恐い
 実力はこの程度です本気です
 本気だなお国訛りのお説教
 打ち込めるものに魂かたむける
 擦れ擦れの本気でうまく遊ばはる
 愛情の本気度試すブチ家出
 本気ではないな返事が軽すぎる
 バレぬよう本気で嘘をついている
 本気と本気だから血の沸く甲子園
 答弁の本気度見えぬもどかしさ
 寿命知るセミが本気の七日間
 七夕の短冊に見る子の本気
 少子化へ国の本気度見えてこず
 本番の仮面そろそろつけ換える
 本気なら神様の目に止まるはず
 ハルキストいつも本気で待っている
 もう一度本気になってみる卒業
 太陽が本気を出している猛暑

| | | | |
|-------|--------|-------|-------|
| 尾道市 | 小畑 宣之 | 河内長野市 | 村上 直樹 |
| 鳥取県 | 田中 重忠 | 米子市 | 竹村紀の治 |
| 松山市 | 宮尾みのり | 三田市 | 村田 博 |
| 熊本市 | 杉野 羅天 | 浜松市 | 中田 尚 |
| 奈良市 | 加藤江里子 | 高槻市 | 松岡 篤 |
| 南あわじ市 | 萩原 狸月 | 神戸市 | 山崎 武彦 |
| 河内長野市 | 中島 一彌 | 宇都市 | 平田 実男 |
| 尾道市 | 小川 道子 | 松山市 | 栗田 忠士 |
| 生駒市 | 飛永ふりこ | 藤井寺市 | 太田扶美代 |
| 堺市 | 村上 玄也 | 鳥取市 | 奥田 由美 |
| 寝屋川市 | 伊達 郁夫 | 米子市 | 妹能令位子 |
| 安来市 | 原 徳利 | 神戸市 | 酒井 宏 |
| 河内長野市 | 村上 直樹 | 可見市 | 板山まみ子 |
| 箕面市 | 広島 巴子 | 大阪市 | 岡田 恵子 |
| 八幡市 | 武田 悦寛 | 奈良県 | 長谷川崇明 |
| 寝屋川市 | 長尾 千賀 | 弘前市 | 福士 慕情 |
| 神戸市 | 奥澤洋次郎 | 鳥取市 | 吉田 弘子 |
| 生駒市 | 饗庭 風鈴 | 安来市 | 原 徳利 |
| 鳥取市 | 岸本 孝子 | 羽曳野市 | 吉村久仁雄 |
| 富士見市 | 中島 通則 | 寝屋川市 | 伊達 郁夫 |
| 羽曳野市 | 三好 専平 | 河内長野市 | 森田 旅人 |
| 豊中市 | きとつこみつ | 鳥取県 | 斉尾くにこ |

本気と本気だから血の沸く甲子園
 あと一人あと一球と甲子園
 敵方を本気にさせた野次ひとつ
 指ならば力士に勝てるかも知れん
 環境保全ヒト科の本気待つ地球
 本気度を試されている被爆国
 核の傘本気でさして呉れるのか
 本気ではないから謝罪繰り返す
 追伸の二行は本気 本音です
 あと二キロを神と誓ったダイエツト
 三日なら本気でできるダイエツト
 三回目風が嗤っている本気
 本腰を入れた禁煙四回目
 今度は本気や五回目の禁煙
 縄のれん朝の本気をもう忘れ
 冗談か本気か読めぬ微笑だ
 冗談と本気わからぬ程陽気
 バレぬよう本気で嘘をついている
 本気でも勝てず手抜きのみをする
 後悔は本気になったことがない
 本気など重いだけですチヨコレート
 マンボウになりたい半分本気です

| | |
|-------|-------|
| 河内長野市 | 村上 直樹 |
| 米子市 | 竹村紀の治 |
| 三田市 | 村田 博 |
| 浜松市 | 中田 尚 |
| 高槻市 | 松岡 篤 |
| 神戸市 | 山崎 武彦 |
| 宇都市 | 平田 実男 |
| 松山市 | 栗田 忠士 |
| 藤井寺市 | 太田扶美代 |
| 鳥取市 | 奥田 由美 |
| 米子市 | 妹能令位子 |
| 神戸市 | 酒井 宏 |
| 可見市 | 板山まみ子 |
| 大阪市 | 岡田 恵子 |
| 奈良県 | 長谷川崇明 |
| 弘前市 | 福士 慕情 |
| 鳥取市 | 吉田 弘子 |
| 安来市 | 原 徳利 |
| 羽曳野市 | 吉村久仁雄 |
| 寝屋川市 | 伊達 郁夫 |
| 河内長野市 | 森田 旅人 |
| 鳥取県 | 斉尾くにこ |

針の穴くぐってやって来た男

本気一徹冗談も通じない

本気度を試すリトマス紙が欲しい

本当のことを伝える糸電話

本気ですか敬老会の御案内

のほほんと暮らした日日が悔やまれる

本気かと問われ三秒躊躇する

本気度は心拍数がお見通し

まだ八十本気で恋をしてみたい

こんな俺おいて家出は本気なの

正座して動かぬ少年の一寸

初めから本気でやれば出来たはず

尻に火がつかぬと本気出ぬ私

何も要らない貴方と長く暮らしたい

トンネルを抜けて芽吹いてきた本気

ぶつかった本気が誤解解きほぐす

敵方を本気にさせた野次ひとつ

たわむれが本気になって火傷する

本気ではないから謝罪繰り返す

三日なら本気でできるダイエット

ダイエット本気でやったことがない

どこまで本気か今だに分からない

岐阜県 喜多村正儀

神戸市 みぎわはな

香南市 桑名 孝雄

越谷市 久保田千代

米子市 野川 宣子

三田市 多田 雅尚

東大阪市 青木 隆一

東大阪市 青木ゆきみ

岡山市 丹下 凱夫

奈良県 中堀 優

大阪市 田中ゆみ子

尼崎市 永田 紀恵

三田市 大西 重男

堺市 内藤 憲彦

奈良県 渡辺 富子

羽曳野市 藤原 大子

三田市 村田 博

和歌山市 北原 昭枝

松山市 栗田 忠士

米子市 妹能令位子

尼崎市 羽奈 和子

大阪市 谷口 義

来世では真面目に生きてみる本気

のほほんと暮らした日日が悔やまれる

秋になれば本気出しますホントです

占いを信じてしまふ歳になる

ネクタイを緩め本気で飲む顔に

にこりともしないで酒を飲んでいる

酒を飲むときも一途になつて

本気らしい酒を止めたという噂

本気だな飾りを何もつけてない

本気だなお国訛りのお説教

本気度が肩にくい込む生真面目さ

本気出す時はラーメン食べる時

4Bで本気で書いたラブレター

いつもより濃い目に引いた赤い紅

本気ですからと通帳見せられる

本屋から真一文字の口で出る

一心にひたすら祈る百度石

短冊に口には出さぬ願い事

本気なら神様の目に止まるはず

全力で泣いたからもう迷わない

本当のことを伝える糸電話

しんとした部屋にポツンと置き手紙

西宮市 亀岡 哲子

三田市 多田 雅尚

橿原市 居谷真理子

八尾市 田邊 浩三

堺市 柿花 和夫

黒石市 北山まみどり

岡山市 丹下 凱夫

堺市 澤井 敏治

松山市 柳田かおる

河内長野市 中島 一彌

広島市 松尾 信彦

東大阪市 青木 隆一

三田市 野口 龍

河内長野市 坂野 澄子

大阪市 平井美智子

佐賀県 真島久美子

香芝市 大内 朝子

宝塚市 岸田 万彩

鳥取市 岸本 孝子

三田市 上田ひとみ

越谷市 久保田千代

大阪市 小野 雅美

散る美学知って本気で今日を編む
いつでも本気しんどうい時もあるけれど

堺市 柿花 和夫

大阪市 森 廣子

本気でですからと通帳見せられる

大阪市 平井美智子

もうこれが最後通告ですあなた

土佐清水市 辻内 次根

老いらくの恋の本気は恐ろしい

尼崎市 八木 幸彦

「いつ死んでも」を本気にしてはいけません

奈良市 大久保眞澄

記名なら本気で書けぬアンケート

鳥取市 奥田 由美

命産む本気の汗の美しい

香芝市 大内 朝子

守るもの出来て本気も嘘もない

広島市 有田 澄子

心からお詫びをしてる顔じゃない

三田市 堀 正和

リハビリの本気このままでは枯れぬ

大山市 金子美千代

マンボウになりたい半分本気で

鳥取県 斉尾くにこ

決心がついて二人目産むと言う

鳥取市 吉田 弘子

初デートプランCまで準備する

大阪市 高杉 力

賞金がないから本気にはなれぬ

松山市 柳田かおる

本気でも勝てず手拔きのふりをする

羽曳野市 吉村久仁雄

ボク叱る母は本気で泣いていた

大阪市 川端 一步

本気だと言われ苦勞を覚悟する

大阪市 森田 遊子

秀 句

秋になれば本気出しますホントです

檀原市 居谷真理子

晩成の本気は所詮蜚氣楼

豊中市 水野 黒兎

不自由になって本気になるいのち

貝塚市 吉道あかね

終活を友の計報がまた迫る
熱血漢ひと肌脱いでばかりいる

豊中市 水野 黒兎

弘前市 高瀬 霜石

顔面を石仏にして勝負する

笠岡市 藤井 智史

ここはもう情容赦のない本気

泉大津市 葛城 隆雄

懸命にやって本気が冷やかされ

大阪市 近藤 正

針の穴くぐってやって来た男

岐阜県 喜多村正儀

笑いすぎるピエロは本気なんだろう

今治市 永井 松柏

再起かけ下り列車に乗ってみた

池田市 太田 省三

太刀打ちのできぬ本気を知っている

枚方市 藤村 亜成

本気なら私は口に出さずやる

奈良県 安福 和夫

風紋の一意専心嘘がない

男鹿市 伊藤のぶよし

打ち込めるものに魂かたむける

尾道市 小川 道子

不自由になって本気になるいのち

貝塚市 吉道あかね

命削り命を繋ぐ蟬の声

大阪市 石田 孝純

蟬時雨たった七日を燃え尽きる

鳥取市 狭武 紫陽

鳴いて鳴いてひたすら生きる油蟬

高槻市 初代 正彦

恋い焦れ蟬燃え尽きる炎天下

河内長野市 穂口 正子

合掌の深さが増した蟬しぐれ

土佐清水市 辻内 次根

秀 句

全身で聞いてくれますまだ五歳

神戸市 米田利恵子

擦れ擦れの本気でうまく遊ばはる

生駒市 飛永ふりこ

隣の子もセミも本気でないている

八幡市 武田 悦寛

「やがて」

(投句 214名)

村上玄也 選



大器晚成言われ続けて五十年
慌てない揺れが収まるまで待とう

今が好きまだ見ぬ先は考えぬ
人間を舞い終えやがて白い骨

長寿国美人薄命やがて死語
倒木の次代育てる土となる

大物を逃がした話尾鰭つく

凡人はやがてやがての繰り返し
エルメスもシヤネルもやがてゴミとなる

おむつなら買ってあります物置に
やがてくる酒ビールから点滴に

多すぎてやがてわすれていく事件
ランドセル背負いやがては親背負い

モデルハウスやがて同居の父と見る
きな臭いいつか来た道辿りそう

田舎育ちやがて都会の風に溶け
便利使いされてる今が華である

温暖化やがては消えてゆく氷河
森伐って小川濁流土石流

終点に近づくころに席は空く

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-------|------|-------|-----|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|-----|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|
| 奈良県 | 室田 行久 | 東大阪市 | 佐々木満作 | 越谷市 | 久保田千代 | 富田林市 | 山野 寿之 | 奈良県 | 長谷川崇明 | 橿原市 | 居谷真理子 | 岡山県 | 藤澤 照代 | 大阪市 | 岩崎 公誠 | 大阪市 | 島田 明美 | 鳥取市 | 福西 茶子 | 八幡市 | 武田 悦寛 | 高槻市 | 島田千鶴子 | 高槻市 | 松岡 篤 | 貝塚市 | 石田ひろ子 | 八王子市 | 川名 洋子 | 鳥取市 | 前田 楓花 | 大阪市 | 森田 遊子 | 弘前市 | 福士 慕情 | 神戸市 | みぎわはな | 大阪市 | 今村 和男 |
|-----|-------|------|-------|-----|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|-----|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|

出世払いなんて素敵な言葉だろう
微笑みの底で逆流する言葉

豪邸がやがて廃墟になる過疎地
北国でミカンを作る日が来そう

AIはやがて盗作さわぎ生む
精進へやがて花咲き実を結ぶ

無人駅やがては風の音になる
儚いね蟬鳴き疲れ蟻の餌

あとちよと印籠やがて現われる
ほろ酔い気分やがて天使に誘われる

失敗もやがて一つの本になり
やがてやがておひとり様という覚悟

佳句

五十から掛けた保険がもらえそう
酒呑みのやがてを見せる断酒会

現金も私も不用品になる
核持てばボタン押す奴やがて出る

絶滅の危惧種に入れる鯉幟
人

ブーメランやがて私を振り返り討ち
地

少子化で取られ兼ねない長寿税
天

週末時計やがて一分切れる地球
軸

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-------|-------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-----|-------|------|-------|-----|------|-----|-------|
| 弘前市 | 高瀬 霜石 | 河内長野市 | 穂口 正子 | 米子市 | 後藤 宏之 | 松山市 | 大内せつ子 | 高槻市 | 富田 保子 | 大阪市 | 平井美智子 | 三田市 | 北野 哲男 | 南あわじ市 | 萩原 狸月 | 奈良市 | 大久保真澄 | 河内長野市 | 藤塚 克三 | 鳥取市 | 岸本 宏章 | 和歌山市 | 三枝真智子 | 三田市 | 村田 博 | 豊中市 | 水野 黒兎 |
|-----|-------|-------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-----|-------|------|-------|-----|------|-----|-------|

「糸」

石 澤 はる子 選

(投句 212名)



糸トンボよ熱中症に気いつけや
五十年木綿の糸でむすばれて
裁縫が得意な友の糸切り歯
糸瓜の酢物楽しむ夏の膳
初デート誘う手段は糸電話
幸せに死角があつて蜘蛛の糸
墨糸の張り具合ですこの道は
失恋の傷を二か月にて抜糸
一の糸ビビンと津軽三味唸る
父母に繋いでほしい糸電話
核廃絶へ糸がからまる被爆国
袖通さぬしつけ糸から母の声
袂より手つとり早い糸切り歯
信念を貫く母の糸通し
赤い糸金糸に変えた五十年
停戦の糸口どこにウクライナ
ハズキルーペ無ければ糸を通せない
糸トンボよりも密かに棲んでる
糸くずの白が際立つ通夜の席
自分史は金糸銀糸を織り込んで

| | | | |
|-------|--------|-------|--------|
| 堺市 | 澤井 敏治 | 堺市 | 澤井 敏治 |
| 樺岡市 | 居谷真理子 | 樺岡市 | 居谷真理子 |
| 尼崎市 | 山本 百合 | 尼崎市 | 山本 百合 |
| 熊本市 | 杉野 羅天 | 熊本市 | 杉野 羅天 |
| 八幡市 | 武田 悦寛 | 八幡市 | 武田 悦寛 |
| 佐賀県 | 真島久美子 | 佐賀県 | 真島久美子 |
| 弘前市 | 稲見 則彦 | 弘前市 | 稲見 則彦 |
| 笠岡市 | 藤井 智史 | 笠岡市 | 藤井 智史 |
| 弘前市 | 福士 慕情 | 弘前市 | 福士 慕情 |
| 男鹿市 | 伊藤のぶよし | 男鹿市 | 伊藤のぶよし |
| 堺市 | 内藤 憲彦 | 堺市 | 内藤 憲彦 |
| 大阪市 | 古今堂蕉子 | 大阪市 | 古今堂蕉子 |
| 大阪府 | 米澤 俣子 | 大阪府 | 米澤 俣子 |
| 河内長野市 | 坂野 澄子 | 河内長野市 | 坂野 澄子 |
| 南あわじ市 | 萩原 狸月 | 南あわじ市 | 萩原 狸月 |
| 大阪市 | 平賀 国和 | 大阪市 | 平賀 国和 |
| 松山市 | 宮尾みのり | 松山市 | 宮尾みのり |
| 岡山市 | 丹下 凱夫 | 岡山市 | 丹下 凱夫 |
| 池田市 | 太田 省三 | 池田市 | 太田 省三 |
| 塩竈市 | 木田比呂朗 | 塩竈市 | 木田比呂朗 |

黒幕が舞台の裏で糸を引く
義理の糸切つて我が家も家族葬
縦糸に横糸紡ぎ半世紀
五人の子育てた母の駄糸
赤い糸品足かな未婚率
もつれ糸自問自答を繰りかえす
釣糸を垂れて短気を忘れてる
透明の糸が絡んで生かされる
子沢山の糸束ねた母の糸車
虹の糸編んで平和へ架ける橋
思惑の通りに行かぬ赤い糸
絹糸に蚕の命宿つてる

佳 句

タコ糸を切つたらちっぴけな自由
横糸に笑いを足して今日を織る
くもの糸きみは構造建築士
言い過ぎた今日を繕う木綿糸
回れよ回れ平和を紡ぐ糸車

人

大物を釣り上げるまで糸垂らす

地

歳月の懷にある駄糸

天

大局を動かしている木綿糸

軸

和解への糸口探る夕あかね

| | | | |
|------|--------|------|--------|
| 豊中市 | 上出 修 | 豊中市 | 上出 修 |
| 大山市 | 関本かつ子 | 大山市 | 関本かつ子 |
| 倉吉市 | 大羽 雄大 | 倉吉市 | 大羽 雄大 |
| 豊中市 | 松尾美智代 | 豊中市 | 松尾美智代 |
| 米子市 | 妹能令位子 | 米子市 | 妹能令位子 |
| 今治市 | 永井 松柏 | 今治市 | 永井 松柏 |
| 香芝市 | 大内 朝子 | 香芝市 | 大内 朝子 |
| 奈良県 | 中原比呂志 | 奈良県 | 中原比呂志 |
| 三原市 | 笹重 耕三 | 三原市 | 笹重 耕三 |
| 富田林市 | 山野 寿之 | 富田林市 | 山野 寿之 |
| 高槻市 | 富田 保子 | 高槻市 | 富田 保子 |
| 神戸市 | みぎわはな | 神戸市 | みぎわはな |
| 黒石市 | 北山まみどり | 黒石市 | 北山まみどり |
| 三田市 | 稲角 優子 | 三田市 | 稲角 優子 |
| 貝塚市 | 石田ひろ子 | 貝塚市 | 石田ひろ子 |
| 大阪市 | 平井美智子 | 大阪市 | 平井美智子 |
| 大阪市 | 高杉 力 | 大阪市 | 高杉 力 |
| 米子市 | 中原 章子 | 米子市 | 中原 章子 |
| 越谷市 | 久保田千代 | 越谷市 | 久保田千代 |
| 弘前市 | 高瀬 霜石 | 弘前市 | 高瀬 霜石 |

初級教室

題 道

平井 美智子

道は通行するところですが人の守るべき義理とか教えとしての道もあります。したことや見たものをそのまま詠むのではなく思いや感情を入れた自分だけの道として、具象を使って詠むことも大切だと思います。

★リズムについて考えよう！

安易な中八音や下六音の句、本当に他の言い方がないのか推敲してみましょう。

原 蝶の道見つけて孫から網を取るくにお蝶の道という素敵な言葉を見つけられたのに残念！ 中八です。

参 蝶の道見つけ孫から網を取る

原 決めた道進んでいくこと正解だ 弥生

参 決めた道突き進むのが正解だ

原 道路標識見落しやけに遠回り 風露

上句は七音でもよいのですが五音になるのなら五音の方が落ち着きます。

参 標識を見落しやけに遠まわり

原 後世の道はきれいに空けておく 良子

折角の上五音ですが上句においては助詞をいれて上六音にする方法もあります。

参 後世への道はきれいに空けておく

★イメージをひろげよう！

心象を具象に託すことにより、伝達性は倍増すると思います。

原 横道にそれてそのままそれつきり 風鈴

そのままでそれでそれつきりは言わなくてもわかりますので下五には別の言葉を！

参 横道にそれたまんまの恋ひとつ

原 嫁さんは回り道かなまだ来ない 不二夫

何で回り道なのか言葉を膨らませるとイメージが湧きやすいです。

参 嫁さんは匂いに釣られ回り道

★表記に注意しましょう！

原 大丈夫この道の先僕がいる 歌子

(この)がつくと限定されますのであの・その・このはなるべく控えましょう。

参 大丈夫道の先には僕がいる

原 あの人に遭わぬようにと回り道 邦子

あの人を(先輩)とか(天敵)等の具象で表現してみてください。

参 ライバルに遭わぬようにと回り道

原 越し方を振り返りつつ、道すすむ 純子

返えりは返りです。

参 越し方を振り返りつつ進む道

原 行く宛が無くてやっぱ戻る道 いるい

間違いいではありませんが宛は送り先、届け先の意、当ては目当て、目的の意です。

参 行く当てが無くてやっぱ戻る道

原 したたかに我道歩み今生きる ひとみ

我道は我が道と表記しましょう。

参 強かに我が道歩み生きてゆく

原 正直に生きた道で嬉しいの 照枝
(生きた)の表現を変えてみました。

参 正直に生きた道だと胸を張る

★参考にしてください！

原 道路ふちカンナ色花そつと折る ミヨノ

作者の意図と違うかもしれませんが

参 道路沿いカンナの花が咲いている

参 道端のカンナをそつと持ち帰る

原 自転車道杖の代りに押して行く えい子
題の(道) という字に拘り過ぎかも・・・

参 自転車を杖の代りに押す歩道

原 夢を追う老いの坂道汗を積む(原)幸子
汗を積むという表現が気になります。

参 汗かいて老いの坂道夢を追う

原 道筋を立てた子育て軋む音 レイ子
親としての切なさ胸を打ちます。

参 道筋を立てた子育て軋みだす

★このままでも良いと思いますが・・・

原 実家への道は老いても忘れない 静 恵
静恵さんの想いを、少しドラマチックに
表現してみました。

参 実家への道を迎れば母の声

原 お手軽に地産地消の道の駅 行 久
上五に(村起こし) など色々入れてみて
ください。

参 まとめ買い地産地消の道の駅

原 道すがら汗を拭きふき六千歩 閑
(道) という題を強調するのであれば

参 六千歩数え私の散歩道

原 人の道外れたニュース多過ぎる 正義
これでもよいのですが正義さんならでは

の具象を入れた表現を試みて下さい。

参 人の道外れ子殺し親殺し

参 人の道外れ戦をけしかける

原 久々に逢えた余韻の帰り道 百合
逢えたを省いて余韻に重きを置くかどうか。

参 久々の余韻に浸る帰り道

原 イケメンのガードマン立つ道普請 律子
(道普請) と素敵な言葉なのですが親し
みやすく表現すると

参 工事中ですとイケメンガードマン

原 振り向けば蛇行と気付く己が道 博之
その時は夢中で歩かれたのでしょうか。

参 振り向けば曲がりくねった道だった

★添削不要の句

○峠道いたわりながら二人連れ 一 平
仲の良いご夫婦像が浮かびます。

○地図読めぬ男でいつも迷い道 尚
上句が少し説明的ですが、世話を焼きた
くなるような可愛い男性像が浮かびます。

○年金で今日もほそそ生きてます 龍
(年金での生きる道) も道という発想の一
つということでした。

○電線の影さえ頼る夏の道 タカ
電柱ならしかりですが電線の細い影さえ
頼りたい暑さ。電線が見つけです。

○影二つ部活帰りの回り道 双葉
いいですね。主将とマネージャー？
何だか胸キュンの世界ですね。

○散歩道犬の速度が心地よい 栄次
速度に目をつけたところに○。人間と犬
きつと、一体で歩まれているのでしょう。

○マイウエイ歌い続けて半世紀 芙美子
言い換えれば自分の信じる道を歩き続け
たということ。素晴らしいことです。

○極楽へ行く道ナビで探してる 泰宏
最近のナビは優秀と聞きますが極楽へは
上手く案内してくれるんでしょうかねー。

○真夜中のゼブラゾーンを埋める雪 えみこ
季節感が少し気になりましたが具象の確
かさでいただきました。

○何ひとつ道も極めず行く八十路 賢二
屹立とした句姿に感動。

沢山の佳句に明日への道を考える機会をい
ただきました。ありがとうございます。

川柳塔鑑賞

同人吟 内 田 志津子

— 9月号から

院通い出来ますように。

奥様と呼ばれるための日傘買う

太 田 省 三

貧しさも今健康の麦ごはん

吉 道 あかね

麦ごはんが貧しさの象徴とされていたあの頃。芋と共に貴重なエネルギー源でもありました。今は玄米と並んで体脂肪対策としてオシヤレなカフェ等で提供されている麦ごはん。時の流れと共に昭和が遠くなります。

若い漫才笑いどころがわからない

大久保 眞 澄

全くの同感です。笑うツボが鈍化したのか、喋りのスピードについて行けないのか。そのうち、ここ笑う所ですよ。なんて言われてしまいそうです。

夫婦だとも思う他人だとも思う

工 藤 千代子

夫婦とは共に一生を過ごすパートナーとありますが、実に不可解なもの。時々そ

の正体を見失い悩む事もしばしば。

恥ずかしい情けないことこれから

田 中 ゆみ子

年々出来ない事が増え続ける情けなさ。AIだのSNSだの教えられてもすぐに忘れる習得力の欠如。もう聞き直るしかありません。私はそうしています。

遺産なし運と知恵だけだった

奥 村 五 月

いいですね、運と知恵。最高の遺産だと思えます。強い運と悟りを開くとされる知恵を使い切るまで人生を楽しんで下さい。五月さんの強運が続きますように。

病院は元気でないと行けません

田 中 廣 子

思わず笑ってしまいました。おっしゃる通り——元気に歩けなければ病院へは行けません。廣子さんがいつまでも元気で病

真っ白の大きなバラソルを深い目にさすご婦人。確かに奥さんではなく奥様と声掛けたくります。女性心理を言い当てていると思います。

胸の内語り出したら発火する

大 島 ともこ

神経内科の先生がおっしゃるには、背骨の歪みまでも心理的ストレスが要因だそうですね。ともこさんも我慢するのは程々にして発火しちゃって下さい。

休肝日守り元気になる米寿

澤 井 敏 治

休肝日なくとも元より元氣な作者。米寿の今でも句会の中心を担う姿に頭が下がります。益々のご活躍を期待します。

ドクターが頑張らなくて良いと言う

雪 本 珠 子

真面目で几帳面な人はどより以上に頑張ってしまう。ドクターもそんな珠子さんをご覧になったの助言でしょう。時にはズ

ボラも大事。

川の水が澄んでいるだけで癒やされる

水野 黒 兔

山を歩いていると丁度疲れた頃に澄んだ水の流れる川、池、滝寺に遭遇します。

それだけで心が癒やされ、また元気に歩く事が出来るのです。

人間が元に戻った脱マスク

山 野 寿 之

マスク下かくれた皺が顔を出す

大 浦 初 音

マスク姿三年も経つとマスクを外した時、*「あれ、あの方こんな顔だっけ」*と思う事があります。本当の素の姿に戻って仕切り直します。もうこれ以上コロナが蔓延しませんように。

味はまだ新鮮沢ありの半値

佐々木 満 作

今や日本の年間食品廃棄量は523万トンと言われています。賞味期限は自分の舌で決める。賢い選択で少しでも食品ロスの削減に努めたいものです。

父の日に朝一番の宅配便

辻内 げんえい

母の日に比べて認知症の低かった父の日ですが近頃は父の日もすっかり定着しました。さて、げんえいさんには朝一番に何が届いたのでしょうか？

母子家庭悲劇を生んだ母の恋

萩 原 狸 月

後を絶たない児童虐待死。母と女の狭間でゆれ動く母親の姿も切ない。記事を目にするたび胸が痛みます。

梅雨の入り懸雨も時には牙をむく

長谷川 崇 明

多くてもゼロでも困る雨の量

永 原 昌 鼓

梅雨は庭の草木や街路樹にとつて救世主と言えますが近頃の雨は人類を襲う凶器ですね。樹木を倒し、家屋を流す。時には人の生命さえ奪ってしまっています。梅雨らしいシトシト雨は何処へ行ってしまったのでしょうか。

向日葵と書いて「ハイワ」ルビを振る

丹 下 凱 夫

ウクライナの向日葵畑には花はいつ咲くのでしょうか。戦争の惨状を知るたびに平和な日本に生まれた事に感謝しています。

あきらめ上手きつと生き方上手だね

大 内 せつ子

過ぎ去った事をよくよくしても何も始まらない。サッサと諦めて次の目標に向かって歩き出す。見習いたいものです。

身の丈で生きてきました悔いがない

小 松 紀 子

「悔いがない」 はつきりと言い切った紀子さん。その時その時を精いっぱい生きて来られた事と想像します。プラボーと叫びたい。

飽きもせず小さき火傷を繰り返す

川 名 洋 子

この場合の火傷とは体に受けた外傷ではなく、心的ストレスだったり人間関係の摩擦だったりするのでしょうか。*「飽きもせず」*と自分で自分を評価されている所がいいですね。

水煙抄鑑賞

— 9月号から

牧野芳光

頑張ろうすこし薄めて生きてみる

小山西 真由美

シャカリキになって生きてゆくのは若い年代の時だろう。ひと歳とつた今は人生を味わう時だと思える。一日一日を味わって生きてゆきたい。

淋しさに慣れていくのはなお淋し

岡田恵子

何かに熱中していると淋しさを紛らす事は出来るが、根本的には無くならない。淋しさに慣れっこにならないように、熱中出来るものを探すのが一番。

朝一番今日はいい日と言ってみる

山野双葉

朝起きた時に鳥の声が聞こえたらしい日だと感じる。天候に関係なくいい日だと自分に言い聞かす事が出来れば、いい日になる確率はアップする。

夫婦箸せめて寄り添う箱の中

板谷賢二

高齢者になると夫婦と言えども他人に近くなる。家庭内別居もあり、同じ箸箱に同居するだけでも上々である。

鈍くなる足腰口は無尽蔵

高木道子

足腰が弱って来るのは年相応であるが、口だけは長年の経験により鍛えられており、老化とは無縁なのである。

赤点がところどころにある暮し

倉橋悦子

平均点を求めるのは、日本人の悪い癖だと思える。平均以下があってもそれ以上があるのだから嘆く事はない。

割れない風船どこまでも追い掛ける

中前幸子

割れない風船とは「理想」を指す言葉と思える。勇気を持って追いかければいいか叶うに違いない。

試写会の余韻茶漬で流し込む

西川千鶴

映画を観ている間は主人公になりきって観ている。家に帰って現実に戻るのをお茶漬で流すとの表現が効いている。

糊代が足りずに世間狭くする

村松久江

許容範囲を糊代と表現したところが絶妙。余裕を持って人と接する事が出来たら世間も広がっていく。

コロナ去り家計簿がする深呼吸

大前安子

コロナ禍が二類から五類になった。外出先が広がり人との接触も増えていく。締め付けられた家計簿が一息つくのがよく分かるが、程々にするのが大切。

思ひ出を抱いて空家は朽ちていく

佐々木静恵

田舎では空家が増えていくのが如実である。手入れもされず廃屋となっていくのは忍びないが、往時の思い出だけは、しっかりと人々の胸の中にある。

記念像誰か知らぬが道標

幸田厚子

私が思い当たるのは、本人が建てた銅像が幹道沿いに建てられていて、自己主張の強い人だと言われているのを聞いたことがある。本人としてはいつまでも覚えておいて貰いたいと建てたのだろうが、知らない人には道標にしかない。



こんな私です (2)

他人を客観的に眺めてその言動の面白さを一句に表す場合は、掴んだものを歪曲せず正確に表現するのが肝要です。

一方、自分自身を詠う場合、特に内容が「自嘲」では少し誇張をした方が面白味があります。読者もそのあたりのことは心得ていて「謙遜し過ぎ」と笑って受け止めてくれるでしょう。前回の(1)にご紹介した作品も今回のもの、それぞれ少し大きな自嘲が面白味を醸しています。

身の丈を少し伸ばして生きている

敏森 廣光

直感で生きて生傷たえまない

柳田かおる

でたらめに生きてマワシがずれてくる

藤井 智史

思考回路どんどん軽く天然化

小山内真由美

CMの合間ちよこちよこ仕事する

宇都宮ちづる

裾上げとボタン付けならまだ出来る

島田千鶴子

まだ出来ることを数えて生きていく

田中ゆみ子

「身の丈を伸ばす」ということは「背伸びをしている」ということ。「直感で生きている」ということは、「あまり深くは考えず」ということ。「でたらめに生きて」は誇張が過ぎますが「フンドシ」に替えた「マワシ」がお手柄です。

思考回路が「天然化」も「CMの合間ちよこちよこ」も「裾上げとボタン付けなら」も、謙遜し過ぎの面白さがあります。

話し方スローテンポは生まれつき

禰 モモト

もぐもぐと予習してから電話口

大羽 雄大

頑張らないいのもとと私みそつかす
好き嫌いないがときどき人嫌い
やさしさも意地悪もみな私です
言い訳も嘘も無しでは生きられぬ

断る役慣れて図太くなりました

中山 春代
高瀬 霜石
松尾美智代
菊地 政勝
山田 葉子

話し方がスローテンポなのも、もぐもぐと予習してから受話器を取るのも、やはり遺伝的なものが大きいでしょう。

謙遜の極みのような「もともと私みそつかす」には苦笑させられます。また「ときどき人嫌い」とか「意地悪もみな私」とか「嘘も無しでは生きられぬ」そして「図太くなりました」等々、いささか大袈裟に言っていますが、「このような私ですがご勘弁ください」という開き直りが愉快です。

ああ言えばこう言う病気完治せず

内藤 憲彦

たらればを食べすぎ前へ歩けない

石田 孝純

愚痴弱音吐き放題で生きている

太田扶美代

子離れが出来ず親離れが出来ず

杉野 羅天

傷ついてしまうことには無視をする

斉尾くにこ

七〇年いぶりがつの味になる

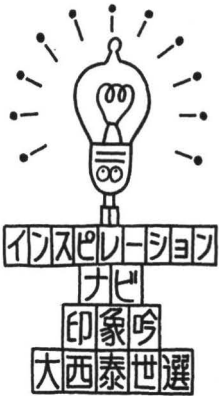
居谷真理子

たいていはプラス思考で乗り越える

北山まどり

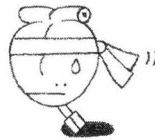
「ああ言えばこう言う」のも病でしょうが、「たられば」ばかり言って前に進めないのも、「愚痴弱音吐き放題」なのも、「子離れも親離れも出来ない」のも病でしょう。しかし、それを自覚しているのは病などに負けていない証拠です。

傷ついてしまうことを無視できるのも「いぶりがつの味」になってきたからでしょうか。このように自嘲しながら「プラス思考で乗り越える」のは川柳作家の逞しさです。



(投句 173名)

台風が次々と発生し、か
といって気温はあまり下が
らず、相変わらずの猛暑の
中で次々と手抜きすること
が多くなりました。



料理はあまり煮炊きせず
に簡単なもの
になり、お風呂は湯舟に浸
かりシャワー
で済ませてしまう。本当
は冷房で冷え
切った身体を湯舟で温め
るのがいいって
ことは分かっているけど、
暑さのせいで気が進ま
ない、こんな自分の横着
さにちよつと腹を立てなが
らの毎日です。
では、ナビを。

学生頃から一夜漬けの癖

藤井寺市

鈴木いさお

(評) いわゆる、お尻に火が付かないと
出来ないタイプですね。実はワタクシも
そうなんです。懲りませんワ。

明石市

梶谷 和郎

好奇心だけで私は生きている
(評) でも、これってすごい事です。若

いという証拠、普通はだんだん面倒くさ
くなってしまいますもの。

明日には思い通りにするつもり

神戸市

奥澤洋次郎

(評) とにかく今日までは相手の言うこ
とを聞いておく訳ですね、今までのガマ
ンが報われる劇的な明日。

豊橋市

小松くみ子

行かなくちやいけないのか鬼退治

(評) 行きたくない所へ行くのは気が進
みませんよね。ましてや鬼退治だなんて
コワそうでヤダ！

熊本市

杉野 羅天

本当は捻り鉢巻きたいのだ

(評) 人間の身体つて不思議です。鉢巻
きつて気力体力を出すのに結構効果ある
そう。やりましようよ、捻り鉢巻き。

大阪市

田中ゆみ子

年令は単なる数字祭苗

(評) その通り、単なる数字にとらわれ
て人生の幅を狭めるなんてバカバカしい
こと。やりたいことはやりましようよ。

橿原市

居谷真理子

頂いたときだけ頂けるメロン

(評) ホントですねえ。自分のために高
いメロン買うのは勇氣要るけど、最近流
行りの自分へのご褒美という手も。

和歌山市

柏原 夕胡

独りだと生きていけないのがヒト科

(評) 強がっていてもダメダメです、人

恋しくてねえ。でも会えば会ったですぐ
ケンカ、救いよう無し。

盆踊り炭坑節の盛り上がる

大阪市

寺井 弘子

(評) 炭坑節、懐かしいです。コ
ロナが落ち着いてきて、盆踊りも各地で復
活してきて楽しみが増えました。

豊中市

水野 黒兔

温暖化地球の汗が吹きこぼれ

(評) 地球の汗とはダイナミックな表現
です。最近の異常気象はいくら大層に言っ
ても足りないほど。

尼崎市

宗 和夫

継いできた櫓を受ける人は何処

竹槍で戦車に挑む神の国
可見市 板山まみ子

西宮市

亀岡 哲子

肉鰻しっかり食べて酷暑越え

道場の鍛えた腕で西瓜割り
大阪市 今村 和男

黒石市

北山まみどり

鉢巻をしたのですが様になる

留守ですと唆されている空き巣
孫がくるばあちゃん好きと言わせた
徒競走昔は僕も早かった

三田市

村田 博

那覇市

宮 すみれ

大阪市

平賀 国和

西宮市 福島 弘子
思い出の土を袋に甲子園

八王子市 川名 洋子
熱中症負けるものかと水を呑む

大阪市 平井美智子
企みの汗がすこうし粘っこい

松山市 栗田 忠士
泣き言は言わぬと決めたはずなのに

弘前市 高瀬 霜石
お世辞だと分かっているにも木に登る

河内長野市 森田 旅人
縁切りをしても誘ってくる薫り

松山市 郷田 みや
せっかちねそこでゆっくり深呼吸吸

尼崎市 藤田 雪菜
ポケットにいつも元気な好奇心

宝塚市 岸田 万彩
尺玉の意地を発揮してドカーン

佐賀県 真島久美子
永世中立ってどうすんのアンタ

唐津市 仁部 四郎
毎日がイザ鎌倉の永田町

松山市 宮尾みのり
ひとり旅いいえスマホに指示される

岡山市 永見 心咲
どっぷりと歴女がはまる奥の院

豊橋市 西郷紀美代
がんばって生きてきました古稀半ば

横浜市 菊地 政勝
代表の責任背負う息遣い

箕面市 出口セツ子
見切り発車マイナンバーの保険証

松山市 大内せつ子
背後霊あせらなくてもいいと言う

今治市 永井 松柏
目隠しをされて戦地に送られる

河内長野市 中島 一彌
目が回る西瓜はどこにおわすのじゃ

神戸市 みぎわはな
労働の汗も涙も同じ色

松山市 柳田かおる
回らないお寿司屋さんがなつかしい

大阪市 小野 雅美
凭れてもいいよ私が壁になる

生駒市 飛永ふりこ
とにかくも必勝目差し次の策

香芝市 大内 朝子
告白をする決断の時が来た

富士見市 中島 通則
あと一歩旨いビールが待っている

鳥取市 奥田 由美
美魔女にも平等にきたシワタルミ

奈良県 長谷川崇明
暑いなど言える間はまだ若い

大阪市 石橋 直子
帰省子に母さんひとり張切って

羽曳野市 黒木ひとみ
温暖化自然体系変わりゆく

唐津市 坂本 蜂朗
妻と子の前で鉢巻き締めてみせ

鳥取市 山下 凱柳
バランス良く清濁併せ呑み生きる

弘前市 稲見 則彦
深海でじっとアナタを待っている

大山市 金子美千代
生真面目な性分いやになることも

高槻市 松岡 篤
受験勉強クーラー代が邪魔をして

和歌山市 まつともこ
吊るし柿ひとりぼっちさはさみしいな

弘前市 福士 慕情
ヨイドン仲良しを待つテープ前

羽曳野市 吉村久仁雄
鉢巻きの汗が目沁む盆踊り

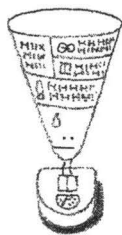
和歌山市 定松 宏枝
応援に伝えてくれるタイガース

吹田市 山本希久子
真夏のキッチン火を使わず料理

大阪市 岩崎 公誠
脳トレのパンダナ少しずれている

箕面市 広島 巴子
ミyakミyakよフアイト万博もう直ぐだ

12月号発表 (10月15日締切)



(平本 霧石人 画)
柳箋に2句

■句集紹介

『いっでゅっくり』

小谷 小雪 著

川 上 大 輪

先に新葉館出版から発行された『精鋭作家川柳選集（近畿編）』にも句を発表されている小雪さん。いつも笑顔の絶えない明るさで「川柳塔わかやま」の句会をリードし盛り上げてくれている。

この度、新葉館出版より小谷小雪川柳句集『いっでゅっくり』を上梓された。

第一章「まぶしい まぶしい」

思うまま伸びてごらんと春の土手のなかの朝日あなたと半分こわたくしの脱皮を急かす春キャベツ早起きにたくさん打てる句読点

素っぴんのように手抜きをしていない本を読むことも一つの格闘技

第二章「ほんやりと雲をみている」

メッキが剥けてもわたしらしく光るこれ以上縮まぬように鍵かっこ台風に少しどきどき鬼瓦錠のおかげ互いに角隠すアンテナにまだ平成の周波数途中からどしやぶり泣いていられない

第三章「陽気にいきましよう」

ストレスを空っぽにして千鳥足血管の流れもさざり春になる挙げた旗一人きりでも振り続けふるさとの隅っこに私の陣地見守って何にもしないのも一手何となくぐずぐずしたい月曜日

てくる小雪さんの姿が見えてくる。

長い人生そんなに急がないで、この辺でお茶でも飲みながらのんびりとお喋りでもしませんか、と緊張感をほぐしてくれる心遣いも嬉しい。

自然に溶け込み、自分の姿をもう一人の自分が眺めているような細やかな感性。蝶のように自由に飛び回る遊び心や精神力の強さなど、何の銜いもない。

しっかりとした生活に根を張りながらも、句の背景には温かく優しい家族の絆さえも見えてくるようだ。

各章のタイトルを見ても小雪さんらしいネーミングで楽しい。是非一度は目を通して載きたい句集であり、次回の句集にも期待は膨らむばかりだ。

小谷小雪川柳句集『いっでゅっくり』

B 6 判 96 ページ。2023 年 6 月 14

日、新葉館出版発行。（定価 1200

円＋税）

川柳塔なら

創立25周年記念

誌上大会に寄せて

中原 比呂志

「川柳塔なら」はこの10月で創立25周年を迎えることが出来た、これもひとえに柳友各位のご支援のたまものと感謝を申し上げます。

振り返ってみれば奈良県下においては俳句会は数多く存在していましたが川柳塔社の同人たちでお世話する句会はなかったのである。

奈良においての川柳塔社との関わりは、1951年（昭和26年）1月15日、若草山燒きに路郎先生の「俺に似よ俺に似るなと子るを思ひ」の仕掛け火花が打ち上げられるイベントが過去にあつて世間を驚かせたが一過性のものであつた。

1961年（昭和36）阪大川柳会の内海貞三博士が奈良医大に移られ、御子息が奈良高校に入学されたのを機に学内に短詩型文学同好会が創設され、麻生路郎先生が講師として招聘されたのが組織的な動きの最

初である。

そして、橘高薫風子、宮口笛生、戸田古方らの人達も参加して、川雑奈良支部が発足し、ガリ版摺りA5版句報誌「川雑奈良」が発行された。1年後、改題して印刷版16ページ冊子「桜井線」が発行されるまでになった。その中で中内孚彦君は卒業後、関西学院に進学し「関学川柳会」を立ち上げたが学生故に卒業後の学内では後継者が続かなかつた故に自然消滅の形となつてしまつた。

1998年（平成10）春の本社常任理事会では塔社同人も増えたこともあつて「奈良県下で何とか句会の設立を」との要望もあり、秋の設立句会へと準備が始まつたのである。会長・宮口笛生、事務局・中原比呂志、会計・米田恭昌、句会担当・坊農柳宏、吉川寿美の5名であつた。

会の名称は平仮名書きが良いと、田中正坊編集長の提案命名である。

創立句会は奈良市政一〇〇周年に語呂合わせて平成10年10月10日とし、王寺町役場隣接の「やわらぎ会館」で開催したが当日参加者百十一名と偶然のゾロ目に驚いた次第である。

創立句会では兼題「奈良」を掲げ、今回も「奈良」を皆さんに詠んでいただくこと

になつた。1/4世紀前と比較して、どのような「奈良」の句が生まれるだろうか楽しみである。

川柳塔なら創立25周年記念

川柳誌上大会

兼題と選者（各題2句）

「奈良」 大久保眞澄 謝選
「秋晴れ」 稲葉 良岩 選
「わくわく」 島岡美智子 選
「かける」 田中 薫 選
「競う」 土田 欣之 選
「アクティブ」 新家 完司 選
私の一句（自由吟）自作一句（既発表句も可）

締切 令和5年10月31日（火）必着
投句料 10000円（切手はご遠慮ください）

投句用紙 指定用紙（コピー可・便箋可）
〒636-0202

奈良県磯城郡川西町結崎421-64

長谷川 崇明 宛

（携帯090-95548-9610）

問い合わせ先 大久保眞澄

（TEL&FAX 0742-44-845）

『麻生路郎読本』余滴 (78)

「雪」 ⑦

栗原道夫

「雪」5号は、大正4年12月1日発行。通しの頁で53〜68頁。表紙(53頁)、57頁「何を観てゐるのか」、裏表紙「猿芝居の立役」の挿画を伊藤観魚が描いている。「猿芝居の立役」を下段に載せておく。

54、55頁に、日車の新短歌が掲載されているが、三行分かつ書きになっている。

「浄沙門」7句より

淋しい〜時は 浄沙門

お念佛を 海荒るる日は

申します 常のこと

「佛の日」8句より

佛の日 旗の日を

その描いた畫が 如何に淋しく

氣に入らず 越す身かな

56頁の路郎作品は一行書き。

「中年」8句より

家、さがし疲れてひたすらに花をみる
こころたひら冬の珈琲する
中年になつて考へることのみ多き
中年の眞摯さを僕も知りそめし
降りさうな十一月の火鉢に黙す
假裝せし人々に

白粉を洗ひ落せばさびしからんに
58〜60頁は、中谷義一郎の「劇作者としてのシヨウ」。ジョージ・バーナード・ショアの劇評を紹介している。

61頁は、川上日車の「權威の窮屈」。最終回なので全文挙げておく。

權威の窮屈

川上 日車

多くの場合自分等は、事實の最も正確なるものとして、之を檢事の調書に求めて居る。檢事は自己の湊合を豫審の楷梯に用ひても、調書には一切の自己を打捨てて、只事實の提供者として其職務を盡したものとなつてゐる。藝術が自己の思想を假裝せず表白する尊さと、檢事が己を空うして事實を追究する權威とは、共に相譲らぬ程緊張した態度である。

嘘をつく女には嘘をつく處に眞實は流れてゐる。嘘をついた爲にどんな影響が人々

に及ぼしたかは、女が最初から豫期して居つた事ではない、只嘘をつくべくその時の心理やら、苦みやら、嬉れしさが女の眞實であつて、嘘をついたといふ罪惡はほんの批評に過ぎない。

天才の多くに氣違ひ、みた言行の多いは、眞實の追究が段々尖つて、そこに常人と全く掛け離れた眞實を見出すからであつて、この點から言へば現代の人々は一様に氣違ひ、みた方面に進みつ、あるとも言へる。

眞實の權威は自分等の怒を不平に化し、喜びを嘲に轉じ、天地は窮迫して、死の新生活に導かんとする。自分等はこの眞實の權威から來る窮屈に、超越した思想に向つて道を拓かねばならぬ。(打切り)



麻生路郎の挿画

62〜65頁に、游魚選の「雪俳壇」47句が掲載されている。

爪先の痛む足袋で自轉車に乗る 李二

大根と並べて足袋が干してある 至水

岸の明るさ柳大搖れに散る 綠郎

炭つぐさへあじきない夜なり 游魚

三味線を掛けば南天に日が當る 同

66頁は、觀魚の詩「東片町より」。

「雪」6号は、大正5年1月1日發行。通しの頁で69〜88頁。表紙(69頁)、76頁「品川にて」の挿画は伊藤觀魚。77頁「奈良にて」の挿画は小出栖重。裏表紙の加藤靜兒の挿画「薄氷のはりつめた朝」を次に載せておく。



70頁、日車作品「極望」8句より
よるこびの髪に冷たい櫛となり
壺抱いて戀より深いものを見る

71頁、路郎作品「二食」8句より

風邪のこちち飛行機の音を遠くきけり

六疊に一寸日父としての愛

72、73頁は、川上日車の評論「ちかめのよりあひ」。

第一次世界大戰下の日本の貿易問題について評している。

74、75頁は、路郎の「僕のマント」。父の古いマントの話。後半を挙げておく。

《明治四十二年の夏、大阪に未曾有の大火があつて間もなく親爺は腦溢血で亡くなつた。引續いて人のいゝ兄が戸主になつたので自然マントも兄の手に移つた。兄はその後秋の茶屋の郊外に安い家を借りて會社員生活を續けてゐた。西風をまともにうけて毎朝葱畑を抜けて行く兄はいつもこのマントにくるまつてゐたが、會社を退いて自分で商賣をするやうになつてから殆んどマントの必要がなくなつたので僕に呉れることになつた。》

兄でも僕でも段々と親爺に似て背はすらり、と高くなるし肥つてゐた肉は自づと落ちて了つたので寸法の上からは左程見苦し

くもなかつたが、扱貰つてみると聊か迷惑でもあつた。その頃の僕は高商出のチャキチャキで一ト角の青年紳士になりすまして居たんだもの、月賦の洋服やオバーコートは着ても三十年式のマントは御免蒙りたかつたのだ。それからの數年間は僕の野心が東京へ走つたり大阪へ舞ひ戻つたりして夢のやうに暮らしてゐた。幾度か病魔のために續弄されたのもその間であつた。それから結婚もすれば金錢問題の苦痛も現實に知るやうになつた。そのころに僕の病軀をしつかりと抱き締めて僕の心的革命を助けて呉れたのはこのマントであつた。僕は毎日平氣な顔で舊世紀のマントを着て歩くやうになつた。

僕に第二の心的革命が起つた時分には僕は一人の兒の父になつてゐた。此の調子では僕に二人目の子が産まることがあつてもマントとの新調はとても覺束ない。

僕は天の恵みの甚大なのを思ふてこの古マントに深く感謝してゐる次第である。僕は既に社會から勞力對報酬の問題は聞き飽きてゐるが、僕に與へられた一着の古マントは永久に報酬を求めてゐない。

(次回に続く)

本社 九月句会

◇九月七日(木)午後一時
アウイーナ大 阪

長い猛暑日から少し解放されたかと思う7日、9月句会は、112名(うち投句者17名)の参加で開催された。初出席は芦屋市の寛靖夫さんと西宮市の矢野むべさんのお二人。

今月のお話は平井美智子さん。題は「2と3と4と5」。「太郎を呼べば太郎が来る」とは、美智子さんが母とも仰ぐ時実新子の言葉。明るい言葉は明るく前向きにしてくれる。

今月は二度も小遣いくれた妻 正和
下五ではねる句

きれいだな焼くのは惜しいデスマスク かすみ
老いや死を見つめて

エンディングノートにそつと書く預金 重男
老いても恋

老いの恋とろろ煮込む粥の味 武彦
か感動、き興味、く工夫、け健康、こ恋「か

きくけこ」でよりよく生きましよう。(眞澄)

月間賞は高杉力さん(大阪市)

(司会)武人・真理子(協取)勝弘・志津子
(受付)すみ子・志津子(懸垂幕墨書)耕治
(清記)憲彦・勝弘・国和

席題「稀」 上田 和宏 選

呼名する声が稀だと裏返る 谷口 東風
握手とハグ稀なチャンス wait いた 米田利恵子
ラムネ瓶ビー玉ふたつ入ってる 青木ゆきみ
あの男著つてくれた雨ふるで 長谷川崇明
稀の稀今日はボーカー一人勝ち 森 菊江
昨日見たのは夢かサンマの大漁旗 石田 孝純
当てすっぱう稀に当たつてうろたえる 富永 恭子
虹の橋二重にかかる雨あがり きとうこみつ
百点にまれではないと威張る孫 伊達 郁夫
投げて打ち走りおまけに男前 高杉 力
正論を稀に言いだす天邪鬼 青木 隆一
ぐうたら夫がお風呂磨いてる 吉道航太郎
僕だけが文庫読んでる電車内 奥野健一郎
ごく稀にウケることある親父ギャグ 鈴木いさお
稀に言うジョークに妻の眼が光る 森松まつお
我が家ではジョジョの黒電話 居谷真理子
エスカルゴが好物という日本人 藤井 宏造
時々は大声出そう生きている 柴本ばつは

両手挙げ稀にはあるぞチップイン 西上 遊二
Jアラート稀が普通になる恐さ 長谷川崇明
稀に抜けるから頑張つて来る句会 出口セツ子
文庫本読んでる人に嗚呼昭和 松岡 篤
優勝が間違いないタイガース 折田あきこ
車中ではスマホに混じる読書の娘 山野 寿之
稀にみる神童と呼ばれたむかし 鈴木いさお
年賀ハガキの2等は語り種になる 小島 蘭幸
めずらしくライン孫から「リ」の一字 森田 旅人
バチンコ屋稀に出るからやめられぬ 鈴木 栄子
ビッチャーが打ったサヨナラホームラン 藤田 武人
ユニセフへ稀には寄付もするオトコ 木本 朱夏
竹の花が咲いたあなたに逢えました 片岡 加代
稀に咲く月下美人と徹夜する 柿花 和夫
稀に来る孫ヘクラー取り換える 平松かすみ
35年2月29日生まれです きとうこみつ
秋まつりまぐれ当たりは米俵 饗庭 風鈴
特上のうなぎが届く敬老日 鶴田 寿子
稀にでも当って欲しい宝クジ 出口セツ子
佳

嘘ばかりずっとバチンコ負け続け 島田 握夢
多読多作稀に秀句もつくります 川端 六点
お父ちゃんオレがネクタイ締めてやら 居谷真理子
二次会を断るなんてめずらしい 片岡 加代
ごく稀に諭吉一枚くれる妻 古今堂蕉子

人

杜甫が今居たなら古稀は百二十 西出 楓楽

地

露天市で見つけた僕の忘れ傘 佐々木満作

天

古稀の娘にまだ気配りの母は百 山野 寿之

軸

六甲おろし虎のバレード正夢に

兼題「使う」 ひとつこみつ 選

小使いではありません用務員です 太田 昭

いつか又使うと残す包装紙 川本 信子

使うことないが頭はいい方だ 青木 隆一

近ごろは座つていても使われる 澤井 敏治

立つと直ぐ妻からネエと頼み事 藤田 武人

最後にはぐらかして「知らんけど」 藤原 太子

姑を使いこなしした妻である 宗 和夫

孫までがアゴで私を使いよる 森松まつお

釜風呂に板を嵌め込む足使い 木嶋 盛隆

覚えたての横文字使い恥を掻く 加藤江里子

丁寧語使い慣れずに嘸みまくる 小野 雅美

未使用のまま破棄してくれよ核兵器 野口 龍

僕の税金軍備に使うのはやめて 川端 一步

税使うことだけ目立つ岸田さん 奥澤洋次郎

使用済核燃料のような僕 古今堂蕉子

初めてのお使いハラハラのカメラ

有料になって大事なレジ袋

貯めるのは下手だが使うのは上手

男でもスキンケアだと化粧品

愛用の茶碗大事に二十年

臓器提供わたしのもので良かったら

電車の美女上手に使うアイシャドー

五つの声使いわけする電話口

拾った消しゴム使わせていただく

脳みそは悪い奴ほどよく使う

最後まで使ったことがないノート

良いことに使えぬものか詐欺の知恵

母元氣ミキサーの音朝の音

プロ非情戦力外へ使い捨て

柿渋のバッグが使うほど馴染む

明日のため今日という日を使い切る

信用がなくてカードは持たされず

万にボクが使える保険金

近く前にポイント使い切るつもり

富士山へ登ったあとのサロンパス

風評を三百億で黙らせる

お金さえ使えばモテた事がある

コップ欲しく買うモロゾフのプリン

住

佐々木満作

津守 柳伸

鈴木いさお

水野 黒兎

新家 完司

小野 雅美

内田志津子

山下じゅん子

江島谷勝弘

今村 和男

島田 握夢

片岡 加代

栃尾 奏子

安福 和夫

萩野 浩子

今井万紗子

富永 恭子

川端 六点

吉道航太郎

内藤 憲彦

江島谷勝弘

酒井 健二

石田 孝純

村田 博

背伸びする時には使う足の指

もうヒマをあげよう毛羽立ったタオル

停年後トイレ掃除は僕がする

硬貨から札には出来ぬ両替機

使うには惜しい綺麗な五円玉

愛用の万年筆よペン牝臍よ

乱暴に使われ泣いている地球

涙を武器にした私の元夫

軸

兼題「ぼんやり」 森松まつお 選

ぼやけてたアレがくつきりタイガース

ぼんやりとさしてくれないタイガース

ぼんやりと過ぐす風呂場はバラダイス

ぼんやりは薬のせいにしてとほけ

熱帯夜で寝不足ボンヤリが続く

ぼんやりは視力でみんな美男美女

向こうから歩いて来たのは夫かも

好きが嫌いかぼんやりさせて貰がせる

ぼんやりと過ぐす風呂場はバラダイス

ぼんやりは薬のせいにしてとほけ

熱帯夜で寝不足ボンヤリが続く

ぼんやりは視力でみんな美男美女

向こうから歩いて来たのは夫かも

好きが嫌いかぼんやりさせて貰がせる

藤井 宏造

大久保真澄

田原 康雄

藤井 宏造

青木ゆきみ

小島 蘭幸

初代 正彦

坂上 淳司

今村 和男

廣田 和織

藤井 則彦

東 定生

鴨谷瑠美子

片山かずお

川本 信子

大内 朝子

上田ひとみ

敏森 廣光

もう飲めぬ貴方が美女に見えてきた

村田 博

職退いて昼行灯になる男

木本 朱夏

僕達の罪なんですか温暖化
白熊の寝床も溶かす温暖化

野口真枝子

ほんやりと見れば愛妻超人

今井万紗子

住

大久保真澄

老後設計を壊してしまう物価高
羅針盤壊れ彷徨うネオン街

坂上 淳司

プロポーズ出来ぬ息子の背中押す
山下じゅん子

突っ立ってないであなたも手伝って
野心まだほんやり見える八十路坂

吉村久仁雄

今日生きる壊れぬ内にねじを巻く
カッよかつたジュリーも肥えたお爺ちゃん

青木 隆一

ほんやりの彼にもあつた傷の跡
奥野健一郎

散歩も暑いし川柳浮かばんし
魔線を知らずにバスを待っている

小野 雅美

内藤 憲彦

敏森 廣光

麻酔切れこの世に戻る声を聞く
吉道あかね

名人のほんやりした手後で効く

川端 一步

初恋のイメージ壊すクラス会
お静かに壊れた心修理中

齋藤 隆浩

ほんやりと月を眺める妻が好き
宗 和夫

地

古今堂蕉子

ネット見合い壊れるときもネット上
壊れゆく姉の介護をする辛さ

出口セツ子

別嬪に見惚れふた駅乗り過こす
新家 完司

天

川端 六次

イメージが壊れるマस्क外せない
ポチポチと時間が壊していく体

鈴木 栄子

ほんやりしてゴキブリになめられた
内藤 憲彦

足元がほんやり消えているが美女

軸

イメージが壊れるマस्क外せない
ポチポチと時間が壊していく体

中岡千代美

次の世がほんやり見えて来た八十路
坂上 淳司

ほんやりと見えて飽きない人の波

藤井 宏造

満開が散る美しい壊れ方

石田 孝純

傷心に添ってくれるかおぼろ月
森 菊江

兼題「壊れる」

村田 博

溜め息一つ皿が壊れる音がする
錆付いているのか壊れない夫婦

今井万紗子

ほんやりと袋とじには目がきりり
新早 義明

日本心 壊して流す汚染水

長尾 千賀

離婚への階段算盤をはじく
買い替えがお得と修理屋が帰る

桝尾 奏子

ほんやりでも見えたらありがたいやんか
川端 六次

少年の夢は壊れて闇バイト

廣田 和織

根気よくこわして積んで母遊ぶ
ひと言に積み木の家が崩れいく

吉道航太郎

借りたのか貰ったのかももう忘れ
奥野健一郎

一度壊すとすぐになくなる一万円

齋藤 隆浩

建てののに一年壊すには一日

伊達 郁夫

眺めるだけの人生だったかも
居谷真理子

日常を異常気象が壊し出す

山崎 武彦

父と一緒に懐中時計止まる

油谷 克己

コンタクト外せばわたくしの世界
居谷真理子

酒井 健二

青木ゆきみ

削除キー壊れて過去が暴かれる
骨粗鬆ハグするときは気をつけて
春と秋四季が壊れる温暖化
飲み会の予定壊れた妻の喝

佳

川上 大輪
山田 耕治
吉道あかね
柿花 和夫

しあわせが壊れないよう手を繋ぐ
ヒビ割れは皺の仕業だ厚化粧
壊れたら困る一位は冷蔵庫
見なければ良かった君の大欠伸
少しずつ壊れてしまう父を抱く

人

静寂を壊してしまう蚊の羽音

きとうこみつ

壊れそうな妻には薬よりも愛

地

初代 正彦

水のようなつきあいだから壊れない

軸

居谷真理子

派遣切り僕が壊れていく予感

兼題「色 色」

新家 完司 選

「声」欄の色色な声なるほどね
プーチンを崇拜してる人もいる
様々な人に踏まれて丸くなり
秋の七草派手さはないがいい仲間
お茶でもと長い色色聞かされる

藤井 則彦
岸田 万彩
太田 昭
吉道あかね
山田 耕治

掃除すんだよ洗濯がまだやんか
もしバレたらだではすまんコレクション
英語にも訛りがあつてややこしい
子が出夫蒸発かなわんな
充電に七色食事しています

大久保真澄
島田 握夢
藤井 宏造
青木ゆきみ
柴本ばつは

色色と手を焼いた子が母介護
飾りもの全部外すとどちら様
色色と試したけれど増えぬ髪
団塊とまとめて言うないいろいろ
色色な神様拝む日本人

山野 寿之
山崎 武彦
柿花 和夫
奥野健一郎
平賀 国和

「人生いろいろ」島倉千代子だよ
肘鉄かハグかそれとも平手打ち
しっかりと昨日は泣いて今日笑う
色色とあつて四度目の出戻り
いろいろな漫才ネタのある浪速

江島谷勝弘
小野 雅美
森 廣子
奥澤洋次郎
水野 黒兎

平凡な夫婦などないボブスレー
色々と話すが返事ない仏
恋もいろいろキツネタヌギが好き
色々な男と同じ映画観る
安楽死を願う色色悪さして

平松かすみ
川端 一步
高杉 力
米田利恵子
小島 蘭幸

どの色が出るかサクマのドロップス
よくもまあ色々不正思いつく
ふる里に人それぞれの青い空
デザートもうどんも廻る寿司

中井 萌
森松まつお
斎藤 隆浩
きとうこみつ

違う顔違う心が乗り合わせ
色色な鬼すわつてる終電車
色々な斑点鼻に医者に行く
妻が捨て夫が拾う粗大ゴミ
負け方を色々知って強くなる
色々な意見があつて民主主義

居谷真理子
澤井 敏治
青木 隆一
平井美智子
吉村久仁雄

佳

「意見を色々言つて知らんけど」
同じ服の人まづいない電車待ち
魍魎魍魎鬼の親戚筋らしい
卒寿でもジョギング古稀でも徘徊
うまい棒実は三十種類ある

上田 和宏
森 菊江
居谷真理子
大久保真澄
栃尾 奏子

人

性別はその他の欄に○をする

平井美智子

地

遺失物係へ入れ歯お骨まで

片岡 加代

天

逆立ちもピエロも出来るお姫様

木嶋 盛隆

軸

豪雨慈雨暴風微風好き勝手

木嶋 盛隆

兼題「自由吟」

小島 蘭幸 選

アレに向けさあ正念場赤ヘル戦
手拭いに水包んでロックフェス
肩寄せ合つてチリメンジャコの仲の良さ

坂上 淳司
長尾 千賀
青木 公輔

怪我しなや折つてたのに大谷君
また何か悪さしそうな黒い雲
朝日見る夕日見るのもふたりきり
トーストも焦けて猛暑がまだ続く
怒りは小出しに 喜びは爆発
今ならばとても言えない「おーいお茶」
金一封額はともかくいい気分
動物に芸をさせたくない私
二番目の悩みを友へ打ち明ける
帰るなり母ちゃん逆上がりが出来た
黄泉行きも試練満席の火葬場
寝込んだら愛想ない子が先に来た
風の時代仲間とともに生きていく
地球沸騰われら明日へどう生きる
家族の証明特に要らない家族風呂
善人の方に分類されている
追っ払うコロナヘンジリの太鼓
美味しさと食べて風評追いつ返す
真夏日に五百羅漢も苦笑い
背を伸ばしまだまだこの世歩かねば
祈る手の形で開花待つ蕾
葛洗う叱ってくれる人恋し
鯖の眼は見れば見るほど物憂げな
スナックのマイクは俺を歌手にする
近く夏を詩人になって見送ろう

古今堂蕉子
森松まつお
吉道あかね
吉道あかね
古今堂蕉子
桃谷 和郎
奥野健一郎
柴本ばつは
小野 雅美
島田 握夢
藤原 大子
宇都満知子
平賀 国和
初代 正彦
高杉 力
荻野 浩子
上田 和宏
長谷川崇明
今井万紗子
坂上 淳司
敏森 廣光
青木 隆一
江島谷勝弘
上田ひとみ

行く夏を惜しむわたしの余命表
少しだけ元氣になれたわらび餅
孤独の深き抱きしめる非ひとり鍋
秋ですな少しお話しませんか
一人旅世界は温いものとする
神戸牛です神戸の街で食べたから
天使なら先ほど通り過ぎました
キャリーバッグが横切るご免とも言わず
廃屋の庭に夾竹桃の白
住
僕産んでくれた日だねについてほろり
平凡な人生なんかあるもんか
山本加お里
野口 龍

木本 朱夏
片岡 加代
齋田 寿子
平井美智子
森田 旅人
居谷真理子
吉道航太郎
油谷 克己
折田あきこ

天才はいつも頭を掻いている
薫風俊平新子居た頃熱かった
樹木医の診てる患者は二百歳
人
長生きの蟬が十日目に死んだ
地
死にかけた今年の夏を忘れない
天
待っているうちにハンピロコウになる
軸
重荷用自転車 中二の夏だった
高杉 力

川上 大輪
西出 楓楽
奥野健一郎
鈴木いさお
新家 完司

新 同 人 紹 介

〒658-0015
神戸市東灘区本山南町1-1-12-608

楨 田 次 郎
まさ た じ ろう

— 美智子・和郎・廣光推薦

〒535-0031
大阪市旭区高殿3-26-2-206

田 原 康 雄
た はら やす お

— 蘭幸・完司・朱夏・美智子推薦

〒545-0021
大阪市阿倍野区阪南町4-2-7

岡 田 恵 子
おか た けい こ

— 蘭幸・完司・朱夏・美智子推薦

〒546-0031
大阪市東住吉区田辺4-12-14-601

今 村 和 男
いま むら かず お

— 蘭幸・完司・朱夏・美智子推薦

お池の端

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

外食もうかうか出来ぬ世になった
火事の度必ず死者の出る怖さ
触れないでおこう紫陽花枯れるまで
玉林にけたい県民榮譽賞
それぞれのルージュの色をとり戻す
良い事がひとつあったよ今日は丸
返り咲くはなもおぼろに年をとり
笑われたなら笑ってやるさ ケセラセラ
老いの道空気を読めず浮くばかり
読めぬのに英字新聞持ち歩く
読ませたい本に子供はそっぽ向き
マネキンに心読まれる試着室
読む気力失せるニュースが多すぎる
言う時は相手の心読んでから
読み込んで没に出来ない選者です
読めるけど書けない漢字増えていく

龍馬 ふさあ 霜石 和香子 規子 洋子 のぶよし 初枝 則彦 英子 ひとし 柳子 重虎 隆樹 孝子

読み切った本に手垢が残される
政治家が庶民の気持ち読みません
終りまで約款読んだ事がない
AIも追い付けません読む聡太
さみの真意確めたくてリトマス紙
読みかけのページを風にめくられる
宿題の本読みの声甘えてる
全力より余力残してする仕事
暑い暑い扇風機背にゴロ寝です
クーラーが毎日唸る夏日くる

ひとし 吹喜 慕情 義明 風来坊 美鈴 ひろ 真由美 澄子 一吞

南大阪川柳会 松岡 篤報

懐かしい魚に秋刀魚名を連らね
方言を覚えて馴染む転任地
方言を喋りに行こう縄のれん
品格はどうあれわたし河内弁
古里を捨てて方言守り抜く
大阪の人ねと一言でばれる
方言と知らなかったなわが言葉
方言にフツと浮かんだ里景色
もうかきまつかばちでんをならよし
百均で爆買いをしてガスを抜く
スランプは抜けたようです案になり
プーチンの辞書に平和が抜けている
悲しいねドサドサ髪が抜けていく
歯も髪も抜けて順調老いの道
もめ事はタヌキ寝入りで切り抜ける

まゆみ 千鶴子 ルイ子 志華子 志津子 蕉子 峰子 大子 昌紀 常男 直子 一步 勝弘 国和 実

あと一個買えばひとつ付いてくる
詐偽にあいついつい嘘をついてた
おせっかいいついついしてた頃セピア
わが不出来忘れつついつ子を叱る
さらさらと記憶喪失秒時計
3人目産ませ後押し惜しみなく
二択ならどちらを選ぶ母と妻
陽炎がゆらゆらノルマ攻めてくる
コロナ明け誰もはずきり言い切れず
美しい和服も汗の名古屋場所
溢れそな泡に口づけ大ジョッキ
玄関の壁に這わせて蟬の羽化
ニューヒーロー炊事洗濯掃除でき
炎帝も避暑に出かける40℃
ほろ酔いに吹く極楽の余り風
誰にでも優しいそれは罪だろう
さざ波が輝く一日溶けてゆく

双葉 加お里 江 楓 楽 弘子 柳右子 いさお 克己 篤 柳仲 蟻日路 東風 紫 敏治 俊雄 力 亜成

川柳塔打吹(鳥取) 斉尾くにこ報

電話詐欺ドボンと嵌る高齢者
夏休みドボン飛び込む川の堰
川風のそよそよ昼寝邪魔もなし
そよそよとしても見え見え下心
日本中七夕飾り夏を飲む
自分だけそよそよ手持ち扇風機
そよ風と会話が弾む夕涼み
ゴミ捨て場地上も海も宇宙まで

照彦 清人 義人 滋 紀子 完司 芳江 大鯰

どの面を下げてブライド捨てようか
 布ぞうり古布捨てず手編みする
 見栄捨てることは私でもきそうだ
 へその緒と母子手帳とも捨てましょう
 次々と捨てて山頂目指します
 うなだれて捨てられていく扇風機
 ゴミ捨てに天神様が捨ててある
 素直になれとじっと見守る星月夜
 七夕の星に願うはまず健康
 愛娘希望の星が逝っちゃった
 我家流もてなし方は星いくつ
 さくら葉桜星降る街に住んでいる
 惜しみなく貴男にあげる星五つ
 星と星つなぎ神話が生まれ出る
 争いの絶えない星に住んでいる
 風に乗り空中散歩する綿毛

重利 久米代 余光 貴恵 三津子 美知江 石花菜 龍枝 富隆 重忠 貴子 美ツ千 節子 芳光 紀の治 くにこ

川柳さんだ(兵庫) 酒井 健二報

ゆつくりとゆつくり歩きけつまずく
 ゆるゆると湯船に浸かり忘れました
 車椅子母とのんびり紫陽花を
 ゆつくりと話せば分かりあえるのに
 人生の午後はゆつくり川下る
 公園デビューこの子パパ似のダンゴ鼻
 入道雲アニマル達がいつぱいだ
 カバ観ればなぜか先生想い出す

和子 英秋 宗鉄 利子 義徳 真桜子 喜久子 千賀子

若竹に孫の成長重ねみる
 嫁さんは母親を見て決めました
 村の牛連想させる鼻びヤス
 戦争であまりに軽い生と命
 横綱が休場すると軽く言う
 耳元で床屋のハサミよく喋る
 若い命死にたにいなと言うでない
 骨拾いあなたこんなになんか
 一度だが背負った母は軽かった
 ハルカスの高さを察知する鼓膜
 山寺にあるといいなエレベーター
 階段とエレベーターが駅支え
 ニンクとコロン悲惨なエレベーター
 タワマンの二階が我が家で階段で
 動くのをみんな待ってる押し忘れ
 原発のツケまで払う電気代
 伝票の取り合う加減減しい
 暑氣払い毎日ビール欠かせない
 目の前でゴールドカード出した
 父の名の表札捨てるに捨てられぬ
 夏散歩陰を求めて増える距離
 アナログ派マイナーカードも作らない
 どんなことしゃべくりここまで来た私
 人生ガマンふわり跡見りやいい緑
 生まれて生きていつか優しい風になる
 各停の人生だけ悔いはない

野 博 修平 俊朗 正和 敏夫 一子 三ツ代 宏造 万彩 美津子 迪 ひとみ 祐康 和郎 雅尚 徹 哲男 耕治 雄太郎 義朋 勝弘 洋次郎 弘 廣光 武彦

藤井則彦選

舗装路の割れ目にタンポポの粘り
 浅はかな自分を責める茶の苦さ
 母という傘は畳んだことがない
 法律に勝る田舎にあるルール
 知恵絞り出てくる知恵は搾りかす
 目の前の山が決断せよと言う
 儼いに名もない花は地に還る
 空より水より妻の有難さ
 なるほどを入れて会話がやと持つ
 人だけが神にもらった笑い顔

敬子 洋子 明子 無限 文道 雅美 澄子 和宏 宏之 紫陽

佳句地十選 (9月号から)

渡辺富子選

夕焼けの彩がわたくしに染みていく
 人と人心耕す笑みと笑み
 とりあえず謎の行列ついてみる
 手品師の鳩は夢見る広い空
 改心の指は一本ずつ洗う
 忍び逢う二人文春見逃さぬ
 ヤジロベ一金を見せたら傾いた
 四捨五入すれば人生多分マル
 本当のこころ波打ち際で知る
 あつさり語る背中に修羅の海

由子 風来坊 幸 美知江 黒兎 和宏 俊雄 幸彦 椒子

ロマンだけは抱いて百まで生きていく 健二

竹原川柳会(広島) 古田比呂子報

兄弟と膝を交えて話す父 栄香

膝小僧シルバーカーに助けられ 節生

膝折って被災地回る両陛下 昭紀

我が膝はまだ頑張れる山歩き 千代美

老うはずだブルーではしゃいだ兄も六十 慶子

孫ふたり人魚になったっているブルー 蘭幸

ブルーキラキラ小学生の夏である 笑子

眉上げて決意表明カッコ良く 宣之

流行にはまらず私の眉を描く 京子

眉を引く今日も一日穏やかに 比呂子

野球選手も眉のお手入れお上手で 夢香

ゼレンスキー眉間の皺が取れるのは 輝恵

強運の証卒寿の白き眉 敬子

大谷のニュースに朝の眉開く 和子

毎朝の眉やじろべえ福笑い 弘子

子孫曾孫柳誌に名前嬉しくて 貞子

これ飲むと美人になれるコマーシャル 幸子

ノウゼンカズラ咲いてわたしの夏が来る 厚子

気づかないくらいいちょうどいい夫婦 歩美

明日があると思っている間にメ切り日 初音

掴み取れレギュラーまではまだ遠し 史子

リコーダートウトウトウってふいている 史子

小三 沙弥

てるてるぼうずきみのしごとはひとつだけ 小二 央

ケツケツケかえるがみんなならつて 五歳 すすず

城北川柳会(大阪) 近藤 正報

祭り囃子うきうき足でリズム取る 杵香

青い空雲を自由に遊ばせて 京子

ほどほどを知らぬ僕らの競馬場 隆一

何かある父の眉間にシワが寄る 章

ほどほどに妬いて見せたり甘えたり 廣子

この猛暑いまだ仮設にすんでいる 一歩

惚れたからあなたの無茶を聞いている 郁夫

ほどほどの人生でしたグッドバイ 捷二

梅雨空を剥がすと青が冴えてくる 実篤

無茶飲み神の答えは肝臓へ サイダーをラッパ飲みする空の青

ほどほどに酔うて女は華になる 繁子

難易度が高くなつたか老いの山 朝子

ほどほどのほどを心得出しゃばらぬ 万紗子

暑い暑い暑い言うてああ暑い 克己

口もとのほくろはきつと社交的 隆浩

当初は無茶な話の二刀流 満知子

帆船が軌跡を残す青い海 榮子

ブルーさんと結婚ですか羽生さん 野鶴

ごめんねが言えて広がる青い空 千恵子

洋志

無茶なこと言われて好きになりました ゆきみ

ほどほどに愛した証子が二人 廣光

「どう生きる」難しいこと聞かんといて 峰子

飲む打つ買う妻に迷惑かけた日も 福貴子

これほどの無茶があろうかプーチンめ 黒兎

「無茶しなや」母はいまでも母である 宏造

国境が千変万化病むヒト科 和夫

白桃が届く幸せ血の絆 恭子

折り鶴に用意八月十五日 信子

砂浜の感触うれし土踏まず 義朋

鬱の字が迷い込んだよ深い森 志華子

一日が大事無駄にはしない歳 久仁雄

生き下手がしつかり生きた太い道 和織

ほどほどで放つときまへん親でつせ 千賀

カタカナ語駆使するきざな好かん蛸 博

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

驚峰とよくぞ名付けたおらが山 宏章

ラベルには重い責任背負わせる 孝子

哀悼の誠何を知りそれを言う 友真

うたた寝の縁側ふわり夏が吹く 楓花

ロケットの翼に穴をあけておく 小鹿

ふんわりとまつわりついでくる老化 盛桜

君だけが知る働き者のラベル 孔美子

ふわり浮く飛行船だが恐怖あり 弘六

誠実な顔の裏には詐欺の顔 文道

「吞兵衛」のラベルを胸に飲みに行く 完 司

喜んで妻の翼になって補佐 ゆたか

信用を背負ってラベル旅に出る 弘子

くたびれて嘘も誠もごっちゃ混ぜ 静恵

僕のこと勝手なラベル貼らないで 草文

カレンダー予定日に貼る赤ラベル 延子

品種別滲むラベルの試験田 一平

凄腕だ民芸館に漆盆 瑞子

酒好きがラベルを当てて褒められる 蟹郎

願い込めふわりふわりを腕に抱く すみれ

誠実に生きていくのは難しい かおる

頑張ってみても私は蛙の子 茶子

高価なラベルを観ている五輝星 重忠

はびきの市民川柳会(大阪)藤原 大子報

炎天下ひたいの汗は滝のよう 正義

とばかりは受けたくないと口閉ざす 大子

しぶきあげプールで遊ぶ声聞かぬ かつ美

許せない民へ爆弾火のしぶき みつこ

見たくない朱に染まった未来など 雄太

朱の色が古墳壁画に鮮やかに ひとみ

勇氣出して交わった朱も色褪せる 理恵

御朱印船異国のロマンも乗せ帰り 勝久

夕焼けに染まって燃える朱の鳥居 一文

交わりでいつの間にやら方言で 千鶴子

合コンへ気合を見せる紅の朱 まつお

朱に染まる大きな秋の空の雲 専平

赤門が遠くに見える受験生 宏造

添削の朱筆で駄句が甦る いさお

忙しいああ忙しい忙しい 庸郷

忙しい日々元気を貰うてます 一步

忙しいふりして妻の目を逸らす 洋一

79日間の巴里の暮らしはめまぐるし ちみつ

忙しいと断る理由今はない ちづる

朝ドラに合わせ父ちゃん忙しい さくら

カレンダーなんもない日は月五日 勝弘

泣いて笑って恋はいつでも忙しい 久仁雄

止まること忘れた昼の中華鍋 冬のト

食べながらしゃべり携帯テレビ観る 憲彦

和歌山三幸川柳会 西川 千鶴報

妥協して時計廻りに添う余生 菜摘

草取りを子らも手伝う雨上がり 宏枝

給料が子の成長に化けて行く 起世子

傘さして散歩する人立派です 一雄

おだやかに夫婦時計が合っている 昭枝

零細の計上だけの社長給 まき

振込みの数字に染みる汗の跡 敏照

雨の日のノスタルジアになる余生 純子

仕舞い風呂今日一日を褒めてやる 和子

給料の一部を飢餓の子に送る 保州

趣味のお陰に歳は取らせない ひろ子

腕時計装飾品に成り下がる 彦弘

曾祖父になった自覚の時計巻く 義泰

水害の恐怖しつかり記憶する 眞智子

雨傘も遊び道具となる下校 悦男

目覚しをセット予定がある至福 知香

給料で少しへそくり旅資金 康則

誰にも見せぬ悔し涙の一秒差 あき子

日時計と今日を話して過疎に住み 明子

給料アップ裏で労働強化され 和美

青春に時計が戻るクラス会 俊介

強がって傘をささない反抗期 さやか

母介護時計がせかす終電車 舞

回復を報せてくれる腹時計 よしこ

小心で時計三分進めとく 克美

負けないうで止まない雨はないのです 満喜子

雨続き喜ぶ人と困る人 侃大

腕時計外し夕餉の腕捲り 幸

一秒が過去となつてく大切な 與一

太陽の言うまま暮らす定年後 桂子

世のゴミを雨雲呼んで流しましょう 明宏

雨の朝二度寝楽しむリタイヤ後 栄次

セレブでもビニール傘を買う時雨 豊

両親に霜降り肉の初給与 剛

断捨離の決意が揺らぐ走り梅雨 千鶴

富柳会(大阪)富田林山野 寿之報

曖昧な笑顔に僕は騙される 武人

炎天とコロナ疲れの数珠つなぎ 和子

上品に喋ると口が縫れ出す 由夏

軽快に西を目指している歩幅

人情は紙のごとしのプーチン氏

温暖化超え地球はもはや沸騰化

風一陣川が心が動き出す

すいすいと世間を渡る二枚舌

失敗も恐れず夢の花を待つ

人間の海で抜手を切る河童

世知辛い世間すいすい泳ぐ猛者

効果適面すいすい通る茶封筒

マイナンバー人の懐探す指

足るを分け足らずを足していく番

飲むと言う知らせの指を丸くする

マイナンバー使うかどうか迷ってる

傘寿米寿愉快に過ぎた待つ白寿

ヤングケアラー今日もまっすぐ帰宅する

悲しみは暗闇の中流れ星

本心も天日に晒し除菌する

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤

宏之報

ともかくも行列あれば並ぶ人

ボランティア家族総出でゴミ拾い

半夏生凜と立ってる夏美人

酒飲みにもノンアルコール勧められ

火花散らす和服姿の土俵下

七夕の願い多すぎしなる竹

孫達のサポーターで少しだけ

女子会で声高らかにほほ笑んで

惠

一文

正義

かこ

由子

きみ子

寿之

壽峰

高鷲

正邦

欣之

晴美

章子

きよみ

常男

勝矢

涼子

宏之報

令位子

久直

恵子

雨奇

宏之

瑞枝

宣子

菜々

ホイホイゴキブリ素直に入らない

AIも支えきれないプーチン氏

シミしわにポイントが付く夢を見た

雨上がり不要なカサを追連れに

ネジ巻くと雄弁になる古時計

長柳会(大阪)

大島ともこ報

雨乞いなら一肌脱ぐわ雨女

闇バイトネットで出合いはまる罟

恵みの雨時に牙をむいてくる

多数決少し遅れて手を挙げる

ごめんねの一言だけで雨上がる

ふるりの空き家を守る父母の墓

酔っててもいつもの場所に着地する

恥いっぱい包んで生きるのが笑い

いろいろな人生持つて同じ趣味

炎天下風鈴の音かき氷

久々の故郷の山河事も無げ

バランスを妻ファーストで整える

俄か主夫レシピ片手にまた味見

いくつもの出会いは愛が生まれた日

この出逢い誤解だったと妻が言う

フィルターを通して愛を確かめる

肩書きは専業主婦と言う名刺

久しぶり繋いだ妻の手が温かい

あやふやな数字に困るパスワード

電気代命と比べクーラーを

美緒

俊久

美穂

ひろし

紀の治

ともこ

孝代

幸子

正博

正美

隆彦

孝

ヒロ

くにお

靖博

淳司

隆明

直樹

澄子

純風

和子

たけし

由夏

光弘

おくみ

引越した気分だ部屋の模様替え

読めるけど書けぬ漢字が多くなる

難題を抱えて悩む青い星

難問とケーキを抱え友が来る

川柳花の輪(大阪)

川本 信子報

袖にしたイケメン娘を見直した

イケメンもみんな同じく老いていく

イケメンもいつときだけよビール腹

イケメンの周りで蝶になる熟女

ひと目見てズキンときた夫の友

メチャクチャに運動し過ぎ熱中症

好きなだけ応援をした甲子園

世の流れ減茶苦茶にした新型コロナ

川柳茶ばしら(愛知)

金子美千代報

動かない家人に笛を吹いてみる

優先席に並ぶスマホに杖が泣く

平凡な暮らし保てる有り難さ

結弦ちゃんの結婚そっとしてあげて

ふうもん吟社(鳥取)

山下 凱柳報

あらいやだほうけたまねはしんさんな

ほうけるなまだお迎えは来ませんぞ

エンディングノートはほうける前に書く

ほうけるなど俺の辞書には載ってない

(ほうける) 因幡方言で呆ける

登美子

克巳

福子

ふみ

信子

亜成

やすの

笑子

和織

順子

みち

博泉

信子

美千代

三樹夫

かつ子

美千代

凱柳

凱柳

一平

隆浩

八千代

凱柳

子が産まれ親の恩知る時が来た
早口のコントを嫌う老いの耳
運だけで後半戦も駆けるだけ
遠回り急がなくても明日がある
泥かぶる愛する家族守るため
継ぎ接ぎの人生だから味がある
青空に打ち明けようか胸の内
人間を拒み続けて水は澄み
平和への台本誰が持っている
台本の余白好き好き好きで埋め
悔やまれる書いたシナリオ全て没
不思議にも台本通り生きている
台本のない人間の白い道
人生は見えぬ台本迫って生き
神様に生きる台本渡される
男女とは流れに添うて海に入る
BGM自然に体動き出す
ありのまますっかり慣れたグレイヘア
あゝ無常自然の髪がなくなつた
あつからんと卒寿の母は自然体
天然と自然が同居わが夫
柿たわわ自然へ還る音がする
笑顔つていいね自然と輪ができる
仕返しにかむら返りに泣く夜中
仕返しを虎視眈々と狙つてゐる
仕返しは紙に納めて神棚へ
仕返しはしない負けるが勝ちの策

(門) 千代 宏章 紫陽 善平 金祥 千賀子 真理子 拓治 鐘旭 茶人 頼太 厚子 欣之 舞亭 峰明 節子 紀美江 敷章 みつこ 回春子 由紀女 無限 紫陽 勝 昌鼓 秋月

段末のエイの尻尾に刺されちゃい
仕返し銃は狙いを外さない
仕返しはしない君より大人です
まな板の鯉が指囁むこともある
川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報
この暑さ大好きだけど離れてよ
猛暑にも平気で入るサウナ風呂
暑がり屋冬になつたら寒がり屋
あちあち日本列島まつ赤ッ赤
ソーセージ車内に忘れ蒸し上がる
ないないを数えずあるあるを数える
セミ取りをする子が居ない夏休み
遠くから好きな娘見てた部活動
えいやあと判子を押して家を買う
赤ちゃんがわろたわろたと皆が寄り
昨日へは戻つてゆかぬと決めたのに
死の前夜夫の電話「ありがと」
死を覚悟遺影をおいて戦場へ
覚悟して老いねばならぬ余生の日
死神と話の覚悟昼寝覚め
土用の丑腹をくくつて内地産
腹決めて三十九度の町へ出る
覚悟してチャットGPTにトライする
老後などなんとかなると覚悟する
本物の鮭屋にたまに行きたいが
握り寿司最後はシャコでとめました

蟹郎 賢吾 みゆき 絃一 朝子 朝子 修平 和子 ゆきみ 初音 楓華 新録 厚江 こみつ 洋次郎 素子 眞理子 れい香 柳明 和夫 菊江 良種 紀華 宗鉄 英秋

米粒を握つただけで五つ星
翔平聡太握手をすれば大ニュース
最後には指まで食べる握り飯
飽きる程添つた夫とフルムーン
戒名とお話してる妻の数珠
首相の耳は初めから遠かつた
冬さらい言うてた口で夏はいや
後悔は遠いあの日に付いた嘘
認知症妻に受診を勧められ
ブラザ川柳(大阪) 藤塚 克三報
句会ではまだまだ青いブチトマト
菜園の不出来なトマト今盛り
さんざめく祭りの音頭にわかぶし
学校はほめてくれますこのスコア
ナストマトキュウリの花の風物詩
トマトむくひと手間かけて離乳食
あれ欲しい可愛い孫の甘い声
体型が目立たぬように遊ぶ服
未来永劫平和であれと原爆忌
目立たないところにさりげなくオシャレ
弁当の隙間を埋めるブチトマト
ケチャップでオムレツぱつと華やいで
わかやま吟社 松原 寿子報
原稿紙二枚を埋める小半日
面倒は白紙に戻すことにする

むべ 一歩 宏造 紀恵 祐康 勝弘 耕治 隆一 英坊 克三 園子 政夫 靖子 悦夫 景子 和代 一彌 清乃 弘光 正子 淳司 紀子 知香

何にでも化けて重宝新聞紙

あの時の二つ返事が重くなる

お気軽にお越し下さい言われても

お安い約束で忘れていらっしゃる

お札の言葉から人柄が透ける

電話口頭を下げている気配

合掌へお札の言葉包み込む

目に見えぬパンチハートに突き刺さる

腹立つとパンチの効いた味になる

増税の連打財布に効いている

パンチなら今でも打てる舐めるなよ

半端じゃないパンチの効いた激カレ

ハットするパンチの効いたコマシヤル

一発のパンチは父の愛だった

テリトリ壊すと怖い猫パンチ

一発のパンチにタオル投げ込まれ

川柳ささやま(兵庫)

北澤

桐民報

卒寿すぎまだ淡々と生きられず

年金で暮らせることに手を合わす

生れつき不治の病の眠い病

相撲とりジャンボ勝負と鍛え上げ

子供えの花も酷暑にすぐ負ける

子が育ち妻は私の母となる

朝に夕に農は楽しい励む日々

心から待っていたのはその答え

朝起きてラジオ体操始めます

よしこ
大輪

光

あきこ

小雪

佳子

寿子

富美子

夕胡

八茶

リエ

節子

敦巳

真弓

精子

倅子

哲男

稠民

重男

良子

美智子

哲夫

すみえ

ひとみ

照代

蟬の声聞こえた待った梅雨明けた

川柳ねやがわ(大阪)

籠島

恵子報

アホですわ風上ばかり立たたされ

恐ろしいワナは優しい顔で来る

どうしても合わぬ差額で徹夜する

かみさんが風上に居て平和です

蕎麦の香だ峠の茶屋はすぐ其処だ

風上に立つとひとりぼっちになる

風上に立つ心地よき知らぬまま

風上にバキユームカーが停つて

片足を鬼が掴んでいる悪夢

暴風雨降時に水で歩けない

人間が恐くて布団被つて

差額分こっそり裏でご褒美に

平均寿命超えた余命は白寿まで

消し忘れこげる匂いでどきりんこ

うっかりは日常茶飯事です傘寿

のめり込み朝が来たのも知らなんだ

うっかりが増えて大丈夫と訊かれ

うっかりをしあわせ税と母笑う

迂闊にも嘸喋ったおじぎ草

カバンの底で眠り込んでた当たりくじ

生きてるか生きてるよと案じ合う

これからは気ままに跳べる羽を買う

純子

勝弘

和織

亜成

祥昭

賀世子

武人

美砂子

いさお

欣之

ルイ子

かすみ

秀雄

信子

千鶴子

泰子

賢子

彰一

博

かずお

正靖

弘子

高鷲

朝子

常男

軒先のぶらり瓢箪見てくらす

農繁期不眠不休のバインダー

極楽に行けぬと知ってから気楽

タクシードライバーは良いんだとは呑む

叱られて平気な自分に腹が立つ

消しゴムで消して欲しいな世の惨事

会議室今日はネクタイして入る

想い出は一直線の海彼方

だったらいいな風上のはるらんまん

恵子

鈍甲

恵子

さちこ

恵子

智恵子

日出子

けいこ

凱柳

大鯰

麦青

道春

由紀子

完司

醉美蓉

照彦

龍枝

節子

重忠

高志

壽峰

郁夫

武彦

順子

銀杏

博泉

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

恵子

閑静な邸大きな塀の中
昼下がり居留守を使い長閑なり

川柳の遊ぼう会(大阪) 石田 孝純報

波に乗り波に溺れていく世間

まだまだとそろそろの波せめぎ合う

嫌いの波こぬまま好きが押しよせて

心臓の鼓動たしかめ部屋をでる

定年後波打ち際の漢たち

ブランコの揺れが止まらぬままで喜寿

あの人魚波にもまれてグッドボディ

汽車はガタン人はヨイシヨで動き出す

拗ねる振りしとけば動き出す男

世話好きは任せてくれと動き出す

四年ぶりに行事各地で盛大に

試合中バナナ一本またファイト

連れ合いの気分の波に揺れ動く

短冊に書ききれぬ程願ひ事

幸せのふり行間にある涙

歳月が徐々に抜ける隙間風

疲れてる今日は切身で生きてます

お父ちゃんうちが裏口開けといった

冷凍庫にスベアの脳と小豆バー

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

詐欺電話免許皆伝口車

ママチャリを捨てた理由はヘルメット

風露 雄大

満知子

次郎

えみこ

幸徳

晋一

美智子

はるみ

和男

雅美

爽也

千恵子

康雄

喜美子

恵子

恵子

てるひこ

よしみ

のり子

孝純

黒兎報

正子

春代

爺さまの自転車酔っちゃいないよね
必ず事故起きそう空飛ぶ車

要りますか空飛ぶ車理解不可
飾られて出番待つてる高級酒

週刊誌表紙を飾る親殺し

自叙伝のどこどころにある飾り

電飾みたい天気図のカミナリ記号

独り身になればゆっくり出来るかな

ゆっくりと島が沈んでいく地球

二人の世界ゆっくり回り観覧車

川柳塔なら

大久保眞澄報

楽しみは孫が一人できると言う

昼間から一人宴会妻は留守

孫が来てはしゃぐ毎日夏休み

休肝日ゼロで毎日飲んでいる

八月忌エンジョイ知らず散った兵

ウイズコロナ人生ともに楽しもう

猛暑の日昼寝ハワイの夢を見る

金のない事由エンジョイしています

アレグリアエンジョイしたよ3列目

介護され曲線で言う頼み事

琴線に触れる言葉に愛がある

温暖化超える酷暑化沸騰化

自らがこだわる線でなやみぬき

一線を退き見えた人間味

蟻日路 勝弘

契子

篤

久仁子

宏造

一弥

直子

黒兎

奈津子

恭昌

貫一

げんえい

勝弘

百合子

じゅん子

江里子

すみえ

ゆきみ

敬子

朝子

史郎

福治

栄子

エックス線に透けたまさかの腹黒さ
東欧の最新線から来た遺品

この星に誰が線引く国と国

喜寿を過ぎローカル線に乗り換える

八百万山の神までいる日本

鶴亀算孫に習って腑に落ちる

マイナンバー個人情報手の内に

なるほどを連発されて興がさめ

曲げもする強い信念札束が

なるほどをはてなマークが消す時世

手を合わす今日神様は留守でした

なるほどね二重瞼になっている

嘘つかれ気付かぬ振りも年の功

突き詰めれば裏で糸引く人がいた

人生のレシビ白寿に導かれ

ひと波乱ありそう妻のふくれ面

お財布に入り切らない札の束

カルメラをプツと膨らす白い粉

北のドンひとり膨れて恙ない

卒寿でのふくれつ面が愛らしい

膨らんだ餅がプシュッと深呼吸

川柳塔さかい(大阪)

内藤 憲彦報

満ち足りた時間うつとりクラシック

緑児の寝顔うつとりもう夜明け

一瞬のうつとり君は人の妻

則彦 隆一

優

崇明

薫

一步

勝久

行久

萌子

良岩

まさじ

定生

満作

ふりこ

弘子

裕之

寿之

ダン吉

和夫

みほ子

寿之

恭子

(中)佳子

浴衣着せ大人びた孫うっとり

絶景に足を取られて穴に落ち

人間の器を計るハブニング

靴の紐結んだ途端不意の客

演奏中突如マイクがハウリング

素人が運をつかんだ勘の冴え

披露宴花嫁急に産気付く

栗と思いきや諭吉さんうふふ

ハブニング期待し誘う化け屋敷

お隣と出雲大社でバツタリと

ボクの納涼滝を眺めてところてん

滝だつて夜は寝ますと落下音

プロポーズの声滝に消されてまだ独り

蟬の声真夏忘れる滝しぶき

ボランテア復興めざし滝の汗

登山道はつと一息滝ミスト

ブーチンが四島遊したら褒める

いつ死ぬか分からぬこれぞハブニング

友も古いハブニングでは無い計報

黙祷のさ中アラートが鳴った

あなたに逢えた人生のハブニング

核ボタンまさかまさかはないです

デートの日場所を間違え反古になる

酔い任せ出来た子供も居るかもね

快速で目的駅を通り過ぎ

ハブニングじゃないぞ地球の温暖化

廣子

舞夢

恵子

*(米) 俣子

玄也

世紀子

ひろ子

美津子

(田) 勝弘

(江) 勝弘

清

里子

志津子

さくら

和織

じゅん子

時雄

蕉子

五月

いさお

満知子

ダン吉

満作

義明

萌

和夫

少子化と過疎ハブニング起きないか

平和です蝶が一匹舞っている

へのへのもへじ一寸鼻だけ曲がりすぎ

兵役がちらつつき出した回れ右

減らず口ちよつとやそつと真似出来ぬ

平均年齢ちよつぱり過ぎて学びの輪

扶美代

川柳塔すみよし(大阪)

田中ゆみ子報

聞き上手裸にされているらしい

沈黙が苦手で口が閉じれない

悩んでる顔に見えないので困る

国境を越えたロシアは侵略者

負けず嫌いオセロで孫に負かされる

脱線が好きなく口です長電話

夜の闇ことさら悩み深くする

打ち明けてかえって深くなる悩み

やめなはれ追い越されるとあおる癖

凸凹を越える気迫が追開く

重湯からお粥になつて山越える

歯並びがとても綺麗な歯医者さん

口答えかわいひ孫の反抗期

口も手も出さず守ってくれた父

暇あれば悩みの種を拾つて

抜きん出てやつかみ受けて強くなり

キス迫りもろにくらつた猫パンチ

憲

進

憲彦

敏治

万紗子

扶美代

田中ゆみ子報

ダン吉

雅美

さくら

勝弘

とみ子

五月

俊雄

萌

まつお

ふりこ

志津子

いさお

廣子

憲彦

民子

大子

里子

福貴子

嬉しくなるとそつと鼻唄口ずさむ

二合で多弁三合越すと寝てしまふ

目も口も答えはノーと言つてます

嘘見抜きそうかそうかと許す母

一線を越えて後戻りは出来ぬ

天然うなぎ値段高いが身が厚い

悩んでも正解のない人生だ

他人のため身銭きつても動く人

けちんぼの父が残した億の金

二人して色んな山を越えてきた

言い訳はやめる妻には勝てぬから

無口だが彼は時々人を食う

サッカー場これでつくれとボンと億

暑い日も喋つて食べて口元気

毎日が越すに越せない悩み事

七十一キロおつと今日から断食や

ガラス越しの挨拶したが意味不明

川柳塔まつえ吟社(島根) 清水美智子報

流れつき今やふるさと松江人

長生きの秘訣浅瀬をマイペース

居する鬼か線状降水帯

鬼の目にうかぶ涙が水晶に

流れ目にささりイエスという反語

太郎の塔目ん玉にある疲労感

島津亜矢と握手した手で蚊を叩く

万紗子

篤

龍

寿之

克己

宏造

ゆみ子

裕之

満作

芳香

行兵衛

真桜子

一步

満知子

舞夢

蕉子

美籠

美籠

ビル

雪代

アントン

塩子

とも子

久枝

弘充

ブーチンよゼレンスキーと握手しろ
恐竜と握手したあとと強くなる
ポテンヒットから打者一巡の攻め
トンネルのため一本の巨樹が泣く
引き金を引く涙腺に命中す
泣くような苦しみ耐えた人生路
涙腺に鍵をかけたとチャップリン
太陽を冷やせ日本が焦げている
夜々にゴッドハンドを磨いてる

西宮きたぐち(兵庫) 緒方美津子報

三叉路の入り口打算よぎりだす
友情の狭間で迷う保証印
慎重しく生きた証に家ひとつ
「限定品」なぜか不思議と欲しくなる
置いたはずいつも不思議と老婆言う
バイキング迷う事なく全部とる
割勘に強いお方がおられます
認知症父が出かけて帰らない
本当のことは告げずの恋でした
なんでやら水しか飲んでいないのに
不思議にもいい人達に囲まれて
妻上機嫌ひとまずそっとしておこう
ひとまずは頼ってみるかAIに
波立てぬここはひとまず引き下がる
中締めでひとまず下戸を追い払う

あきら 孝子 德利 小鹿 ゆき子 豊仙 美智子 芳山 のり子 恭子 良種 俊雄 ゆきみ みよし 新録 勝弘 宗鉄 敦子 英秋 富次 邦男 千賀子 武彦

ひと付き合い馴染む馴染まずなぜ起る
あなた待つそんな私にさようなら
生き様の証を晒す立志伝
戦争を許して死刑許さない
お疲れと10時3時の骨休め
子の涙ここはひとまず許そうか
ニンゲンを迷わすチャットGTP
迷ったら必ず大きい方をとる
瘦せていた頃の証拠を待ち受ける
女性にはまずはキレイと言っておく
二割引きなら迷わずに買う鰻
ガン告知そうだとセカンドオピニオン
夕立にひとまず避難いざ酒屋
迷ったらかあさんの顔見て決める
苦節越え生きた証しの数数多
何でやら好きも嫌いも女偏
慰めも励ましもする缶ビール
あかつき川柳会(大阪) 磯島福貴子報
中国産でまあええか義母が来る
ダイビングキャッチに拍手また拍手
ぬるぬるの鰻生き抜く知恵らしい
「鰻の日」奴も言い分あるだろう
鰻食い精つけたのに子が寝ない
近大がうなぎを庶民価格にす
汚染水ウナギは何処で生きるのか

義幸 ひとみ 野鶴 洋次郎 義明 緑 和宏 宏造 隆一 廣光 盛夫 和夫 利子 恵美子 美津子 野薫 栄子 正明 朝子 ダン吉 北朗 冬のト 奈津

大阪は鰻より鰻や負けはせん
八・一五非戦の誓いなお固し
国会の八百長質疑反吐が出る
八百万の神怒りは沸騰中
八つつぁんと熊さん仲良く喧嘩する
八の字を並べて平和ハハハハハ
八月は悲惨な思い永遠に継ぐ
君の機転で八方丸く収まった
握手したから味方とは限らない
そもそものが敵と味方じゃない握手
グータッチより握手の方が気が通う
ごつごつの温かい手だ信じよう
ケンカした子供が握手すぐ笑顔
八十の手習いでする五七五
沖縄戦追いつめられて死のダイブ
トップレスでダイビングする古希の夢
飛ぶよりも着地練習せよと月
死にみやげやったらスカイダイビング
ダイビングもう好きになっちゃったから
議事堂でふとしたくなるダイビング
核禁へ耳傾けず目もくれず
使われて迷惑だらう除草剤
東電がIAEA拌んでる
検察は人権壊す機関かや
物価高わけは聞くなとウクライナ
ウクライナ被爆地だけはしたくない

はな 郁夫 征之 文聡 拓治ミ 文構 ひろし 敏子 浩子 信子 楓楽 万作 裕之 正 緑 一步 恵美子 忍 しげ子 正治 志津子 龍せん 光子 則男 峯二

空爆の絶え間絵を描く子ら真顔
健闘たたえ抱き合い握手球児達

六甲川柳会

糞谷 和郎報

塩梅の勘がゆれだす台所

デコボコのメンバー揃う夏祭り

友だちの名の宝ものメール来る

あの世とこの世日に日に壁が薄くなり

よく動き食べてストンと眠る日日

旅立ちの母へ施す薄化粧

何もかも違うふたりのこの暮し

喜怒哀楽デコボコ道の隠し味

台風もノロノロしてる盆休み

家族葬これ幸いの薄い縁

すんなりと巣には戻れぬ迷い蟻

やんわりと打たれた釘の正確さ

うたた寝のまま永遠に眠りたい

貸した千円今更返せと言ひ難い

七回忌今更悔やむ親不孝

裏方の影は薄いが欠かせない

十年もたつて今更どうするの

薄っぺらな知識も時には役に立ち

デコボコの道で鍛えた晴れ姿

デコボコを触覚頼り点字読む

凸淡路凹は琵琶湖でピタタンコ

誰やつた今更聞けぬ同窓会

正 康
福 貴子

義 博
盛 夫

紀 乃
廣 光

恭 子
美 恵子

ひとみ
和 宏

崇 史
狸 月

次 郎
利 恵子

千 賀子
正 美

敦 子
禎 之

忠 志
克 美

順 子
芳 江

隆 浩
博

「明日がある」当り前だと歌つてた

翔平聡太勝つておごらずよく眠る

生きている証か山も谷もある

隣にはトドが寝息をたてている

熱波だな真夜中蟬が騒いでる

いつからか皆が追い抜いて歩く

凸凹にしてから修理やってます

判押して重たくなつた薄い紙

あの頃の美貌戻してお願ひね

「はな眠る」言つてあの世へ行つたきり

ホームランでびたつと止めた蟬時雨

今更に既婚者でしたそれはない

ペラペラの紙が恐怖の武器になる

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

八十の手習いはじめ湧く元氣

甘辛い人生だつたと苦笑い

信念を曲げてる欲にからんでる

うさぎと娘とペアーシスルー

熱線で焼けた戦槁の思いなお

老いてなお旋毛まげてる一人膳

辛いけどうま味のあつた父の説

日々ニュース観るのも辛いウクライナ

もう少し地味なら何度でも着れる

風呂敷を派手に拵けてみたものの

この坂を越えようきつと明日が来る

道 子
弘

武 彦
宏

勝 弘
健 二

宗 鉄
寿 之

義 明
和 郎

利 子
祐 一

光 久

クローラーがなけりや人間どうしてた

監督が目立ちたがってアッピール

警察官派手に笛吹く事故の処理

もつともつとと猛暑を煽る蟬時雨

どん底に落ちても信念は曲げぬ

主婦歴が五十年もう飽きました

力むからいつも空振りしてしまう

社長だけ曲げる角度が浅い詫び

辛いときは見上げてみよう青い空

人の字の左の方が夫なの

鉄板の上で焼かれてる思い

生き様が熱い男のむこう脛

エアコンに深夜手当も払わねば

なんとしても曲げたい鼻が二三三人

針金の通りにならぬボクは松

なんやかや地球まるごと熱中症

夢破れ男は捨てた故郷へ

派手を捨て愚直に生きた土踏まず

四つ角を曲れば灯りつくわが家

水割りと今日の暑さを語り合う

川柳藤井寺(大阪)

鈴木いさお報

世間とはずれても老母の自己犠牲

老い二人ずれた会話も恙無い

ふる里は稲穂実つて秋まつり

プレートがずれて地上は大地震

義 明
正 彦

英 旺
満 作

(岩) 玲 子
廣 光

和 織
則 彦

哲 男
美 津子

武 人
眞 澄

勝 弘
一 歩

(初) 正 彦
北 舟

野 鶴
黒 兎

洋 志

久 仁雄

ちづる

さくら

かずお

姉妹も姉が逝くとはかきらない

喜代子

満知子

志津子

勝久

みつこ

満作

比呂志

シマ子

ひろ子

正義

勝弘

亜成

扶美代

まつお

憲彦

一步

ダン吉

瑠美子

いさお

岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

低山の帰り我等も縄暖簾

ふる里の欠片を拾う縄のれん

悩む子に声なくそつと肩を抱く

なれ寿しに母を偲んで空高く

縄のれん押し分け入る「いらっしやい」

忠彦 恵子 恭子 康則 敦己

新生児室わが子の足に天使の輪

素足好き元氣な証し母長寿

夏の置きぬ友を素足で出迎える

焼場に立つ素足の少年がひとり

渚行く乙女の素足まぶしすぎ

老い素足過ぎし人生きざんでる

プーチンよ戦争やめろ民の声

悔しさに声なき声で反抗す

風鈴からゆく夏惜しむ声がする

鬼さんこちら呼んでくれても老いの耳

勇気出し小さな声を出してみる

師の声が多読多作と攻めてくる

美しい声です耳が恋してる

さよならの数だけチャンスあつたのに

旗を持つガイドの話只で聞く

ああ無念あの日あの時あのチャンス

ボス猫がしっかりと守るテリトリー

ゆつくりと自分に合うた縄を縛う

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

機嫌よく生きて行くには金が必要

ベガサスの翼を内に秘めている

蛇口から暑い暑いの合言葉

イメージしても誰も知らないあの世

新聞に「地球沸騰」大見出し

愛などと別れ上手なきつね雨

香代 愛子 航太郎 ダン吉 喜代志 五十美 英夫 國代 ふさゑ 洋二 桃代 敏治 あかね あさ子 義泰 規子 珠子 ひろ子 紫陽 順子 八千代 楓花 幸子 美ツ千

今年が一番暑いと思う老いた今

プーチンを早く地獄へ閻魔さま

オヤジギャグここで一発うまいなあ

音出さぬ吹けよ風鈴暑い夏

上手口言う人苦手目をそらす

散歩には犬にも靴を履かせたい

大ばらを吹くのが上手い二枚舌

熱弁をふるう人から離れたたい

隣人は蛙の歌の合唱団

褒め上手良いとこ見つけ踊らせる

アフリカの大地に雨が降るように

イメージが良すぎる人に御用心

ロソクの曲がる暑さの幕参り

損をする人が支えるパチンコ屋

上司よりちよつと無能な振りをする

女子サッカー勝つイメージが空回り

四十度やはり体験したくない

講演会話し上手は寝させない

イメージがとっても悪い豚の鼻

犬猫も甘え上手が得をする

執拗に僕を狙ってくる熱波

あかつき川柳会(大阪)(前月分)磯島福貴子報

陽と風が緑の森で冥する

緑の黒髪女がおんなだった頃

新緑を暈す地球の温暖化

由紀子 風露 七七 久子 希榮良 コスモス 正人 熊四郎 麦青 雄大 小鹿 石花菜 芳光 紀の治 みちを ゆたか 余光 清明 重忠 規雄 完司 鈍甲 楓楽 壽峰

75回 岸和田市文化祭参加 第72回岸和田市民川柳大会

日時 2023年10月22日(日) 12時開場

(昼食は済ませてお越しください・
お茶は用意します)

会場 岸和田市立福祉総合センター 3階大会議室
(岸和田市野田町 1-5-5 ☎072-438-2321)

清興 音楽サークル・らんらん(女性コーラス)

課題と選者 (各題2句)・席題なし

| | | |
|--------|-------|---|
| 「救う」 | 冬のト | 選 |
| 「穏やか」 | 内藤 憲彦 | 選 |
| 「あっさり」 | 荻野 浩子 | 選 |
| 「ドラマ」 | 居谷真理子 | 選 |
| 「夜明け」 | 岩佐ダン吉 | 選 |

締切 13時10分

披講 14時30分

会費 1,500円

呈賞 「岸川賞」「文化祭賞」「操子賞」

問い合わせ先

岩佐ダン吉 072-428-0325 石田ひろ子 072-431-2672

雪本 珠子 072-423-3116 中岡 香代 072-423-5569

主催 岸和田市・岸和田市教育委員会

共催 岸和田市文化祭実行委員会

参加団体 岸和田川柳会

第45回 寝屋川・川柳大会

誌上大会として実施することになりました。

課題と選者 各題2句

| | | | |
|--------|----|-------|---|
| 「魔」 | 共選 | 居谷真理子 | 選 |
| 「魔」 | 共選 | 平松かすみ | 選 |
| 「顎」 | 共選 | 池田 武彦 | 選 |
| 「顎」 | 共選 | 伊達 郁夫 | 選 |
| 「レール」 | | 平井美智子 | 選 |
| 「ずたずた」 | | 土田 欣之 | 選 |

投句要領 既定の用紙(コピー可)・なければ、
便箋可

投句料 1000円 (切手不可)

投句締切 令和5年11月10日(金) 厳守

呈賞 各題 天位の句に呈賞

結果発表 12月下旬頃、発表誌送付

お問い合わせ・投句先

廣田 和織 TEL/fax 072-822-5823

携 帯 090-4905-3024

〒572-0840 寝屋川市太秦桜が丘7-17

新緑に出会って初夏に別れたの
梅雨明けの緑殊更目にしみる
骨休め緑のシャワーあびにゆく
緑児が笑える星であって欲し
昭和の悪夢夜空を棲めた焼夷弾
陽に染まる大阪城が美しい
もう爪は染めずあなたの子に戻る
もみじさん見事染めたね風の声
友禪の色鮮やかさ寒の川
自分色に染める余白を残して
じつくりと染めあげられたこの私

瑠美子 いさお 栄子 緑 ひろ子 一歩 心平太 ならずな 克己 常男 昌代

藍染にのめり込んでる手の青さ
解禁のマスク怖くてはずされず
喪が開けてエラいきれいにならばつた
声出せる応援やはりすかつとす
長髪も解禁されての甲子園
夏至が来た女子学生の白い肌
愛あれば邪魔はしません喉はとけ
四年ぶりマスク解禁妻の顔
言い訳はしないと決めた苦なのに
安全とはつきり言えぬ汚染水
三度目の結婚ついてくる不安

英雄 峯二 眞澄 敏 勝久 三成 哲夫 多代美 珠一 吾一 まさあき

この歳で心ゆるがす人がいる
乳房と命どちらも生かす道探す
八十路来て平らな道でけつまずく
好きにしる父の震えた低い声
観光で生きた沖繩武器要らぬ
悪政はどんどんひどく安倍亡き後
排水に安全神話稼働する
クラスターを送るバイデン戦犯に
人間に戻ろうせめて核だけは
白無垢は貴方の色に染まる意思

万作 和代 康信 ひとみ 敏子 博美 五二 進 丹吉 福貴子

柳界展望

四万十市観光協会賞

栃尾 奏子

私をスカレットにする赤だ

中村ロータリークラブ賞

真島久美子

悩みなら大きな河馬が食べました

四万十ロータリークラブ賞

高瀬 霜石

いないいないばあー君が笑ってくれるまで

四万十ライオンズクラブ賞

辻内 次根

大川は色即是空と流れ

大会賞

桑名 孝雄

地球儀のここが日本だ

四万十市長賞

藤田 武人

目覚めます

中村商工会議所賞

平井美智子

川は今日明日に向かっているところ

★第74回一朶の雲まつり

やま川柳大会。参加者

235名。同人・誌友成績。

秀句

黒田 茂代

残照にすんなり溶けてゆくふたり

秀句

真島久美子

デショウネでまとめる友と焼鳥屋

秀句

大内せつ子

伸びしろを信じリセツトくり返す

秀句

真島久美子

大落暉いいえリセツトボタンです

秀句

真島久美子

手に触れて転んでいたのだと気づく

秀句

真島久美子

漆器から飛び出してゆく深夜バス

▽動向△

○木本朱夏さん（和歌山市）は、第23回四万十川柳全国大会において「川柳の力」と題して講演された。

○倉吉川柳会（鳥取県）の会長が竹信照彦さんから大羽雄大さんに交代。

▽訂正とお詫び△

○八月号P97後ろから3行目、大義名分掲げて↓大義名分掲げて。九月号P36中段17行目、新聞を聞く時間は↓新聞を聞く。時間はP79上段「ショツク」4句目、P81上段「責任」4句目、米田理恵子↓米田利恵子。P81上段「責任」16句目「酔ったって割り勘なんぼびったんこ」作者 敏森廣光↓輿水弘。

▽新誌友紹介△

四国中央市 大西 進

紹介者 大内せつ子

松江市 椿 豊

紹介者 石橋 芳山

寝屋川市 長尾美智子

紹介者 藤村 亜成

大阪市 野坂真美子

紹介者 平井美智子

京都市 松村 鈴子

▽常任理事会△

9月7日。出席21名。①

人事異動について②六賞

選考結果について③本年

度収支報告最終版④「第29回川柳塔まつり」と関連事項について⑤「第12回春の川柳塔まつり誌上大会」の題と選者について⑥「100周年記念行事」について⑦懸案事項「見直し案」について⑧定例確認事項。⑨その他
次回常任理事会11月7日
(木) AM10

第二十五回全日本川柳誌上大会

(令和柳多留)入選作品

(参加者1,530名)

令和柳多留賞

シヤガールの青に戦禍は似合わない

兵庫県 澁谷 さくら

川柳大賞

山脈を越えて大きくなる翼

秋田県 三浦 千両

NHK会長賞

平和への願い地球がひびき合う

岐阜県 武藤 敏子

日本青少年育成協会会長賞

子どもらの笑顔マスクを突き抜ける

福岡県 木村 久則

全日本川柳協会賞

自画像に花の野望が秘めてある

鳥取県 木天 麦青

全日本川柳誌上大会賞

続編の限りへ青い櫂を漕ぐ

山形県 江本 光章

道化師よ集え世界は餓えている

秋田県 荒川 一滴

未知数のかたまり青い実のたわわ

福岡県 松井 昌子

内輪もめしてる場合じゃない地球

兵庫県 藤原 紘一

猿よ待て砲弾の音消えるまで

山口県 上野 悦子

第一次選者

「内」

瀧尻 善英

覧 のぶなが

「マスク」

鈴木 さくら

荒川 八洲雄

「飛ぶ」

菅沼 匠

西村 寛子

「青い」

平川 柳

西 美和子

「待望」

渋谷 溪舟

間瀬田 紋章

第二次選者(50音順)

赤井 花城

天根 夢草

いしがみ 鉄

坂下 清

仁多見 千絵

| 句会名 | 日時と題 | 会場と投句先 |
|-----------|--|--|
| 川柳塔打吹 | 14日(土) 13時30分締切 奥・ひく・ばたばた・席題 | 会場 倉吉市上灘町9 上灘コミュニティセンター 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局 |
| 川柳藤井寺 | 15日(日) 14時締切 運動・じわじわ | 会場 パープルホール 4F 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお |
| 豊中もくせい川柳会 | 16日(月) 14時締切 果物・鍛える・これから・自由吟 | 会場 豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曽根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦 |
| 川柳ねやがわ | 17日(火) 13時締切 空っぽ・オンボロ・落ち込む おもしろい・自由吟 | 会場 寝屋川市産業振興センター 〒573-1104 枚方市楠葉丘1-9-13 藤村亜成 |
| 川柳さんだ | 17日(火) 13時30分締切 案外・高い・バッグ・笑う 自由吟 | 会場 キッピーモール 6F (JR三田駅前) 投句先 〒669-1322 三田市すずかけ台3-4-1 E棟804 村田 博 |
| 川柳たちばな | 21日(土) 13時45分締切 印象吟・音(互選)・広い 自由句 | 会場 東園田町総合会館 2F 阪急園田駅北口徒歩2分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 |
| 川柳塔みちのく | 21日(土) 17時締切 葡萄・もやもや・割る | 会場 未定 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605 |
| はびきの市川柳会 | 22日(日) 14時締切 黄・賑やか・くるくる・席題 | 会場 陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷺」駅下車 北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ |
| 岸和田川柳会 | 22日(日) 第71回市民川柳大会 | 会場 岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄岸和田駅東へ徒歩5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-18-27 雪本珠子 |
| 川柳ふうもん社 | 22日(日) 13時から 自由吟・太い・頭・夜明け 席題 | 会場 県民ふれあい会館 4F 鳥取市扇町21 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥 |
| 南大阪川柳会 | 23日(月) 18時締切 逆境・ごまかす・エネルギー 雑詠 | 会場 大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒569-1116 高槻市白梅町5-15-1008 松岡 篤 |
| 川柳塔すみよし | 28日(土) 14時締切 父・たたく・ブロック | 会場 住吉区民ホール集会室4(図書館棟2F) 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお |
| 和歌山三幸川柳会 | 28日(土) 13時15分締切 旅・早い・気持 | 和歌山商工会議所 4階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛 |

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

★上記は年初の予定。諸般の事情のため、詳細は各柳社にお問い合わせください。

10月各地句会案内

(開催日順)

| 句会名 | 日時と題 | 会場と投句先 |
|----------------------|---|---|
| 川柳塔 な　　ら | 5日(木) 13時50分締切 あぜん・じわじわ・のぞく | 会場 奈良市中部公民館 近鉄奈良駅③番出口徒歩5分 奈良県磯城郡川西町結崎421-64 長谷川崇明 |
| 倉吉柳会 | 7日(土) 14時締切 汗・眉・チャンス・席題 | 会場 倉吉市明倫公民館 投句先 〒682-0722 東伯郡湯梨浜町はわい長瀬1028-1 天野道春 |
| 川柳塔 まつえ社 ま　　吟 | 7日(土) 13時40分締切 掃除・弾む・軽い・品 | 会場 雑貨公民館 〒690-0012 松江市古志原7-19-19 中筋弘充 |
| おりひめ☆ ひこぼし 川柳会 | 7日(土)消印有効 ちょっと・集合・ひとやすみ | 投句先 〒573-0095 枚方市翠香園町2-7 『おりひめ☆ひこぼし川柳会』 藤田武人 |
| 西宮北口 川柳会 | 9日(月) 13時30分締切 席題・鯨・おごる・半分 自由吟 | 会場 西宮市立中央公民館 6F 講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫 |
| 川柳塔 わかやま 吟　　社 | 9日(月) 14時10分締切 兼 題＝小指・苦しい・スリム 課題吟＝犬 | 会場 和歌山県JAビル11階 兼 題 〒642-0024 海南市阪井652-14 小谷小雪 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町2-208-5 柴原道夫 |
| ほたる 川柳 同好会 | 10日(火) 13時30分締切 林・森・嬉しい・さあ | 会場 豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曽根2-4-1 水野黒鬼 |
| 川柳塔 さ　　かい | 10日(火) 14時締切 しまった・重い 折句：あ・お・き | 会場 東洋ビル2F (堺東駅北西改札口から2分) 欠席投句先 〒599-8122 堺市東区丈六77-4 齋藤さくら |
| 川柳 あまがさき | 10日(火) 14時締切 拾う・ヒント(連記)・まさか 自由吟 | 会場 東園田町総合会館2F 阪急園田駅北口徒歩2分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 |
| あかつき 川柳会 | 13日(金) 材・炊事・トリック・時事吟 | 会場 大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2F203会議室) メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪市天王寺区3-6 木村ビル2階 あかつき川柳会 |
| 城北川柳会 | 14日(土) 開場13時 締切14時 好き・ドッキリ・思案・自由吟 | 会場 旭区老人福祉センター 3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口を左後側 投句先 〒536-0001 大阪府城東区古市1-8-14 江島谷勝弘 |
| 川柳 とんだばやし 富柳会 | 14日(土) 名月・盗む・自由吟・席題 | 会場 富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0066 富田林市錦織北1-14-6 中村 恵 |
| 六甲川柳会 | 14日(土) 14時締切 席題・派手・ぐらぐら・運ぶ 自由吟 | 会場 灘区民センター 5階 E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲内 〒658-0083 神戸市東灘区魚崎町中2-12-5 敏森廣光 |

編集後記

のない作家の本を中心に読みあさった。

★骨折で入院していた期間、腰への負担を軽くするために、座るのは30分以内に制限されていた。食事とパソコンを使うとき以外は、ベッドに寝転んだままで過ごしたが、全く苦にはならなかった。本を読んでいれば、知らぬ間に時間が経つからである。

★寝転んで本を読むのは苦ではなく、というよりも、中学校2年頃から寝転んだまま本を読むようになり、本を読むときには寝転ぶのが私にとって一番楽なスタイルなのである。

★家から持ってきてもらった本を読んでしまっただけからは、病院の談話室の本棚を利用した。時代小説や推理小説が多かったが、今まで読んだこと

のない作家の本を中心に読みあさった。

★退院後、病院の本棚で出会った野口卓『軍鶏侍』シリーズを読み終え、岡本さとる『取次屋栄三』シリーズをせっせと読んでいたところ。もちろん寝転んで。

◆元気そうねと言われるが、内科と脳神経外科に定期的に通院している。

◆内科の待合室にいると、おじいさんが受付であれやこれやと話す声が聞こえてきた。

◆若い、受付の女性が応対している。どうやらもらっている薬のことを訴えているらしい。

◆聞き終わって受付の女性に「お薬のことは、診察の時に先生にお話してもらっていいですか」と、訊く、というよりは、丁寧語で伝えた。

◆ああ、まずい、と思う

◆村木風著の「まいまい

ひとこと

自分の感受性くらい

「自分で守れ／ばか者よ」これは茨木のり子（1929-2006）の詩の一節である。何と素朴で力強いつぶやきであろう。私はこの詩に半生を支えられたと言っても過言ではない。

茨木のり子の詩には魂のほとばしるような、いのちの言葉が紡がれる。それは戦争に奪われた青春の深い傷みの声でもあろうか。ま

た、時代に翻弄されながらも自分の目と耳を信じ、大地にすつくと立つ姿が私には見える。

いつの日か私も人の心に灯をともせるような一句を紡ぎたいものだと思う。冒頭の結句の前の一節を紹介しよう。

「駄目なことの一切を／時代のせいにはするな／わずかに光る尊厳の放棄」

（饗庭 風鈴）

た。案の定おじいさんには意味が伝わらない。何借りし面白く読みまし

度も聞き返されるが、同。司馬遼太郎の秘書だった作者が、暗愚で低評価の徳川家重を珍しく描いた330ページの単行本。

◆吉宗の長男ながら生まれつきの脳性麻痺、尿意も感じない等の障害ゆえに、まいまいつぶろ（かたつむり）と揶揄された。

◆家重がなせ九代將軍に成りえたかが描かれる。

◆家重と直に会話ができた。一度読まれては如何でしょうか。（憲彦）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(12月号)

地名

市都
道府
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から14時までにご利用いたします。

檸檬抄投句用紙

「彩り」(10月15日締切)

12月号発表

川本真理子 選 — 共選 — 鈴木いさお 選

B

A

地名

市都
県道府
姓雅号

切らないで下さい

B

A

地名

市都
県道府
姓雅号

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

| 氏名 | 住所 | 電話 | 紹介者 |
|----|--------|----|-----|
| | 〒 — | — | |
| | | — | |

○ ○

年 年

月 月

から から

一年 半年

5000円

9800円

該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980-4-298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

作品募集

12月号発表表 (10月15日締切)

| | | | | | |
|-------------|---|---|--|--|--------------------------------------|
| 初歩教室 「足」 | 一路集 (2句) 「百」 「屈」 「く」 「(3句)」 | インスピレーションナビ (2句) 大柿西泰世 池田純夫 水野黒兎 担当 | 檸檬抄 (2句) 「彩り」 () 鈴木真理子 共選 | 愛染帖 (2句) (8句) 新川小島蘭幸 木家大輪 完司 共選 | 川柳塔 (8句) 小島蘭幸 上島大輪 幸司 共選 |
|-------------|---|---|--|--|--------------------------------------|

初歩教室「足」は1月号発表

1月号
檸檬抄「半端」
一路集「影」「いよいよ」
初歩教室「屋根」

第29回 川柳塔まつり

とき 2023年10月7日(土)
開場:午前11時 出句締切:正午 開会:午後1時
ところ ホテル アウィーナ大阪 4階 金剛の間
〒543-0031 大阪市天王寺区石ケ辻町19-12
TEL 06-6772-1441

会費 2,000円 (記念品呈)
おはなし フレイル予防のための「食」と「社会参加」
井尻 吉信 氏

兼題 (各題2句・欠席投句拝辞)
「刻む」 藤井 智史 選
「まっすぐ」 藤田 武人 選
「揺れる」 大久保真澄 選
「未来」 栗原 道夫 選
「笛」 片岡 加代 選

事前投句 「自由吟」 小島 蘭幸 選
(受付済み)

主催 川柳塔社
〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-14-17
花野ビル201号室
電話 06-6779-3490

本社 11月 句会

7日(火) 午後13時から

兼題「華やか」「ガチャン」
「あなどる」「家族」「自由吟」

川柳塔柳箋

3冊 送料共 1,000円

事務所あてお申し込み下さい。

〒543-0052
大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室
発行人 小島 和幸
編集人 栗原 道夫
印刷所 美研アート
発行所 川柳塔社
電話 (06) 6779-1349 〇番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

定価 八百円 (送料100円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇二三年(令和五年)十月一日発行

川柳・俳句・エッセイ・小説 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10

TEL (06) 4800-3018

FAX (06) 4800-3028

Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp

ホームページ <https://www.bikenart.com>

川柳塔のホームページアドレス <https://senryutou.net>

コーキコーポレーションは 川柳塔を応援しています。

旬箋

川柳塔本社句会と同じ旬箋

サイズ 4.5cm × 25cm

厚み 90kg

一箱 7000 枚入り 代金 5000 円(送料込)

申込先 川柳塔社 電話・FAX 06-6779-3490

※ 到着後、代金を下記の郵便振替口座へお振り込み下さい。

加入者名 川柳塔社

口座番号 00980-4-298479

第12回卑弥呼の里誌上川柳大会

兼題と選者(各題2句)

「自由吟」 浪越 靖政・大西 泰世 共選

「まさか」 中前 棋人・樋口由紀子 共選

「ふわり」 平 川柳・鈴木 順子 共選

「積む」 もりともみち・木本 朱夏 共選

「色」 横尾 信雄・赤松ますみ 共選

投句用紙 専用用紙(コピー可)

広報募集 令和5年10月から

締切 令和6年1月15日(月) 消印有効

参加費 1000円(切手不可) 発表誌呈

投句先 〒842-0103

佐賀県神埼郡吉野ケ里町大曲2426-2

卑弥呼の里川柳会 真島久美子

TEL・FAX 0952-52-1061

賞 各題特選1句・有田焼

各題佳作5句・図書券

(その他サプライズ賞あり)

※ 投句用紙は11月号に同封します